（6）土坑

011号土坑（Fig.5，200～205）

A区第1面，C－E－1～3グリッドで検出した土坑である。半分程度が調査区外に出る様なので，全形は知りえない。調査しえた部分で，長辺4m以上，短辺約3.7mの隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは，40～60cmをはかる。

埋土中から，多くの遺物が出土したが，一括集中して廃棄した風はなく，また埋土には獣骨も含まれていたことから，生活残滓を捨てたものと思われる。埋土下位より漆器碗が出土した（Fig.200）。黒漆に朱で扇を描くもので，繊細かつ大胆な筆の運びがうかがわれる。残念ながら，木質の遺存状態は最悪で，ほとんど漆膜のみとなっており，取り上げられなかった。

出土遺物をFig.201～205に示す。1～26は，土師器である。外底部は，すべて回転糸切りとする。内底にナデを加えるものと，行なわないものが，相半ばする。土師器の坏皿は，点数が非常に多く，図示しきれないので，法量を計測し，口径と器高についてのみドットグラフにおとした（グラフ2）。ただし，このグラフは1～26を含まない。さて，グラフと図をみると，大まかには皿，坏それぞれに法量が集中していることに気付く。しかし，ごく少量ではあるが，これに乗らない例もある。皿では1，坏では26がそれである。1は口径7.2cm，底径6.2cm，器高1.9cmで，筒形に立ち上る体部を持つ。26は，口径16.8～17.0，底径12.0～12.2－2.6～2.9cmで，形態的には他と変わらないが，図抜けて大きい。何らかの機能分化を反映したものだろう。なお，22には煤が付着しており，灯明皿として用いたことを示している。27は，**瀬戸美濃窯**の小皿である。口縁部付近に，灰釉がかかる。28は**褐釉陶器**の合子の身である。天井部に小さな穿孔がある。29は，**青白磁**の壺である。31～37は，**白磁**である。31～35は，口ハゲにつくる。37は，見込みの釉を輪状に掻き取る。高台内に墨痕がのこる。

38～47は，**青磁**である。38・44は小碗，

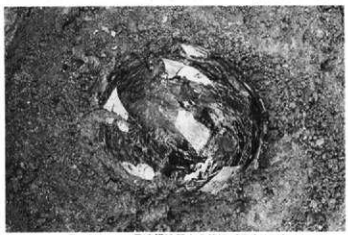
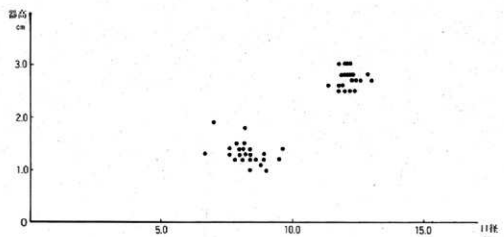


Fig.202　011号遺構漆器出土状況（北東より）



グラフ2　011号遺構出土土師器計測値

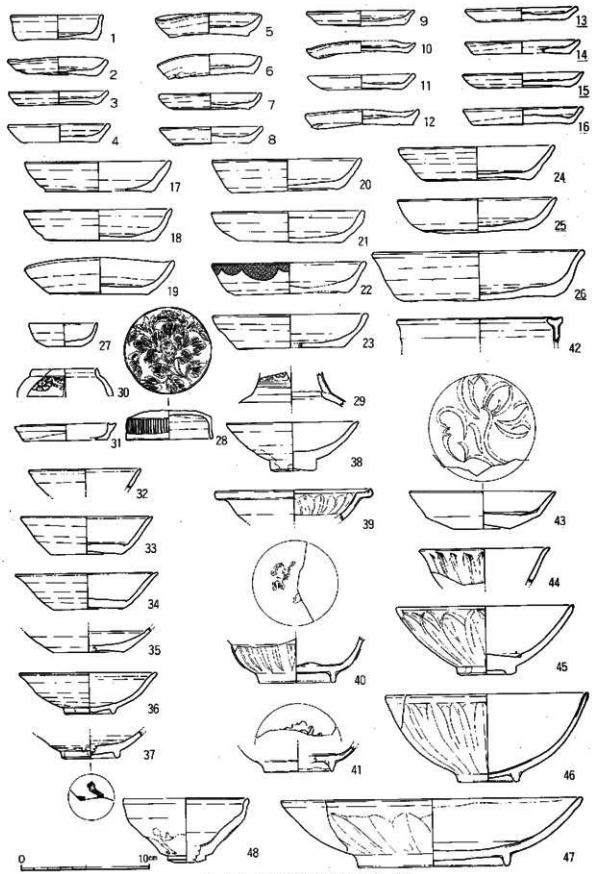


Fig.201　011号遺構遺物実測図1（1／3）

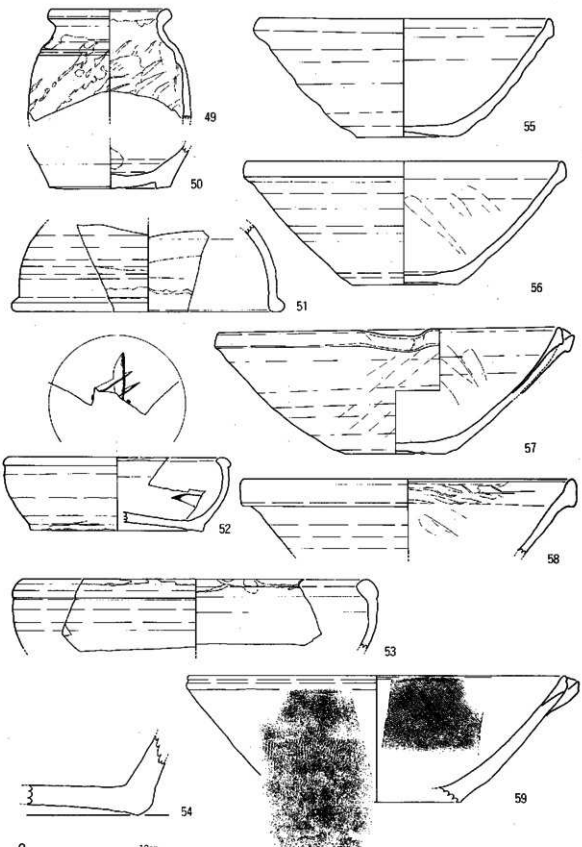


Fig.202　011号遺構遺物実測図２（１／３）

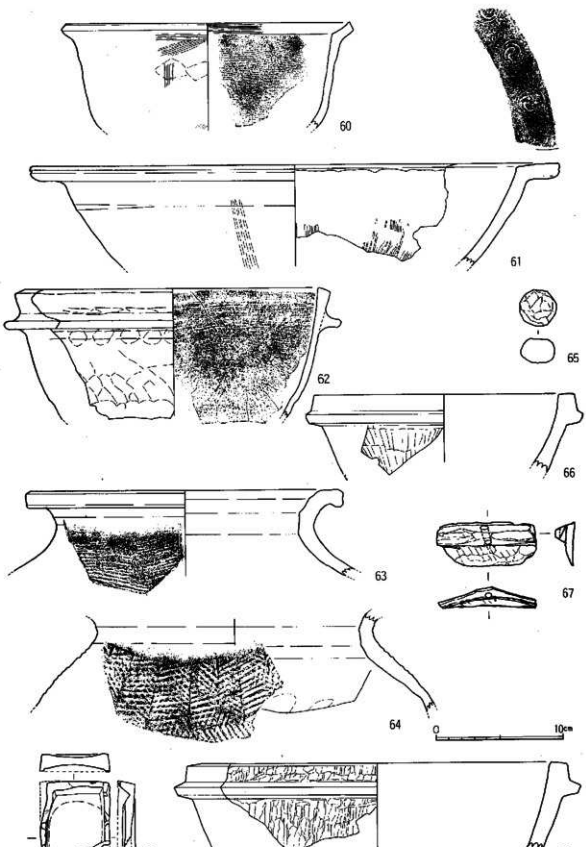


Fig.203　011号遺構遺物実測図３（１／３）

39～41は小鉢，42は香炉，43は皿，45・46は碗，47は中皿である。40・41・46・47は，全面施釉の後，高台畳付の釉を掻き取り，露胎とする。48は，天目茶碗である。49～54は，陶器である。49は黒釉の瓶，50は壺，51は蓋で，オリーブ色の釉を施す。52は，黄釉鉄絵の盤である。口唇には，灰色の目土が付着する。54は大型壺（甕？）である。55～58は，東播系須恵器のこね鉢である。55の内面には，ベッタリと自然釉が付着する。黒色に青色を流した様な発色で，厚いガラス質になって内面全体を覆っている。59・61・62は，瓦質土器である。59はこね鉢で，使用のため内面は磨滅している。61は鍋であろうか。径41.6cmと大型である。鍔状に折れ曲った口縁の上面に，左三ツ巴のスタンプ文が押されている。62は羽釜である。60は土鍋である。口縁を「く」字型に折り曲げる。体部外面には，煤が付着している。63・64は，須恵器系陶器である。ともに，体部外面には叩き目を残す。63では，叩き目は頭の屈曲部まで追えるが，ナデ消されている。65～69は，石製品である。65は，毬杖玉である。砂岩を摘打している。66・68は，滑石製の石鍋である。外面には，煤が付着する。67は，滑石製石鍋の再加工品である。ちょうど耳の部分で，体部側を削って，平担に仕上げる。コテ状を呈するが，再加工後の用途は不明。69は，硯である。安山岩製。断面を見ると，陸から急に傾斜して海

Fig.201-28

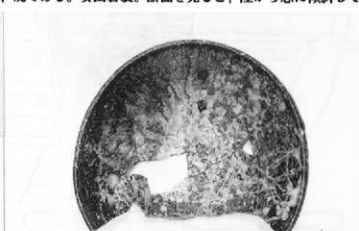


Fig.202-55

Fig.202-57

Fig.204　011号遺構出土遺物1

になるが，これは陸部が使いこまれて磨り減り，大きく凹んでいるためであろう。

この他，常滑窯と思われる須恵質の高台付こね鉢の破片，鉄小刀，鉄器片などが出土した。

おおむね，14世紀前半代の遺構と考えている。

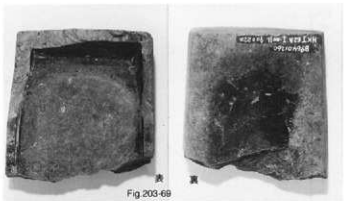


Fig.203-69

Fig.205　011号遺構出土遺物２

012号遺構（Fig.206～210）

A区第１面，K～L－11グリッドから検出した土坑である。当初，掘り込みが２段になっていたことから，木棺墓を想定して掘り始めた。掘り上げたところ２段目の長方形の部分の床面の壁際数ケ所から，木杭の痕跡がみつかった。したがって，木棺ではなく，壁材として板を立て，これに接して内側に杭を打っておさえたものであると判明した。この木室状の部分は，長辺200cm，短辺は北西壁で44cm，南東壁で58cm，検出面からの深さは24～32cmをはかる。周囲の掘りかたは，長辺356cm，短辺110cmの隅丸長方形を呈するが，埋土が周囲の土と類似して区別がつけ難く，深さは確認できなかった。

Fig.206　012号遺構（北西より）

木室内を中心に，多くの遺物が出土した。ほぼ全面に散在しており，意図的なものは感じられない。木室を埋めこむ過呈で，入れこんだものと思われる。木室の用途は確定しがたいが，溜枡の一種を想定したい。

出土遺物を，Fig.208～210に示す。１～22は，土師器である。土師器の出土量が多かった為，グラフ３にその計測値をドットでおとした。大多数のⅢ，坏は集中した数値を示すが，１のⅢ，21・22の坏の様に，全く異なるものがある。１は口径は最も小さいにもかかわらず，器高は最も高く，口径6.9cm，器高1.8cmをはかる。21・22は大型品で，21は口径15.2～15.7cm，器高3.4cm，22は同じく18.0cm，3.9cmをはかる。ちなみに，その他の土師器の法量を示すと，Ⅲは口径7.2～8.8cm，器高1.1～1.4cm，坏は口径12.0～13.2cm，器高

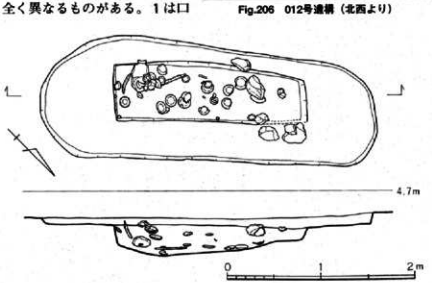
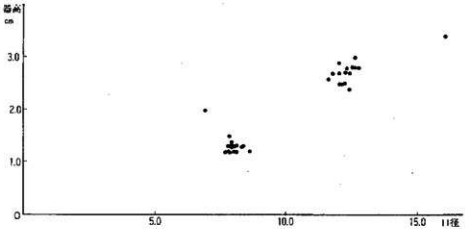


Fig.207　012号遺構実測図（１／40）



グラフ3　012号遺構出土土師器計測値

2.4～2.8cmである。土師器の皿・坏は，すべて回転糸切りである。内底のナデ調整は，皿では行うものが少数，坏では逆にナデるものが多数となっている。23～26は，白磁の皿である。口縁を口ハゲに作る。27は，青白磁の碗である。28・29は青磁である。28は碗・29は小鉢で，口縁のみの28も含めて，全面施釉の後，高台畳付の釉を削り取るタイプである。29の見込みには，双魚文がみえる。30は，天目茶碗である。黒褐色の釉を施す。31～34は，陶器である。31・32は，黄釉の盤で，同一個体の可能性も考えられる。33は褐釉の壺の底部である。おそらく，四耳壺であろう。34は，大型の甕の口縁で

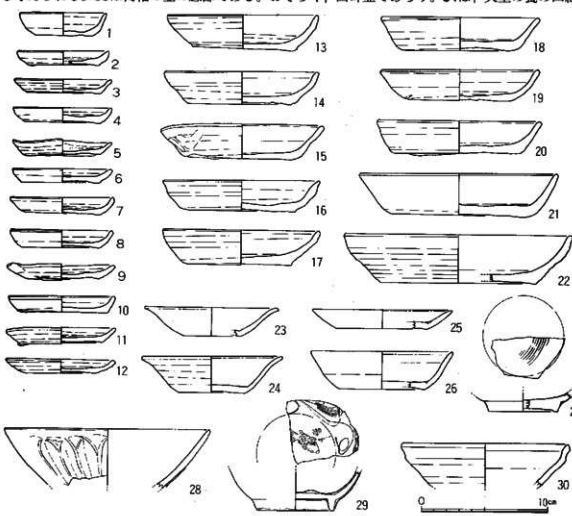


Fig.208　012号遺構遺物実測図1（1／3）

ある。掲釉を施す。35・36・38・39は，**瓦質土器**である。35・36はこね鉢で，内面の下半部は使用のため，磨滅している。38・39は，鍋である。口縁部内面は「く」字状に屈折し，口縁端部は跳ね上げ口縁状を呈する。内面は，全面を刷毛目で調整する。37は，**東播系須恵器**のこね鉢である。40は，**須恵器系陶器**の壺である。体部外面には，格子目の叩き痕跡を残している。41は**丸瓦**片である。42は**砥石**である。キメの細かい粘板岩で，仕上砥であろう。

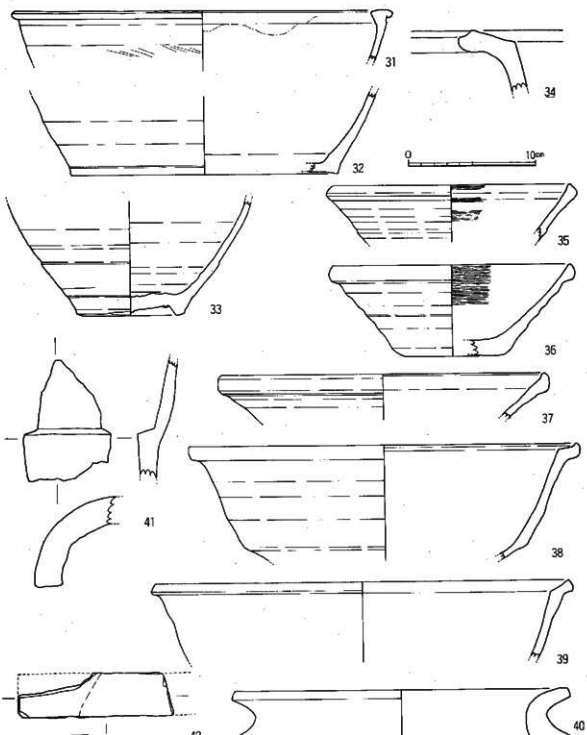


Fig.209　012号遺構遺物実測図２（１／３）

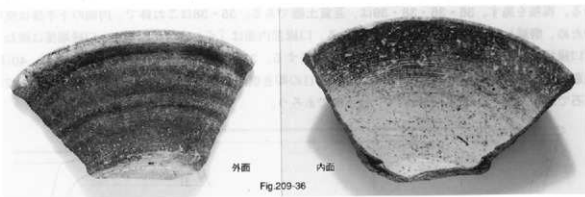


Fig.210　012号遺構出土遺物

この他，滑石製石鍋，鉄小刀などが出土している。
14世紀前半代の遺構と考えられる。

026号遺構（Fig.211・212）

A区第1面，N−K−14グリッドから検出した土坑である。後述する27号遺構（土坑）に切られる。長径80cm，短径64cmの不整楕円形を呈し，検出面からの深さ約10cmが残っていた。

出土遺物を，**Fig.212**に示す。1〜3は**土師器**である。いずれも坏で，底部を回転糸切り，内底部にナデ調整を加える。口径−底径−器高は，それぞれ12.6−8.5−2.6cm，13.1−8.0−2.9〜3.1cm，13.4−8.7−2.4〜2.7cmをはかる。この他，Ⅲも出土しているが，小片のため図化していない。すべて回転糸切り底を持つ。4は**早島式土器**（＝吉備系土師質土器）椀である。内面は平滑に整えられる。外面の口縁部付近は横ナデ調整，下半部は指頭押圧される。5は，**瓦質土器**のこね鉢である。

これらの出土遺物からみて，14世紀前半頃の遺構と考えられる。

Fig.211　026号遺構（南西より）

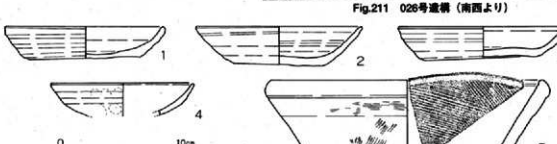


Fig.212　026号遺構遺物実測図（1／3）

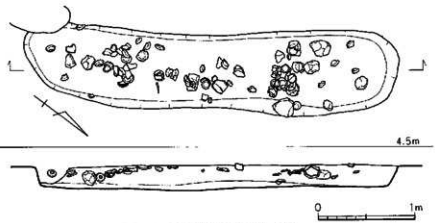


Fig.213　027号遺構実測図（1／40）

027号遺構（Fig.213～217）

A区第1面，L～N－13～14グリッドから検出した土坑である。長辺3.6m，短辺0.8mの細長い隅丸方形，もしくは溝状を呈する。検出面からの深さは，24－26cmであり，いく分かの削平は受けているものと考えられる。

埋土中から，土師器を中心とした多数の遺物が出土した。Fig.213にみる様に，土坑内にはまんべんなく散らばっており，また垂直分布をみると，西に高く，東に低い。このことは，土坑が埋っていく過呈で，西側から遺物が流れ込んだことを示しており，意図的に配置されたものとは，考えにくい。土坑本来の性格は不明だが，遺物は土坑の機能が失われた後に廃棄されたものと言えよう。

また，本土坑からは早島式土器（＝吉備系土師質土器）椀が数点，しかも完形に近い形で出土している点に注意したい。搬入土器である早島式椀が，数個体以上まとまって捨てられた，即ち，所蔵・使用されていた背景は，別途考えなくてはならないが，瀬戸内海海運との関りを思わない訳にはいないだろう。

グラフ4には，土師器の皿・坏の法量を示す。全体の2分の1以上を残す破片を主に，坏20点，皿24点を計測した。すべて，外底部は回転糸切りする。注目される点は，011号遺構，012号遺構の場合と同様に，大半の土師器がほぼ一定範囲の法量に集中するが，皿では口径が小さいのに対して器高が高いタイプ，坏ではひときわ口径・器高が大きいものがあることで，前者では口径7.0cm，器高1.8cmの皿，後者では口径16.6cm，器高4.1cmのものがこれにあたる。

Fig.217－1～4は，早島式土器（＝吉備系土師質土器）の椀である。いずれも，内面を平滑に整える。1.の内面の口縁直下には，コテあての痕跡がみられる。高台は比較的円に近いが，高台を粘り付ける指押えによってひずみが出ている。2の口縁には油煙がついており，灯明皿に使われたことを示している。また，4の見込みは，輪状に粘土が付着している。重ね焼きの痕跡であろう。5～7は**白磁**である。5は口ハゲの皿である。6は，見込みの釉を輪状に掻き取る。7は，水注の頸部である。8は**土鍋**である。口縁は，逆L字型に折り返す。内面はナデ調整，外面は刷毛目調整する。外面には，煤が厚く付着する。9・10は，**常滑焼**のこね鉢である。同一個体の可能性がある。内・外面を横ナデ調整する。内面は，使用のために磨滅している。11～13は，**瓦質土器**である。11・12はこね鉢である。11は，須恵質とも言える焼成であり，内面の調整に刷毛目調整を用いず，横ナデ調整とする点など，瓦質土器のこね鉢とするには，疑問も残る。東播系須恵器の可能性もあるということを，付け加えておく。13は壺である。表面は剥離気味で，調整ははっきりしない。14・15は**陶器**である。14は、

Fig.214　027号遺構（北西より）

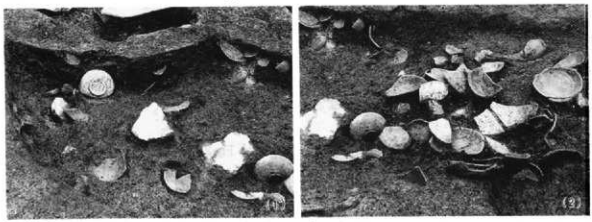
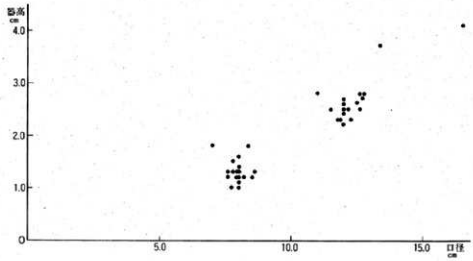


Fig.215　027号遺構遺物出土状況（(1)・(2)とも北より）

褐釉の四耳壺である。15は，うすく褐釉をかけた大型の四耳壺の底部である。
この他，青磁（龍泉窯系鎬蓮弁文）の小片が出土している。
おおむね，14世紀前半代に編年することができよう。



グラフ4　027号遺構出土土師器計測値

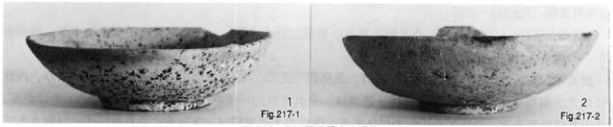


Fig.216　027号遺構出土遺物

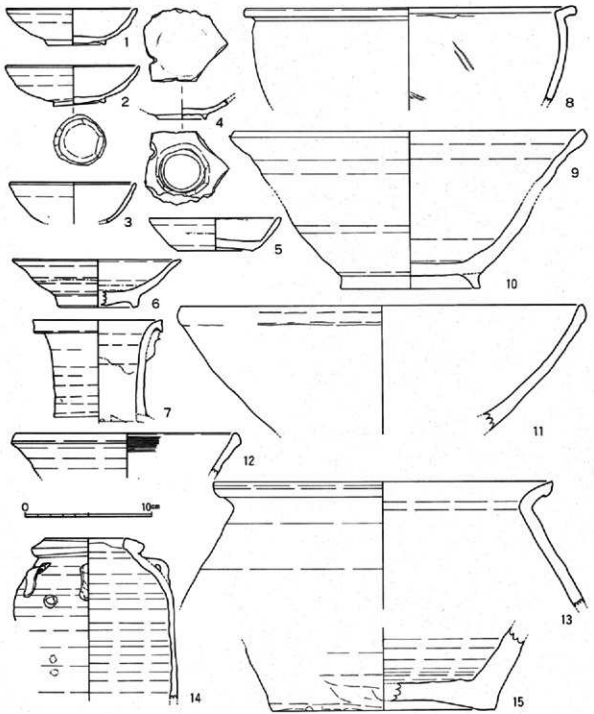


Fig.217　027号遺構遺物実測図（1／3）

029号遺構（Fig.218～220）

A区第1面N－14区で検出した土坑である。長径132cm，短径108cmの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは，18～38cmをはかる。

出土遺物を，Fig.220に示す。1～7は，**土師器**である。1・2は皿で，外底部は回転糸切り，内底にはナデ調整を加える。口径—底径—器高は，それぞれ8.0－6.4－1.0cm，8.2－6.4－1.3cmをはかる。3～5は坏である。外底部を回転糸切りする。内底のナデ調整は，3と5にみられ，4には施されていない。5は，内外面に油煙が付着しており，灯明皿であったことを示している。1は，**早島式土器**（＝吉備系土師質土器）椀である。内面には，コテあて痕跡がみられる。7は**搬入土器**の坏である。灰白色のキメ細かい胎土で，きわめて薄手に作る。手捏ねで整形されており，京都系の土師器と思われる。8は，**青白磁**の合子身である。9は**白磁**の碗である。見込みに圏線が巡る。10・11は，**須恵質土器**のこね鉢である。内・外面を横ナデし，内面下半は使用のために磨滅する。12は，**土鍋**である。口縁部上面に，斜めに刷毛目がつく。体部外面には，煤が付着している。

この他，青磁（鎬蓮弁文）・陶器などが出土している。

14世紀前半の土坑であろう。

Fig.218　029号遺構

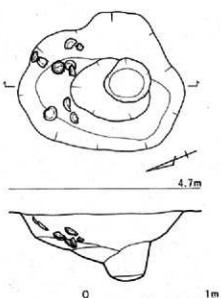


Fig.219　029号遺構実測図（1／30）

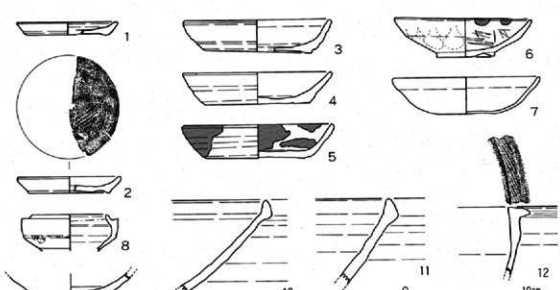


Fig.220　029号遺構遺物実測図（1／3）

054号遺構（Fig.221～225）

A区第1面，L～N－1～3グリッドから検出した。明瞭なプランが出ず，5.8×4.6mの範囲で全体的に土質がかわっていたため，この範囲を単一の土坑として調査した。

土坑範囲内に，数ブロックの遺物集中箇所および，小土坑がみられた。小土坑と054号遺構との切り合いは明らかではないが，054号遺構検出時には小土坑のプランは見えず，おそらく054号遺構の下位または中位から掘り込まれたものと考える。

054号遺構および小土坑からは，多数の獣骨が出土した（Fig.222）。

054号遺構全体が，一定期間継続して営まれたゴミ捨て場（生活残滓捨て場）であったものと考えたい。

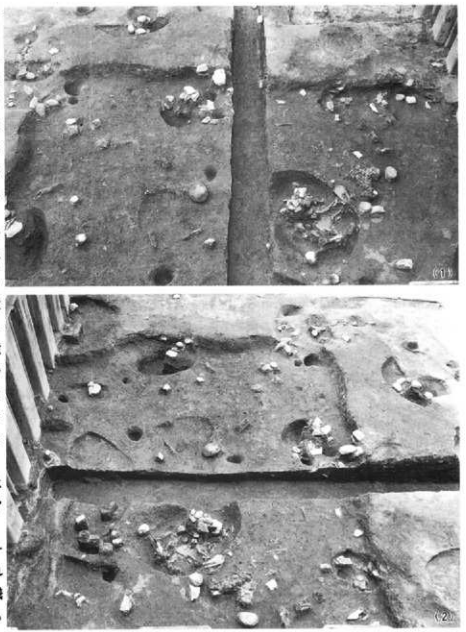


Fig.221　054号遺構（1）南東より，（2）北東より

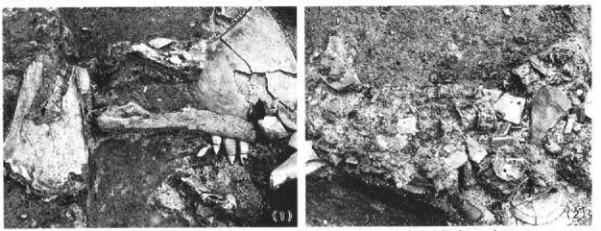
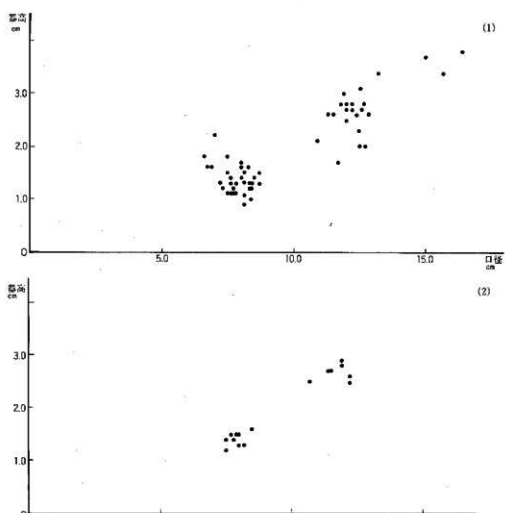


Fig.222　054号遺構獣骨出土状況（1）イルカ骨（西より）、（2）魚骨様（北より）

グラフ5に，54号遺構から出土した土師器の計測値を，ドットグラフで示す。上段は，土坑全般を調査した際出土したもの，下段は，床面の確認のためトレンチを設けて掘り下げた際出土したものである。上段は，大きく3群にわかれる。今仮に口径の小さい群からⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群とすると，Ⅰ群は皿，Ⅱ群は坏にあたり，下段もこれに対応している。Ⅲ群はさらにとび抜けた大きさを持つ。この傾向は，011号遺構，012号遺構，026号遺構出土土師器とも共通するもので，Ⅰ群の皿に口径が小さい割合に器高が高いものがある点も一致している。これらの土師器は，外底部を回転糸切りする。

Fig.223－1・2は，土師器である。1は早島式土器（＝吉備系土師質土器）の椀である。内面は，平滑に整えられる。体部上半は横ナデ調整，下半は指頭押圧する。口縁端部には，煤が付着しており，灯明皿として用いられたことを示す。2は小壺である。外底は，回転糸切りする。内外面とも横ナデで調整する。大きく張った腰の部分で上下を接合する。口縁直下に一孔が穿たれている。3～5は，楠葉型瓦器である。3・4は，ミニチュアの羽釜である。3は，三足を持つ。4は足の接合部をとどめていないが，3と同様に足がつくものだろう。鍔と足は，貼り付けである。口縁から内面はナデ調整，鍔部から下位は指頭押圧とする。5は，把手付鉢である。片口部分は遺存するが，反対側にも口がつく両口になるものと考えられる。把手部分は折損する。内面は，横ナデの上に暗文状にあらいヘラ磨きを施す。6は，瓦質土器の鍋である。内面には，刷毛目調整がわずかに残る。外面は，指押え



グラフ5　054号遺構出土土師器計測値（1）土坑全体、（2）土坑下

である。外面には，煤が付着している。7・8は，瀬戸・美濃陶器のおろし皿である。内底面に，鋭い刃物状の工具でおろし目を切り込む。7は，片口部を残さないが，本来は8の様に，小さくつまみ出した片口を持つものであろう。7は体部中位以上，8は体部下位以上に施釉する。外底部は，回転糸切りである。9は，フイゴの羽口である。粉殻やスサのはいったあらい胎土だが，灰白色で焼き締まっている。10～15は，白磁である。10～13は皿で，10・11は口縁を口ハゲにつくる。14は，小壺である。体部下半しか遺存しないが，茶入に似た形態を持つ。15は，碗である。玉縁口縁を持つⅣ類と同様の高台を持ちながら，口縁部は浅く開いた体部のままに直口しておさめ，玉縁にはならない。16は，青白磁である。合子の蓋であろうか。天井部には，片切彫りで放射状の文様を刻む。また，天井部の内面には，耐火土が付着している。17～31は，青磁である。17は天目台で，脚部分を欠く。全面施釉した後に，畳付の釉を掻き取って露胎にする。18～20は，小碗である。18は，体部全体を波打たせ，輪花にする。口縁部も体部にあわせて波状口縁となる。19・20は，鎬蓮弁文を持つもので，20

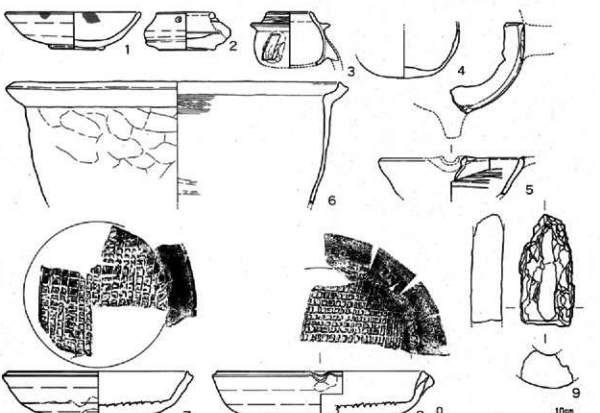


Fig.223　054号遺構遺物実測図1（1／3）

Fig.224　054号遺構出土遺物

にみられる様に，畳付のみ露胎とする。23～25は碗である。24・25は，小碗の高台かも知れない。26は，鉢である。体部は，鏑蓮弁文を配する。27～30は，小鉢である。口縁を，水平面から若干内傾させるまで折り返す。鍔状となる口縁部の上面は，やや受け口状に凹む。29・30は体部に鏑蓮弁文を配し，30では見込みに双魚文を貼りつける。畳付のみ露胎となる。32～34は陶器である。32は褐釉の皿で，外底部は露胎とする。33は褐釉の壺もしくは瓶である。34は，褐釉の甕の破片である。

この他，銅銭が45枚，床面確認のためのトレンチから４枚出土している。この内訳は，229ページのTab.２に示す。

全体的にみて，14世紀前半代におくのが妥当と思われる。

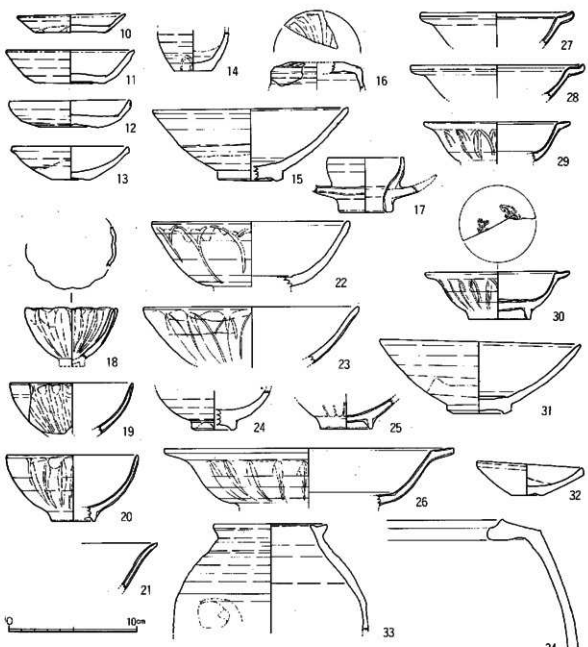


Fig.225　054号遺構遺物実測図２（１／３）

325号遺構（Fig.226～230）

A区第２面，L－２グリッドより検出した小土坑である。長径53㎝，短径37㎝の楕円形，もしくは小判型を呈する。

Fig.228は，埋土上位で検出した石硯である。暗灰色の肌理の細かい石材（安山岩？）を用いる。

Fig.230－１・２は土師器である。外底部は，回転糸切りする。口径はともに8.4㎝をはかる。１は，硯と共に埋土上位から完形で出土した。３は**瓦質土器**のこね鉢である。

13世紀末前後か。

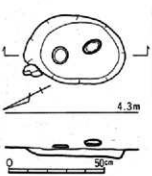


Fig.226　325号遺構実測図（１／20）

Fig.227　325号遺構（南東より）

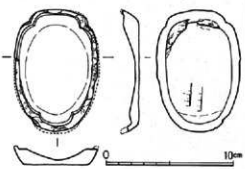


Fig.228　325号遺構遺物実測図１（１／３）

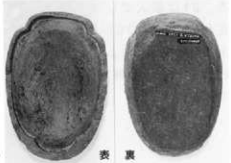
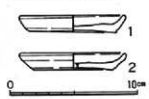


Fig.229　325号遺構出土硯



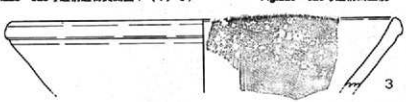


Fig.230　325号遺構遺物実測図２（１／３）

369号遺構（Fig.231～235）

A区第２面，K－６グリッドから検出した土坑である。長径201㎝，短径104㎝の長楕円形を呈する。検出面からの深さは，66㎝をはかる。

埋土中位に流れ込んだ形で，烏帽子や漆器・土師器などが出土した。

出土遺物をFig.233～235に示す。**Fig.233－１～16**は，**土師器**である。全て外底部を回転糸切りする。１～４は皿で，法量の違いから１～３と４の２者に分類できる。４は，前代の遺物が埋土中に混入したものである。１～３は，口径7.8～8.2㎝，底径5.9～6.2㎝，器高1.2～1.5㎝をはかる。**５～16**は，坏である。器高が高く，体部の立ち上りが急なタイプと，比

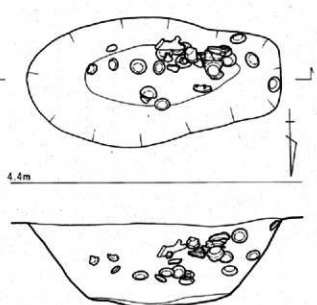


Fig.231　369号遺構実測図（１／30）

較的浅く，立ち上りの緩いタイプの2者に分類しうる。図示した中では，6・9・12・13・15が，後者のタイプである。前者は，口径11.3～12.6cm，底径7.9～9.2cm，器高2.7～3.0cm，後者は，口径11.4～12.6cm，底径7.2～9.4cm，器高2.2～2.6cmをはかる。17・18は，東播系須恵器のこね鉢である。19は，備前焼きのすり鉢である。内面に，6本を1単位としたすり目を入れる。20は青磁である。21・22は陶器である。21は茶入で，きわめて良質の胎土に褐釉をかける。22は無釉のこね鉢である。

Fig.232　369号遺構（1）全景（東より）、（2）鳥帽子出土状況（北側）
（3）漆椀出土状況（北西より）

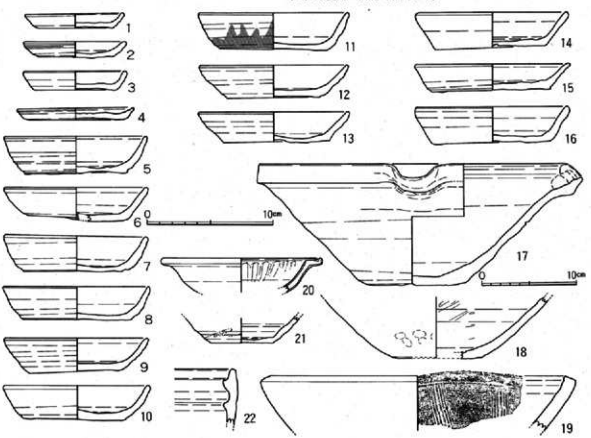


Fig.233　369号遺構遺物実測図1（1／3）

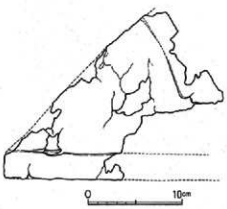


Fig.234　369号遺構遺物実測図２（１／４）

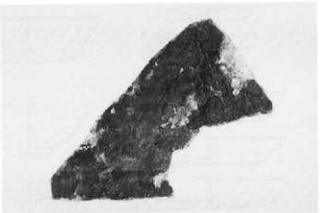


Fig.235　369号遺構出土烏帽子

Fig.234は，**烏帽子**である。遺存状態がきわめて悪く，出土した状態のまま裏打ちして取り上げた。折烏帽子で，実測図右上を斜めに折り曲げて重なった線がみえる。後頭部側は大きく欠損しており，本来の形状はうかがえない。目の粗い布に，黒漆をかけたものである。

13世紀後半代であろう。

419号遺構

A区第２面，C−D−４～５グリッドより検出した土坑である。長辺195cm，短辺90cmの隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは48cmをはかる。

北側の２分の１位に集中して，礫や土師器などが出土した。特に土鍋が伏せておかれていた点が注目される。ただし，その意図は不明である。

出土遺物を，Fig.238に示す。１～８は，**土師器**である。外底部は回転糸切りする。１～３は皿で，口径7.8～7.9cm，器高1.0～1.15cm。４～８は坏で，口径11.8～13.4cm，器高2.2～2.75cmをはかる。９は白磁の皿で，口縁を口ハゲとする。10～15は，**青磁**である。10・11は小碗，12は小鉢，13～15は，碗である。12は，全面施釉した後，畳付の釉を掻き取り，露胎とする。15は，無文だ

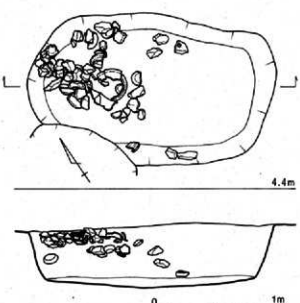


Fig.236　419号遺構実測図（１／30）

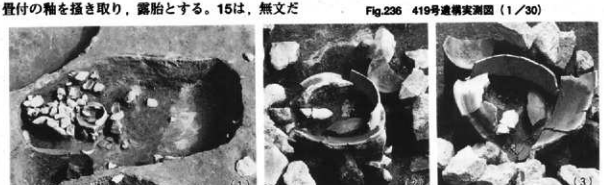


Fig.237　419号遺構（１）全景（南西より）、（２）土鍋出土状況（南西より）、（３）同（北西より）

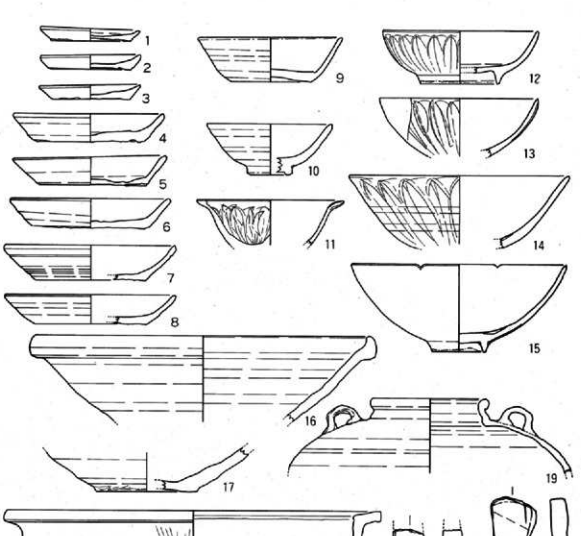


Fig.238　419号遺構遺物実測図（1／3）

が，口縁に刻みを入れ，輪花にする。全体に造りが薄手で，釉も均質にかかり，むらがなく，優品と言える。畳付のみ露胎とする。16・17は，東播系須恵器のこね鉢である。体部下位から内底部は，使用により磨滅している。18は，土鍋である。埋土土面に据えてあったものである。内面は，ナデ調整で平滑に均す。外面は縦方向の刷毛目調整を施す。口縁は逆L字型に折りまげ，口唇部はナデ調整で角張った面取りをされている。外面には，うすく煤が付着する。19は，陶器である。無釉の四耳壺である。胎土には，小礫を多く

Fig.239　421号遺構（北西より）

含み粗い。20・21は砥石である。粘板岩の仕上砥である。
これらの遺物から，13世紀後半頃の遺構と考える。

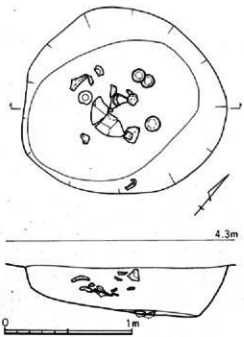


Fig.240　421号遺構実測図（1／30）

421号遺構（Fig.239～243）

A区第2面，C～D－5～6区より検出した土坑である。径150～162㎝のひずんだ楕円形を呈し，検出面からの深さは21～40㎝で，北区から南東へゆるく下降している。

土坑中央に東播系須恵器のこね鉢，その周囲から青磁小鉢，白磁皿，土師器坏，皿などの完形品が出土した。意図的に置かれているようだが，その意味するところは，不明である。

出土遺物をFig.243に示す。1～15は，土師器である。すべて底部は回転糸切りである。内底部には，ナデ調整を加える。法量もそろっており，1～10の皿は口径7.7～9.0㎝，器高0.95～1.45㎝，11～15の坏で口径12.3～13.5㎝，器高に1.85～2.4㎝の間にある。16・17は，**青白磁**である。16は合子蓋，17は水滴になる。ともに印花文をあしらう。17は把手を欠損する。注口付近の破片は，出土していない。18～20は，白磁の皿である。口縁を口ハゲに作る。21～23は，**青磁**である。21は小碗で，高台以下を露胎とする。22・23は，小鉢である。体部外面に，鎬蓮弁文を配する。27・28は，**瓦質土器**の鍋である。口径直下に，羽釜状に鍔がつく。内面は刷毛目調整，外面は指頭圧痕をのこし，外面には煤が付着している。29～31は，**土鍋**である。いずれも口縁端部を「く」字形に折り返す。内面は刷毛目調整，外面は指押えの上から刷毛目を加える。32は，**常滑窯の甕**である。口縁は「N」字状になり切っていない。肩部に叩き痕が入っている。33・34は，**東播系須恵器のこね鉢**である。内面は使いこまれ，磨滅している。35・36は，**石鍋**である。滑石製。36は，鍔が欠け落ちている。

Fig.241　421号遺構遺物出土状況（北東より）

これらの遺物からみて，13世紀後半の遺構と考えられる。

Fig.242　421号遺構出土遺物

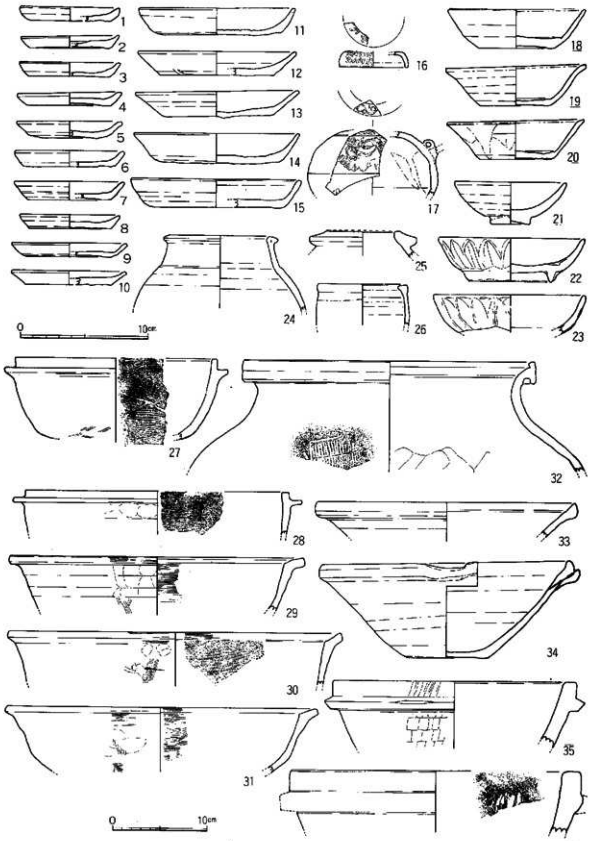


Fig.243 421号遺構遺物実測図（1／3、1／4）

561号遺構（Fig.244～246）

A区第2面，E－9グリッドより検出した土坑である。第1面190号遺構（井戸），第3面562号遺構に切られ，一部しか残っていない。遺存部分から推定すると，径176cm程度の略円形の平面を持つと思われる。検出面からの深さは，おおむね20cm前後である。

土坑の北にかたよって，土師器がまとまって出土した。一括廃棄されたものと思われる。また，土師器の坏の中に乗せた形で，銅銭が出土した（Fig.245）。「皇宋通寶」である。この他，8枚の銅銭が出土している（230ページ，Tab.2）。

一括廃棄されていた土師器の一部を，Fig.246に示す。すべて外底部を回転糸切りする。内底にナデ調整を加えるのは，2・4・13のみである。Ⅲは口径7.1～8.5cm，器高1.0～1.4cm，坏は口径11.9～12.6cm，器高2.5～3.1cm。

13世紀後半の遺構であろう。

Fig.244　561号遺構（東より）

633号遺構（Fig.247～249）

A区第2面，L－9～10）グリッドより検出した小土坑である。長径36cm程度のピットであるが，底面から，完形品の青磁碗が出土した。

青磁碗は，龍泉窯系の製品で，鎬蓮弁文をあしらう。

Fig.245　銅銭出土状況

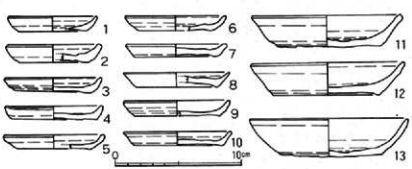


Fig.246　561号遺構遺物実測図（1／3）

676号遺構（Fig.250・251・253）

A区第2面P～Q－13～14グリッドから検出した土坑であ

Fig.247　633号遺構遺物実測図

Fig.248　633号遺構出土青磁碗

Fig.249　633号遺構（南西より）

る。長径230cm，短径140cmの長楕円形を呈する。堆積がある程度進行した段階で，土師器を主とした土器が，廃棄されている。土坑の性格としては，廃棄坑を考えれば良いだろう。

出土遺物を，Fig.253に示す。1～21は，**土師器**である。すべて，外底部は回転糸切りである。内底部にナデ調整を行なうものと行なわないものとが，だいたい相半ばする。1～5は皿である。1～4は，口径7.8～8.4cm，器高1.1～1.6cm，5は口径8.2cm，器高2.1cmで，5がひときわ大きい。6～21は坏で，口径11.8～13.5cm，器高2.7～3.0cmをはかる。22・23は，**青白磁**である。22は合子の蓋の天井部分，23は小碗である。24・25は，**白磁**である。24は口ハゲのⅢ，25は口ハゲの碗の底部である。26は，**青磁**である。龍泉窯系の小鉢である。27は**瓦質土器**のすり鉢である。28は，**常滑窯**の壺の口縁である。口縁の折り返しは，まだ「N」字状にならない段階にとどまっている。21は，**土鍋**である。30は，

Fig.250　676号遺構（南西より）

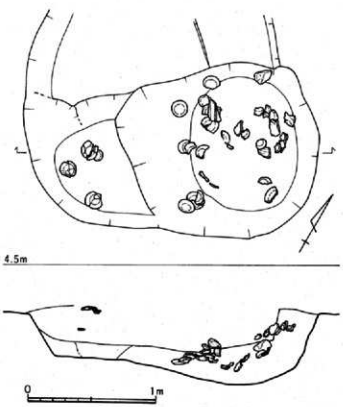


Fig.251　676号遺構実測図（1／30）

黄釉陶器である。鉢もしくは，盤であろう。

13世紀後半代の遺構であろう。

710号遺構（Fig.252・254・255）

A区第2面，L～M－7グリッドより検出した土坑である。長辺135cm，短辺108cm程度の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは，約60cmをはかる。埋土中位付近から，土師器の坏，Ⅲと，鉄製短刀が出土した。

出土遺物を，Fig.255に示す。1～17は，**土師器**である。すべて底部は回転糸切りである。1～10はⅢで，口径7.2～8.9cm，器高1.1～1.6cmをはかる。11～17は坏である。17は器高が浅く丸味が強い。11～16は，口径11.8～12.5cm，器高2.5～2.8cm，17は口径12.7cm，器高2.3cmをはかる。18は，**須恵器**のⅢである。底部は，回

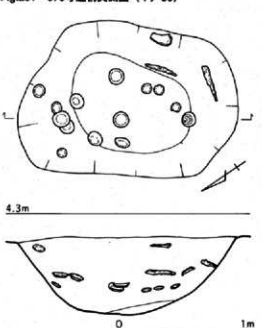


Fig.252　710号遺構実測図（1／30）

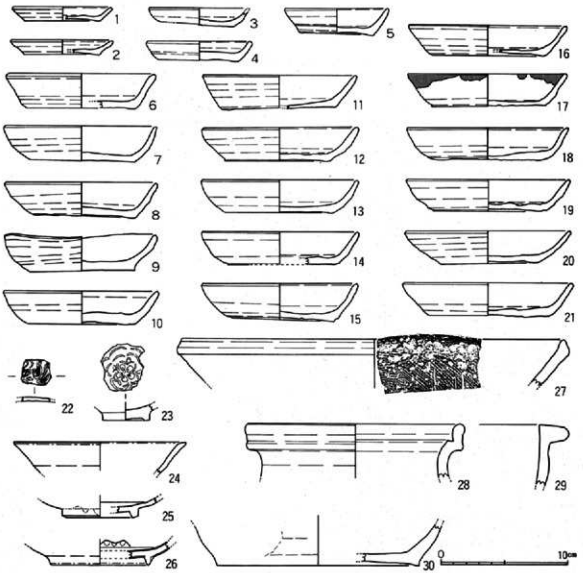


Fig.253　676号遺構遺物実測図（1／3）

転糸切りする。東播系か。19・20は，瓦質土器である。19はすり鉢，20はこね鉢である。21は白磁の口ハゲの皿である。22～24は青磁である。22・23は小鉢，24は碗である。

13世紀後半に位置付けられる。

713号遺構（Fig.256～258）

A区第2面，N－15～16グリッドより検出した土坑である。実は，第2面の660号遺構を調査した際，その壁面に青磁碗が重なっているのがのぞいた。それで，そ

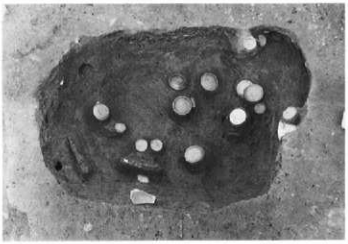


Fig.254　710号遺構（南東より）

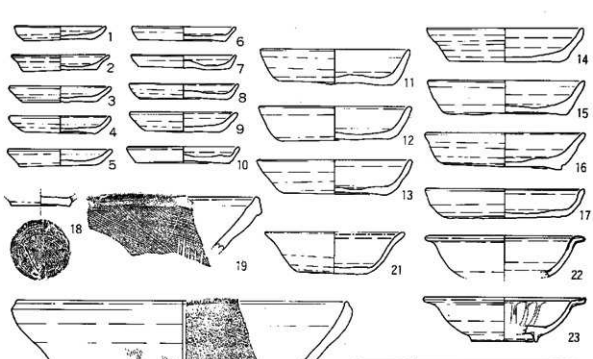


Fig.255　710号遺構遺物実測図（1／3）

の遺構を捜すために660号遺構の北側を一段掘りくぼめ，713号遺構を検出した。したがって，厳密には，713号遺構は，第2面よりも若干下位の遺構ということになる。

713号遺構は，推定長径115cm，推定短径79cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さは44cmをはかるが，埋納された青磁碗が検出面から27cmの深さに置かれていることからみて，それ以下は掘り過ぎの可能性が高い。

青磁碗は，完形品3個が，下向きに重ねて，埋められていた。全体的に，南東方向にずれている点からみれば，北西方向から土砂を落して埋め込んだと考えることができる。3個の青磁碗を**Fig.257・258－3～5**に示す。いずれも龍泉窯系の鏑蓮弁文の碗で，畳付から高台内を露胎とする。**5**にのみ，見込みに印花文がみられる。すべて内面には墨書がなされていた。釉の上から書かれている点，墨書の上をさらに汚れ

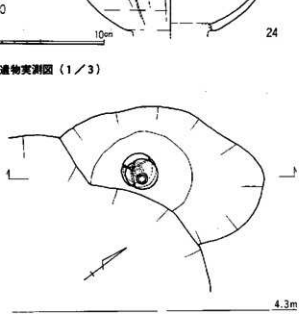


Fig.256　713号遺構実測図（1／20）

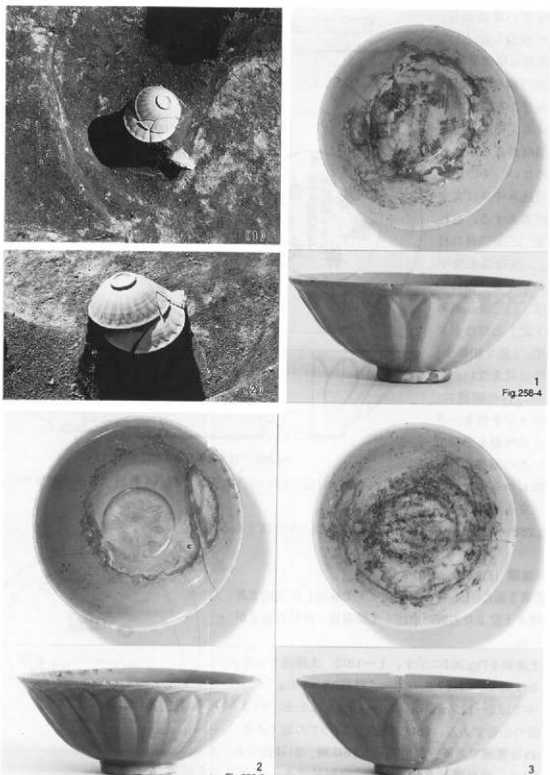


Fig.257　713号遺構および出土青磁碗（1）検出状況（南西より）（2）青磁碗出土状況（北西より）

が覆っている点から，極めて判読しにくい。3の墨書は体部下位に圏線状の横線を引き，ところどころに九字をかぶせる。見込み全面にも墨痕があるが，全く読めない。4の墨書は，見込み中央に文字を二行書きする。右行は「文□乙丑二月六日丙午」，左行は七文字程度が見える。強いて読めば「□□放又は畝為□□ト之」と思うが文意不明。「急々如律令」の文字は見えない。見込みの二行の周囲に，6個の九字を書き，さらにその外側を圏線で囲む。5の墨書は，墨痕程度しかみえなかった。なお，4の年号については，第三章で細かく検討するが，結果だけを述べると，文永二年（1265）にあたる。

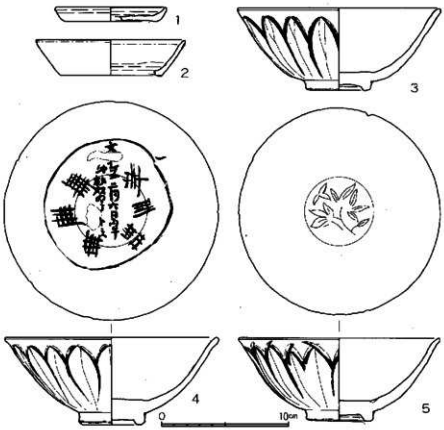


Fig.258　713号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.258－1は土師器の皿，2は白磁の口ハゲの皿である。

777号遺構（Fig.219～262）

A区第3面K～L－8～9グリッドで検出した土坑である。埋上上位より古瀬戸水注・土師器皿・鉄短刀などが出土した。

出土遺物をFig.262に示す。1～13は，土師器である。1～9は皿で，口径7.8～8.6cm，器高0.9～1.4cm，10～13は坏で12.2～12.7cm，器高2.5～3.0cmをはかる。14は，青白磁の小壺である。15は白磁で，口ハゲの皿である。16・21は青磁である。龍泉窯系。16は碗，21は盤である。17は，瀬戸窯の水注である。完形品であったが，第2面からの掘り下げの際，口縁の一部を破損した。灰色のやや肌理の細い胎土に，緑灰色のテリ状の光沢を持った灰釉をうすく施す。把手はつかない。頸部内面には，しぼり痕がみられる。底部には高台を貼りつける。器高19.1cmをはかる。18・20は瓦質土器である。18は鍋，

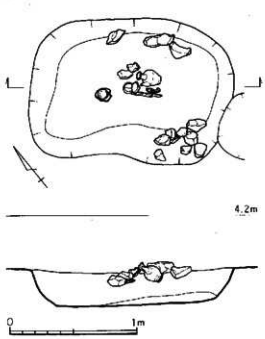


Fig.134　777号遺構実測図（1／30）

20は片口のこね鉢である。19は，東播系須恵器のこね鉢である。

水注は，鎌倉時代前期にあたる古瀬戸前期の特徴を示すが，遺物全体からみれば，13世紀後半に位置づけるのが妥当であろう。

Fig.260　777号遺構（南東より）

Fig.261　777号遺構出土古瀬戸水注

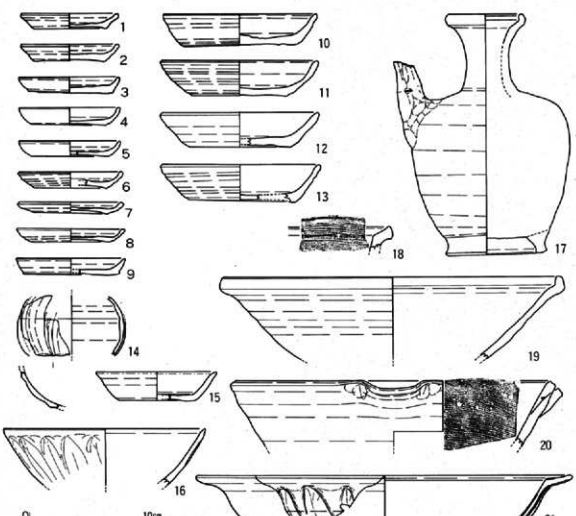


Fig.262　777号遺構遺物実測図（1／3）

795号遺構（Fig.263・264）

A区第3面M－8～9グリッドより検出した土坑である。埋土中より，完形の土師器の皿，坏を出土した。

出土遺物を，**Fig.264**に示す。**1～8**は**土師器**である。すべて外底部を回転糸切りし，内底部にはナデ調整を加える。**1～5**は坏で，口径12.0～12.2cm，器高2.5～2.7cm，**6～8**は皿で，口径7.8～8.6cm，器高0.95～1.1cmをはかる。**9・10**は，**青磁**の香炉と碗である。

13世紀前半に位置付けられる。

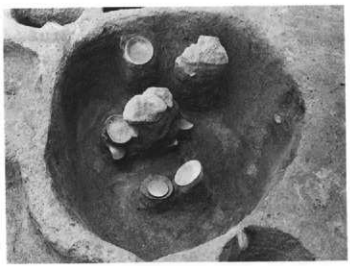


Fig.263　795号遺構（南東より）

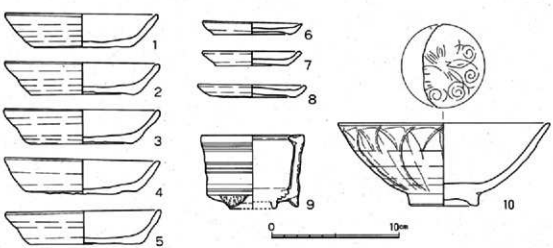


Fig.264　795号遺構遺物実測図（1／3）

838号遺構（Fig.9，265）

A区第3面R～S－10～11区より検出した土坑である。長径100cm，短径88cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは，44cmをはかる。

出土遺物を，**Fig.265**に示す。**1～6**は，**土師器**である。外底部は回転糸切りする。**7**は，**青磁**である。龍泉窯系の鎬蓮弁文の碗である。**8**は，**東播系須恵器**のこね鉢である。外底に糸切り痕が残る。

13世紀後半頃であろうか。

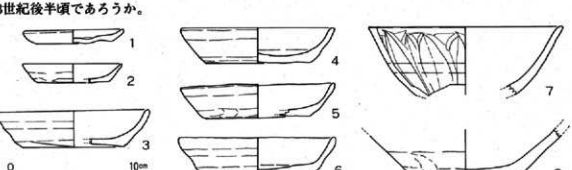


Fig.265　838号遺構遺物実測図（1／3）

859号遺構（Fig.266・267）

A区第3面S～T－15グリッドより検出した土坑である。長径2m，短径1.5mの円筒形の土坑である。

埋土の下部から，土師器が大量に出土した。土坑壁にそって弧を描いて出土しており，埋置されたというよりも，土砂と共に投げ入れられたものと知れる。

土師器の計測値を，**グラフ6**に示した。法量分布としては，Ⅲ・坏，さらにひと回り大きいグループにわかれる。

Fig.267－1～3は，豊前型の**土師器**の坏である。口径に対して底径が小さく，体部は，大きく開く。**4**は，

Fig.266　859号遺構（南東より）

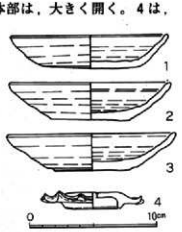
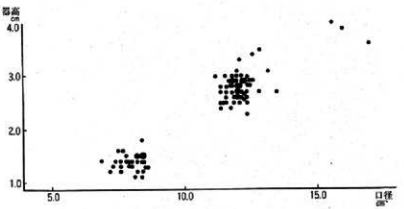


Fig.267　859号遺構遺物実測図（1／3）



グラフ6　869号遺構出土土師器計測値

青白磁である。波打たせた鍔部分から上面に施釉，下面は露胎とする。

13世紀後半に位置付けるのが妥当であろう。

1110号遺構（Fig.268～270）

A区第3面M－10グリッドより検出した土坑である。径64～68cmの略円形を呈する。

出土遺物を，**Fig.270**に示す。**1～4**は，**土師器**である。すべて外底部は回転糸切りし，内底部にナデ調整を加える。**1～3**の皿は，器高が低く，体部が開く浅皿型で，口径8.8～9.1cm，器高1.0～1.2cmをはかる。**4**の坏は，体部の立ち上りが急で，丸味を持つ。口径12.3cm器高2.3cm。**5・6**は**白磁**である。**5**は口ハゲにつくる。**6**の底部には，花押を墨書する。**7**は**褐釉陶器**の鉢である。

13世紀前半代の遺構であろう。

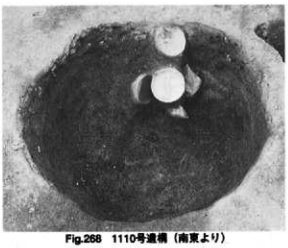


Fig.268　1110号遺構（南東より）

Fig.269　1110号遺構出土遺物

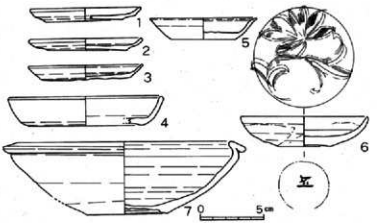


Fig.270　1110号遺構遺物実測図（1／3）

1170号遺構（Fig.271～274）

A区第3面，C～D－4～5グリッドで検出した方形板壁土坑である。長辺230cm，短辺165cm，深さ84cmの箱型の土坑で，その内側に板材をあて，杭を打って押えている。

板壁は，北東壁，南西壁で3枚，南東壁で2枚の板を用いる。北西壁は崩壊がはげしく，部分的にしか観察できなかったが，二段掘り状にずれて板壁が作られている様である。

溜枡の一種だろうが，用途を限定できない。

Fig.271　1170号遺構（北より）

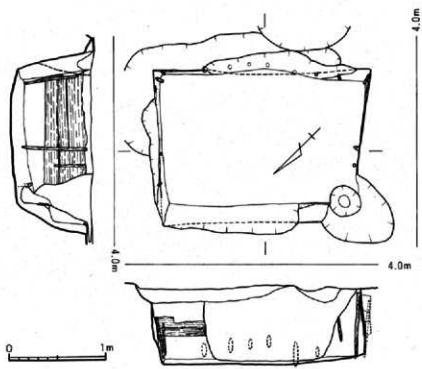


Fig.272　1170号遺構実測図（1／40）

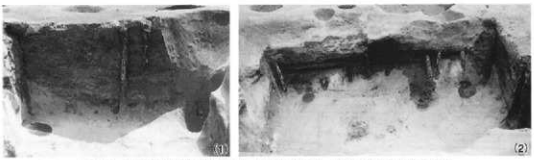


Fig.273　1170号遺構壁面（1）南西壁（北東より）、（2）南東壁（北西より）

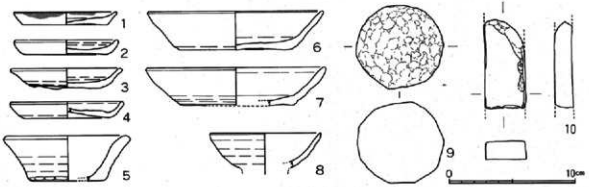


Fig.274　1170号遺構遺物実測図（1／3）

出土遺物を，**Fig.274**に示す。1～7は，**土師器**である。外底部は，回転糸切りである。1～4はⅢで，口径8.1～9.0cm，器高1.05～1.6cmをはかる。5は肉厚で器高も高く，異質である。小鉢としておく。体部の立ち上り際は，こまかい幅で指押えする。6・7は坏で，口径13.8，14.1cm，器高3.05cmをはかる。8は，青磁の小碗である。9は，砂岩の**砥杖玉**である。全面を摘打して丸く整える。10は砥石である。キメ細かい粘板岩で，仕上砥であろう。

おおまかに，13世紀前半代を考えている。

1267号遺構（Fig.275～277）

A区第3面，M－N－12グリッドより検出した土坑である。長径144cm，短径116cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは126cmをはかる。円筒形に近い形状をとる。

出土遺物を，**Fig.276**に示す。1～8は，**土師器**である。底部は，回転糸切りする。1～5はⅢで，法量的には，1～4と5にわかれる。6～8は坏である。糸切りした底を，若干丸底気味に押し出す。内面は平滑にナデ調整する。9は**瓦器**である。筑前型瓦器椀であるが，炭素の吸着が良く，銀化している。ヘラ磨きは浅く幅広で，きわめて見にくい。10～12は，**白磁**である。11は，口縁を口ハゲにつくる。13は**青白磁**である。容器の蓋の鍔

Fig.275　1267号遺構出土遺物

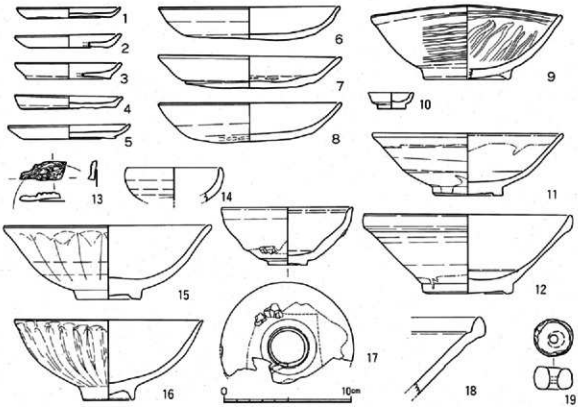


Fig.276　1267号遺構遺物実測図（1／3）

部分であろう。14～16は青磁である。17は天目茶碗で，黒釉を施す。釉下には，鉄化粧がなされる。18は，東播系須恵器のこね鉢である。19は，石玉である。扁平な円盤形で，中央に穿孔がある。

13世紀中頃にあてるのが妥当であろう。

1712号遺構（Fig.277・278）

A区第3面，H－4～5区より検出した土坑である。長辺112cm，短辺48cm，深さ37cmの箱型を呈し，木箱を埋めたものと思われる。

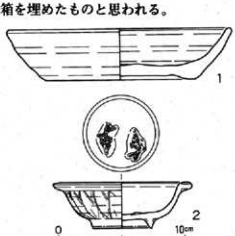


Fig.277　1712号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.278　1712号遺構出土遺物

埋土中より，土師器坏と青磁小鉢が重なって，さらにその東から鉄短刀が出土した。土師器坏と青磁小鉢をFig.277に示す。

13世紀後半の遺構と考える。

1719号遺構（Fig.279～281）

A区第4面，K～L－8～9グリッドより検出した。長軸156cm，短軸69cmの長楕円形を呈する。

南東側に寄って，土師器坏・皿・白磁皿の完形品が出土した。これを供献品とみれば，土壙墓と考えても良かろうが，仮に供献品のある側を埋葬頭位とすると，頭位が南東を取ることになり，これまでの埋葬遺構検出例と比べて疑問が残る。そこで，一応土壙墓の可能性を考えつつも，単なる土坑として報告するものである。

出土遺物をFig.280に示す。1～6・7～10は，土師器である。外底を回転糸切りし，内底にナデ調整を加える。**2・4・5・9**など，体部に粘土継ぎ目が明瞭にみえる点に注意したい。**7は，白磁の口ハゲの皿**である。

13世紀前半頃に比定されよう。

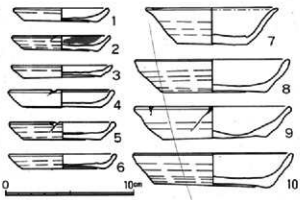


Fig.280　1719号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.279　1719号遺構（北西より）

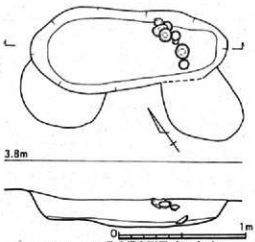


Fig.281　1719号遺構実測図（1／30）

2015号遺構（Fig.282～283）

A区第4面P－9グリッドより検出した。径56cmの略円形の小土坑の底に，完形の土師器坏2枚が置かれていた。

Fig.282に，土師器の坏を示す。底部は回転糸切りで，内底部にナデ調整を加える。

12世紀後半頃の遺構であろう。

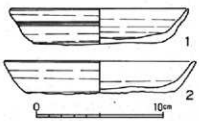


Fig.282　2015号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.283　2015号遺構（北より）

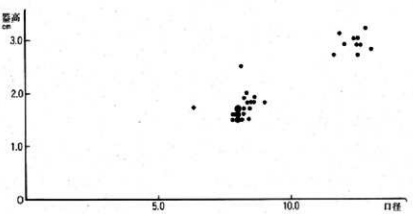
2870号遺構＝3514号遺構（Fig.284～285）

B区第1面E～F－30～31グリッドより検出した土坑である。

第1面で検出した段階では，1辺が1.8m、他辺が1.4m以上の方形または長方形を呈したが，第3面上では略円形の掘りかたにかわり，下端は円形を呈していた。別の遺構である可能性も考えられたが，平面的な分布が全く重なっていた点から最終的に，同一の遺構として報告する次第である。

Fig.284　2870号遺構（北東より）

出土遺物を，Fig.285とグラフ7に示す。まとまった量の土師器が出土しており，計測値をグラフ5に示した。**Fig.285－1～16**は，土師器である。すべて底部を回転糸切りする。**1～12**は，皿である。内底部には，ナデ調整を加える。ほとんどが類似の形態・法量をとる中で，1のみが口径が小さく，器高が高いという傾向にある。1は，口径6.2cm，底径4.0cm，器高1.7cm。2～12は，



グラフ7　2870号遺構出土土師器計測値

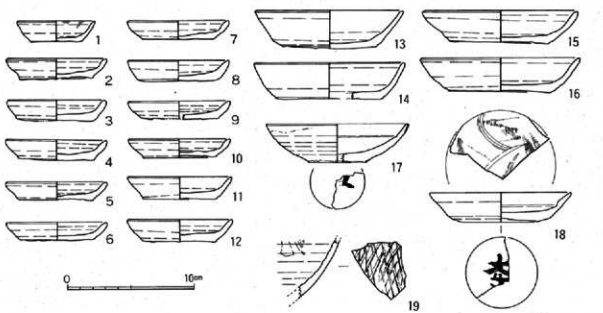


Fig.285　2870号遺構遺物実測図（1／3）

口径7.8～8.4cm，底径5.6～6.1cm，器高1.45～1.8cmをはかる。1の口縁には油煙が付着しており，灯明皿に用いられたことを示している。13～16は，坏である。15・16には内底のナデ調整が加えられるが，13・14には見られない。両者は法量的にも若干異なっており，後者は前者に比して，口径が小さい割に器高が高い。法量を口径－底径－器高の順に示すと，13から順に，11.7－7.4－3.0cm，12.0－8.4－2.8cm，12.2－7.8－2.6cm，12.6－8.0－2.7cmとなる。これは，生産単位の違いによるものと推測される。17は白磁である。平底の皿で，外底部は露胎となる。この露胎部分に墨書が記されているが，残念ながら遺存部位が少なく，，内容不明。18は青磁である。同安窯系の皿で，見込みに櫛描きの「之」字文と片切彫を配する。外底の露胎部に墨書がみられる。「大□」とあり，二文字目はおそらく花押であろう。19は青白磁である。外面には沈線が網目状に刻まれている。

14世紀前半代の遺構であると思われる。

2896号遺構（Fig.286・287）

B区第1面，B～C－27区より検出した土坑である。長径112cm，短径96cmの不整楕円形を呈し，検出面からの深さは，13.1～13.5cmをはかる。

Fig.286　2896号遺構（南西より）

埋土中より土師器皿・坏などが出土した。

出土遺物を，Fig.287に示す。図示したのは，すべて土師器である。いずれも外底部を回転糸切りする。1～7は，皿である。すべて浅皿型で，体部の立ち上りは小さい。1・2の様に体部が丸味を持って内弯気味に立ち上るものと，3～7の様に小さく外反するものとがある。1・2には内底部の静止ナデ調整がみられず，3～7には，これが施されている。ただし，法量的には，大差なく，同じ傾向をとるものと言える。口径は，8.6～9.5cm，底径7.0～7.6cm，器高1.05～1.4cmの範囲内にある。8・9は坏である。9は，内底に静止ナデ調整を施すが，8は行わない。法量は，口径－底径－器高の順に，それぞれ15.1－8.8－2.2～2.4cm，15.1－10.05－2.4cmをはかる。

13世紀代の遺構と考えられる。

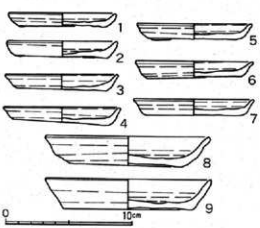


Fig.287　2896号遺構遺物実測図（1／3）

2928号遺構（Fig.288－290）

B区第1面C－25グリッドより検出した土坑である。長径67cm，短径59cmの不整楕円形を呈し，検出面からの深さは，14－21cmをはかる。

土坑の北隅に寄って，土師器の皿がかさなって出土した。土砂まじりと言うよりも，皿のみを重ねて置き，土をかぶせるといった状況を示す。坏2点を除いて，すべてが皿であった点に，特徴がある。

出土した**土師器**を，**Fig.289**に示す。すべて外底部を回転糸切りする。**6・7・9・10**の内底には，静止ナデ調整が加えられる。口径8.6～9.1，器高1.1～1.35㎝。**グラフ8**にみる様に，法量が集中している点が特徴で，同一タイプの皿のみを埋め込んだことを意味している。**11・12**は坏である。ともに内底部にナデ調整を加える。

13世紀前半頃の遺構と考えられる。

Fig.288　2928号遺構（北東より）

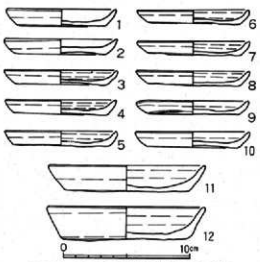


Fig.289　2928号遺構遺物実測図（1／3）

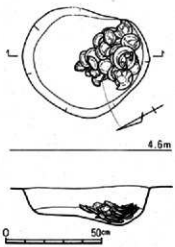
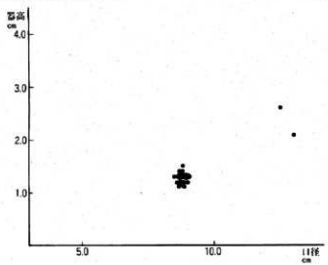


Fig.290　2928号遺構実測図（1／20）



グラフ8　2928号遺構出土土師器計測値

2944号遺構（Fig.291・292）

B区第1面，F−24〜25グリッドより検出した土坑である。径105cm前後の略円形を呈し，検出面からの深さは，9〜12cmをはかる。

土坑床面に，6枚の瓦磚が平らにおかれていた。また瓦磚の中央には，土師器坏が1点，伏せて置かれていた。

これらの瓦磚が，何かの基台であることは間違いなかろう。本遺構の年代観（16世紀）からみて，掘り込み面を第1面よりも上位に設定すると，当然2944号遺構の土坑掘り込みの深さも深くなり，桶なり甕なり，高さのあるものを想定せざるをえない。現時点では，用途の推定は，保留したい。

瓦磚の切り離しが，いわゆるコビキ技法による点から，16世紀代を考えたい。

Fig.291　2944号遺構（南より）

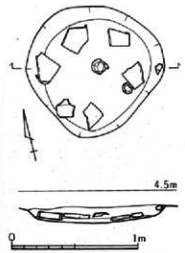


Fig.292　2944号遺構実測図（1／30）

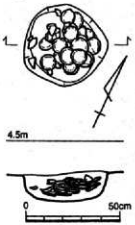


Fig.293　2963号遺構実測図

Fig.294　2963号遺構（南西より）

2963号遺構（Fig.293−295）

B区第1面G−30グリッドで検出した小土坑である。径66cmの円形を呈し，検出面からの深さは，24cm程度をはかる。

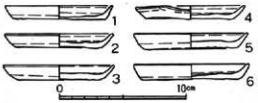
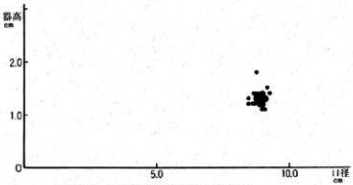


Fig.295　2963号遺構遺物実測図（1／3）



グラフ9　2963号遺構出土土師器計測値

土坑内には，ぎっしりと土師器の皿が埋め込まれていた。坏が一点も含まれず皿だけが埋められていた点に注意したい。また，**グラフ9**に見る様に，皿の法量に，ほとんどばらつきは見られない。これらの点は，前述した2928号遺構に通じるもので，土師器皿の比較から，ほぼ同時期の遺構と考えられることも付け加えておく。

出土した土師器の一部を，Fig.295に示した。すべて外底部を回転糸切りし，内底部に静止ナデ調整

を加える。口径8.6～9.4cm，底径6.5～7.7cm，器高1.1～1.3cmをはかる。
13世紀前半頃の遺構と考えられる。

2969号遺構（Fig.296～298）

B区第1面，C～D－23～24グリッドより検出した土坑である。北東側を井戸に切られ，全形を知ることはできない。遺存する部分のみをみれば，長径が2.3m前後，短径1.6m程度の楕円形の土坑と推測される。

土坑埋土中より，ほぼ土坑全面に広がって，土師器を主とした多数の遺物が出土した。土師器は，その一々を図示できないので，グラフ8に計測値を表わすにとどめる。これらの土師器は，すべて外底部を回転糸切りするものである。

出土遺物を，Fig.298に示す。1～4は，**青白磁**である。1～3は皿で，口縁は口ハゲ，体部内面と見込みに印花文を施す。3は底部の破片で，1と同様の双魚文の一部が認められる。4は合子の蓋である。天井部の印花文は，鳳凰であろうか。5は**青磁**である。同安窯系の皿の破片で，見込みには，片切彫りと，櫛描きの「之」字文があしらわれる。6～10は**白磁**の碗である。6・7は，見込みの釉を輪状に掻き取る。11～14は，**陶器**である。11は天目茶碗で，黒褐色の釉をかける。12は皿，13は壺，14は把手付鍋である。15・16は**土鍋**である。口縁を大きく折り曲げる。外面には煤が付着している。17は**石球**である。砂岩製の碓杖玉で，全面摘打されている。18は**砥石**である。肌理が細かく，仕上砥であろう。19・20は，**棒状土製品**である。一方の面が特に火にあたって白く焼けており，二次的に焼き締ったものであろう。おそらく家内の火処で用いられたもので，

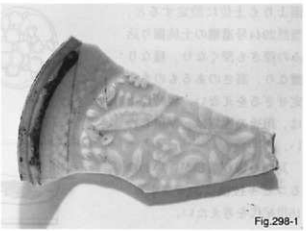


Fig.298-1

Fig.296　2969号遺構出土遺物

Fig.296　2969号遺構（北東より）

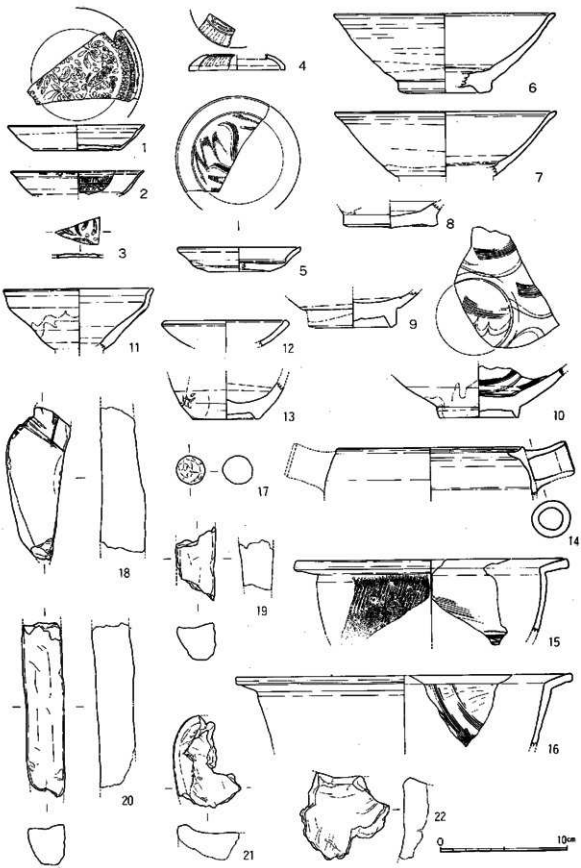
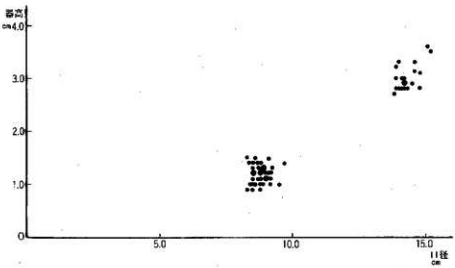


Fig.298　2969号遺構遺物実測図（1／3）



グラフ8　2969号遺構出土土師器計測値

「サナ」と呼ばれるものであろうか。

この他，鎬蓮弁文の青磁片などが出土している。

13世紀前半頃の遺構と考えておきたい。

2985号遺構（Fig.5・299）

B区第1面，B−18〜19グリッドより検出した土坑である。長辺145cm，短辺135cmの隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは，24.5−29.0cmをはかる。

埋土中より，若干の遺物が出土した。

出土遺物を，Fig.299に示す。**1・2**は，**土師器**の皿である。**1**は，口径6.4cm，底径3.2cm，器高1.3cmで，口径に対して底径が小さく，外反しつつ大きく開く体部を持つ。**2**は，口径8.0cm，底径6.0cm，器高1.8cmで，口径と底径の差が小さく，体部は，急角度で若干内弯気味に立ち上る。ともに外底部は回転糸切りで，整形は横ナデ調整のみで，内底に静止ナデ調整は行われない。また，両者とも口縁に煤が付着しており，灯明皿として用いられたことを示している。**3・4**は，**白磁**の皿である。全面施釉した後，高台畳付を削り，露胎とする。この露胎部分には，砂が付着している。**5・6**は，**染付**である。中国の明代のもので，**5**は皿，**6**は碗である。**6**は，施釉後，高台畳付を削って，露胎としている。**7**は，**青磁**の碗である。内面の口縁部下に，沈線が2条めぐる。**8**は，**磨石**である。周縁部が使用のため磨耗している。

16世紀後半頃の遺構と考えられる。

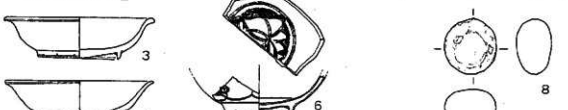


Fig.299　2985号遺構遺物実測図（1／3）

2987号遺構（Fig.300～302）

B区第1面，B－17～18グリッドより検出した土坑である。

前述した方形竪穴土坑と共通した遺構だが，規模が小さく，時代も下るので，方形竪穴土坑の項では報告しなかった。

検出した土坑は，長辺144cm，短辺128cmの長方形を呈するが，これは土坑内壁であり，掘りかたは検出できなかった。おそらく板壁を立てたものと思われる。

出土遺物を，Fig.301に示す。1～6は，**土師器**である。1～3は皿で，口径7.0～7.3cm，底径4.5～4.9cm，器高1.6～2.1cmをはかる。4～6は坏である。小さ目の底部から，大きく開く体部を持つ。全形の残る6で，口径11.5cm，底径6.2～6.5cm，器高2.1～2.8cmをはかる。皿・坏ともに回転糸切りで，内底に静止ナデ調整を加えている。7は，**白磁**の皿である。

16世紀代の遺構と考えられる。

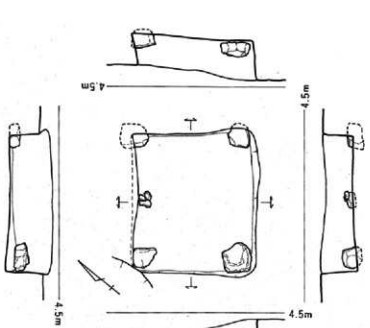


Fig.300　2987号遺構実測図（1／40）

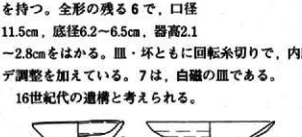


Fig.301　2987号遺構遺物実測図（1／3）

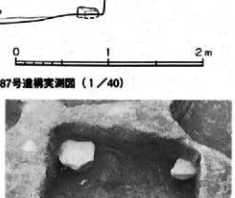


Fig.302　2987号遺構（北東より）

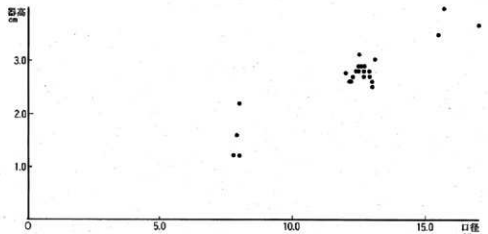
3051号遺構（Fig.303）

B区第1面，G～H－22グリッドより検出した土坑である。長径128cm，短径88cmの楕円形の土坑中に，土師器を主とした遺物が，廃棄されていた。

土師器の計測値をグラフ10に示す。これらの土師器は，完形品のままではなく，破砕された状態で出土した点に特徴がある。

この他，鏡蓮弁文の龍泉窯系青磁碗片なども出土して

Fig.303　3051号遺構（北東より）



グラフ10　3051号遺構出土土師器計測値

いる。

これらの遺物からみて，13世紀後半頃と位置付けることができよう。

Fig.304　3160号遺構（南西より）

3160号遺構（Fig.304－306）

B区第1面，G－23グリッドより検出した。3160号遺構周辺は，第1面での遺構検出時には，不整形の大型の土坑にしかみえなかった。そこを全体的に掘り下げた所，その一部分から遺物の集中箇所が表われ，3160号遺構としたのである。

土師器・陶器・瓦なども出土したが，完形品の青磁皿が含まれていたので，これを図示する。いずれも同安窯系の青磁皿である。

13世紀前半代の遺構と考えている。

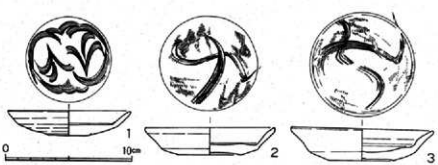


Fig.305　3160号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.306　3160号遺構出土青磁皿

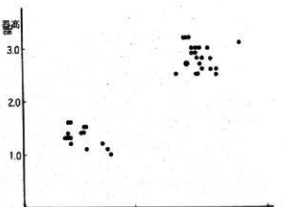
3225号遺構（Fig.307・308）

B区第1面，N～O－21～23グリッドより検出した土坑である。長軸3.9m，短軸0.9mの長楕円形を呈する。

土坑下位から，イルカの脊椎が8個，並んで出土した。他の部位は出土しておらず，解体され，肉がついたままのブロックの状態で，埋められたものと考えられる。

出土遺物をFig.308に示す。1～16は土師器，すべて回転糸切りする。17～19は白磁で，口ハゲの皿である。20は青白磁の小碗である。21～23は青磁。24～30は陶器で，24は皿，25・28～30は鉢，26は壺の底

Fig.307　3225号遺構（南東より）



グラフ11　3225号遺構出土土師器計測値

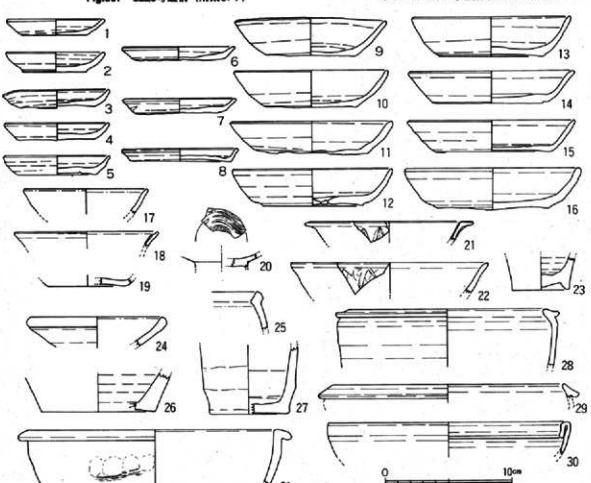


Fig.308　3225号遺構遺物実測図（1／3）

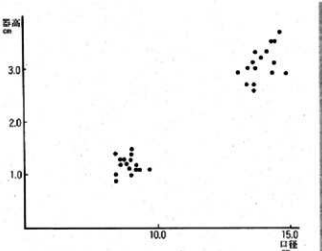
部，27は瓶の底部である。31は土鍋である。外面に煤が付着する。
13世紀後半頃に位置付けられるであろう。

3492号遺構（Fig.309・310）

B区第1面，G−29グリッドより検出した土坑である。3404号遺構の床面から検出した遺構で，上部の遺物を一部，誤って3404号遺構出土として取り上げてしまった。長径約80cm，短径約40cm程の不整楕円形の土坑中に土師器のⅢ，坏がつまった状態で出土した。

出土土師器をグラフ12に，図化したものをFig.310に示す。ただしFig.310の1〜17は，グラフ12には加えていない。グラフ12をみると，Ⅲ・坏とも一定範囲内に集中してはいるが，密集する数値がない点に注意したい。これらの土師器は，すべて外底部を回転糸切りし，内底部に静止ナデを加える。Fig.310−1〜8はⅢ，9〜17は坏である。18は，楠葉型瓦器のⅢである。19は，青磁の碗である。

以上からみて，13世紀後半の遺構であると考えられる。



グラフ12　3492号遺構出土土師器計測値

Fig.309　3492号遺構（南西より）

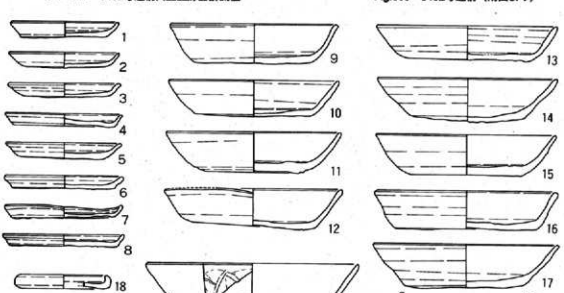


Fig.310　3492号遺構遺物実測図（1／3）

3515号遺構（Fig.311～315）

B区第2面，F～G－30～31グリッドから検出した土坑である。南隅を第1面2890号遺構（近代の井戸）に切られ失うが，全形を推測する妨げにはならない。

3515号遺構は，平面的には一辺150cmの隅丸正方形を呈する。土坑の床面もほぼ平坦で，検出面からの深さは，75cmをはかる。

埋土中からは，まんべんなく遺物が出土するが，特にその上位と床面やや上あたりに集中して出土する傾向がみられた。しかし，下位と上位とで，遺物そのものに変化はなく，同一時期のものと考えて支障はない。

また，出土状況からみて，意図的な要素は感じられず，3515号遺構廃絶に際して，投棄したものと思われる。

したがって，遺物の出土状況およびその内容から，遺構の用途，機能を推測することはできない。きわめて整然とした土坑なので，単に生活残滓の廃棄坑とは考えがたい。積極的な根拠は全くないが，半地下の貯蔵庫的な機能を想定したい。

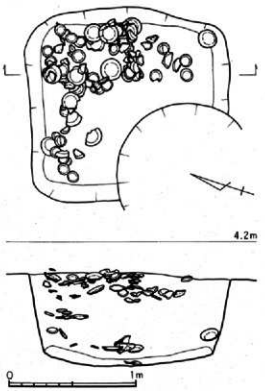


Fig.311　3515号遺構実測図（1／30）

出土遺物を，Fig.313，315に示す。1～72は，土師器である。手捏ねである54を除いて，すべて底部は回転糸切り，体部は横ナデ調整で，内底部に静止ナデ調整を加えている。1～53は，皿である。皿には，立ち上りの浅い扁平なタイプ（3・6・7・11・13・18・19・20・31・38）などと，浅いながらも立ち上りが明瞭なタイプとがあるが，両者は口径をとると，さほどはっきりと分離できるわけではない。全体としてみれば，口径7.5～9.95cm，器高0.7～1.4cmの範囲内におさまっている。54は，手捏ねの坏である。胎土は灰白色で肌理細かく，焼成も良い。京都産の搬入土器と考えられる。55～72は坏である。坏にもやや浅めなものとそうでないものとがあるが，皿以上にはっきりとした区別はない。口径は13.8～16.6cm，器高2.2～3.1cmの範囲内にある。73～79は，白磁である。73・74は高台付皿で，見込みの釉を輪状に掻き取る。80～83は，青白磁である。80・81は皿で，81は口ハゲにつくる。82は小碗で，内面に印花文を持つ。口縁は口ハゲとする。83は碗である。84～87は，青磁の碗である。88は吉州窯系天目茶碗

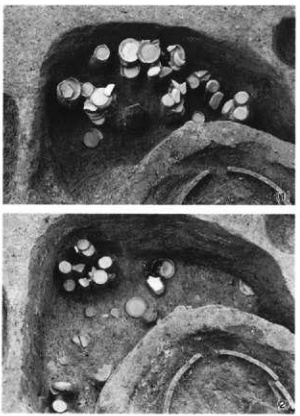


Fig.312　3515号遺構（1）埋土上位（2）、底面（南西より）

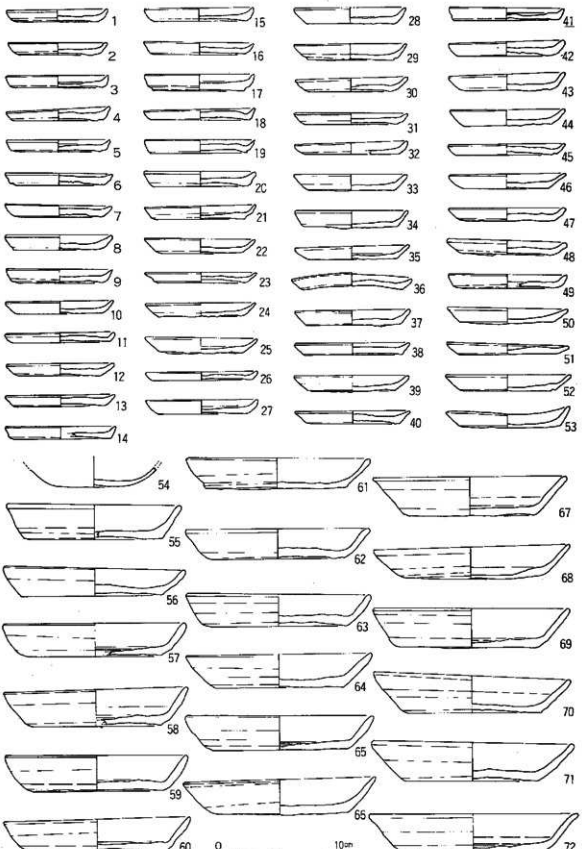


Fig.313 3515号遺構遺物実測図1（1／3）

である。内外面に，鉛釉状の斑点がうく。89～93は，陶器である。89は無釉の焼き締め陶器で，こね鉢の口縁部である。90・91は，黄釉の盤である。口縁端部は露胎となる。91の口縁端部の下面には，白土が付着している。92は壺の底部である。93は，褐釉陶器の水注である。赤茶色のキメ細かい胎土に，茶褐色の不透明釉をかける。器高は，21.1cmをはかる。

13世紀前半頃の遺構と考えられる。

Fig.314　褐釉水注出土状況（北西より）

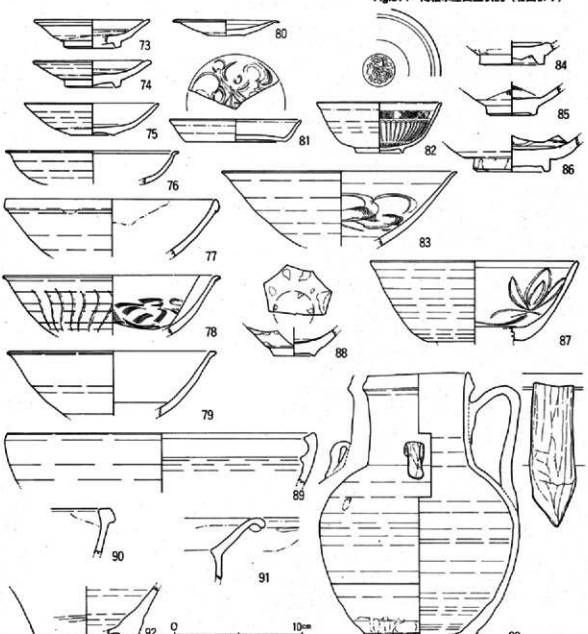


Fig.315　3615号遺構遺物実測図２（１／３）

3517号遺構（Fig.316～318）

B区第２面，F－29グリッドより検出した土坑である。西側を，第１面2877号遺構に切られるが，大方の復原は可能である。

平面的には，推定長径85cm，短径68cmの卵形を呈する。断面形は，浅い鍋底形で，最深部で検出面からの深さは13cmをはかる。

土坑中央付近の埋土上位から，土師器を主とした遺物が出土した。本来の掘り込み面は，もっと高く，第１面と第２面との中間にあったと考えられるから，3517号遺構が埋まる中間の段階で投棄された遺物と考えることができよう。

出土遺物を，Fig.318に示す。**１～14**は，**土師器**である。すべて，外底部を回転糸切りする。体部は，横ナデ調整し，さらに内底部に静止ナデ調整を加えている。**１～９**は，皿である。顕著な差ではないが，口径に対して器高が低いもの（**５～９**）とそうでないものとがある。前者の方が，全体的にみて，後者より口径が大きい様である。**１～４**は，口径8.2～8.4cm，器高1.1～1.5cm，**５～９**は，口径8.6～9.0cm，器高1.1～1.2cmをはかる。**10～14**は坏である。坏には，皿の様な形態上の違いは認められない。法量的には，口径12.7～14.0cm，底径8.5～10.0cm，器高2.55～2.9cmの範囲内にある。**15**は，**青磁**である。龍泉窯系の碗で，体部外面に沈線で蓮弁文を描く。

これらの出土遺物からみて，3517号遺構の年代は，13世紀前半頃におくのが妥当であると思われる。

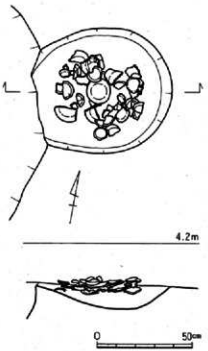


Fig.316　3517号遺構実測図（１／20）

Fig.317　3517号遺構（西より）

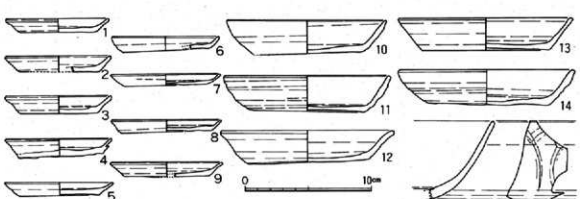


Fig.318　3517号遺構遺物実測図（１／３）

3522号遺構（Fig.319～323）

B区第2面，F－28グリッドより検出した土坑である。径117cmの略円形を呈し，検出面からの深さは24～39cmをはかる。

土坑埋土中から，多数の礫が出土した。これらの礫の配置には特に規則性はなく，土坑中に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物を，Fig.323に示した。1～6は，**土師器**である。1・2は，皿である。1は口径8.6cm，底径7.4cm，器高0.9cmをはかる。器壁の厚さはほぼ均一で，整っている。外底部は回転糸切り，内底部には静止ナデ調整を加える。2は口径9.0cm，底径7.2cm，器高1.45cmをはかる。底部は回転糸切りである。小片のため内底のナデの有無はわからない。3～6は，坏である。外底部は回転糸切り，5・6の内底部には，静止ナデ調整が施される。口径は11.6～12.4cm，底径7.0～8.15cm，器高2.45～2.8cmをはかる。7・8は，**青磁**である。7は，碗の小片で，外面の口縁直下には，雷文をめぐらす。8は，同安窯系の皿である。見込みには片切彫りと櫛描の「之」字文を配する。外底の露胎部には，墨書がみられる。「福」＋花押である。9～11は，**土鍋**である。口縁は，一旦外方に屈曲した後，ゆるく内弯する。内・外面とも，刷毛目調整する。外面には煤が付着する。完形に復原できた

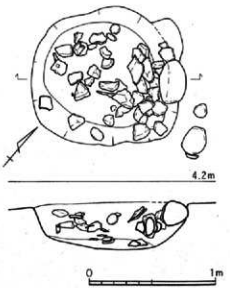


Fig.319　3522号遺構実測図（1／30）

Fig.320　3522号遺構（南東より）

Fig.321　3522号遺構瓦当出土状況（東より）

Fig.323-8　Fig.323-12

Fig.322　3522号遺構出土遺物

9で法量を示すと，口径36.0cm，器高17.7cmをはかる。12は，軒丸瓦の瓦当である。瓦当の中央に「卍」文を置き，周囲に珠文を配する。破損しているため，珠文の一部を欠くが，復原すると，全周で14個となる。文様の彫りは浅い。瓦当面の径は，欠損した部分を補って，推定12.5cmとなる。

これらの出土遺物からみて，15世紀頃の遺構と考えられる。

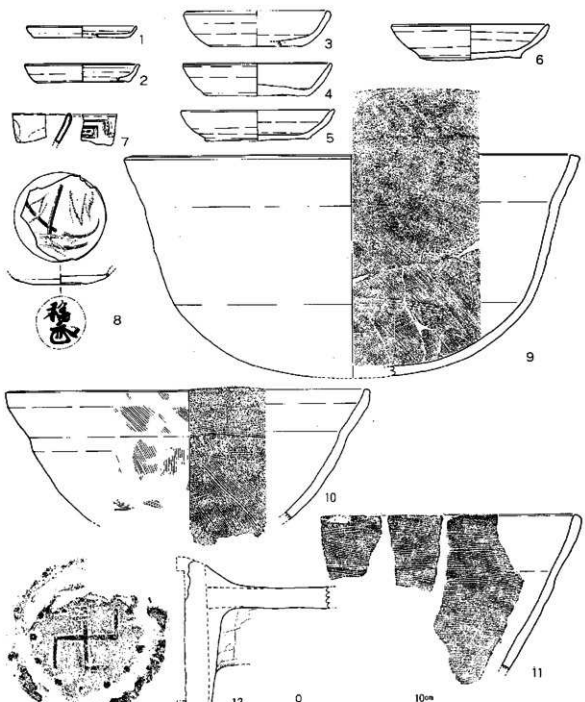


Fig.323　3522号遺構遺物実測図（1／3）

3567号遺構（Fig.324～326）

B区第2面，I－30グリッドより検出した土坑である。長径54cm，短径47cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは14cmをはかる。

土坑の中央付近の埋土上半に，土師器がかたまって廃棄されていた。出土状況からみて，埋積が進行した段階か，あるいは部分的に掘り回めて，土師器を埋め込んだものと考えられる。

出土した土師器を，Fig.326に示す。1～10は，皿である。器肉が厚く，体部の立ち上りが小さい1～3・6・8と，器壁がうすく直線的に立ち上る4・5・7・9・10とにわかれる。しかし，調整は共通しており，外底部は回転糸切り，内底部には静止ナデ調整を加える。口径8.7～10.0cm，底径6.7～8.0cm，器高1.0～1.4cmをはかる。11～13は，坏である。器壁の厚さは，底部から口縁部まで均一で，体部は直線的に開く。外底部は回転糸切り，体部は横ナデ調整し，内底部には静止ナデ調整を加える。法量は，口径－底径－器高の順に，それぞれ15.2－10.4～11.0－2.8～2.6cm，15.4－10.6－2.8～3.0cm，15.6－9.9－2.55cmをはかる。

13世紀前半頃に比定できよう。

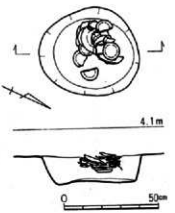


Fig.324　3567号遺構実測図（1／20）

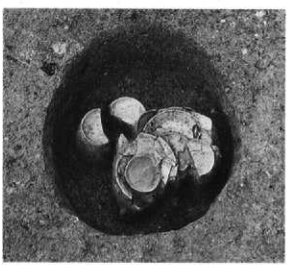


Fig.325　3567号遺構（北西より）

3656号遺構（Fig.327～334）

B区第2面，C－25～26グリッドより検出した土坑である。長辺165cm，短辺105cmの隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは36～54cmをはかる。

埋土中より，大量の遺物が出土した。Fig.327の平面図に図示したのは，検出面近くで出土した遺物のみである。埋土は，ほとんど大部分が遺物で占められていたが，遺物の密度の濃淡，土質などから，大きく4層に分けることができた。①層は検出時に露出していた面で，たまたま断面図に遺物がかからなかったが，まとまった量の出土はあった。②層は黒色の炭化物まじりの土器層である。遺物は，きわめて多く，中には魚骨などの生活残滓もまじっていた。③層は暗灰色土層で，遺物をあまり含まない土層である。④層は，暗褐色土まじりの土器層で，②層同様に多量の遺物が出土した。

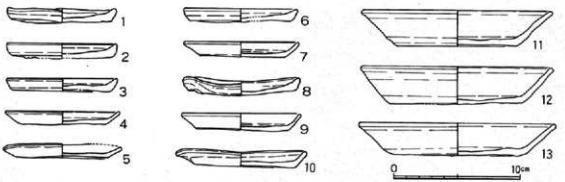


Fig.326　3567号遺構遺物実測図（1／3）

これらの各層から出土した土師器を計測し，グラフ13に示した。点数が非常に多いため，完形品を主体に計測したが，傾向をうかがうことは可能であろう。ここで確認しておきたい点は，次の2点である。第1点は，皿に比べ，坏の法量の幅が広く，ばらつきが大きい点である。もう1点は，各層別のグラフを重ね合わせると，全く重なってしまい，はみ出るものがないという点である。特に第2点目からは，土師器の時代性を法量変化の傾向として把えるという北部九州での中世土師器編年の方向性に立って見れば，④層から①層の時間幅は，ほとんどないと言うことになる。

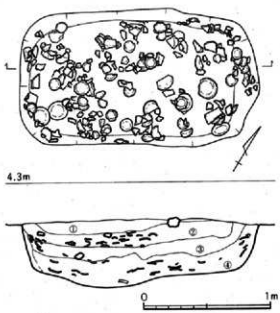


Fig.327　3656号遺構実測図（1／30）

しかし，大量の遺物が出土した④層と②層の間に，遺物をあまり含まない③層がはさまっていることは事実であり，3656号遺構への土器の廃棄が，若干の間をおいた2回にわかれることは間違いない。要は，その間というのが，遺物の編年観にふれる程の，長い時間ではなかったということであろう。よって，以下では，3656号遺構出土遺物を単一時期の遺物として扱う。

なお，3656号遺構からは，パンコンテナ（TS−28タイプ）にして，ぎっしりとつめて16箱分の遺物が出土したことをつけ加えておく。

Fig.329〜334に出土遺物の一部を示す。1〜45は，土師器である。すべて外底部を回転糸切りする。体部は横ナデ調整，さらに内底部に静止ナデ調整も加えるのが一般的で，内底のナデ調整を行わないのは，41のみである。1〜33は，皿である。形態的特徴から4類に分類できる。1〜3は，器高が低く体部の立ち上りの小さいもので，底部から口縁にかけての断面形は，ほとんど三角形に近い。4〜9は，やはり浅い皿形であるが，底径が小さく，底部から薄い体部が真横に開く様にのびて，ゆる

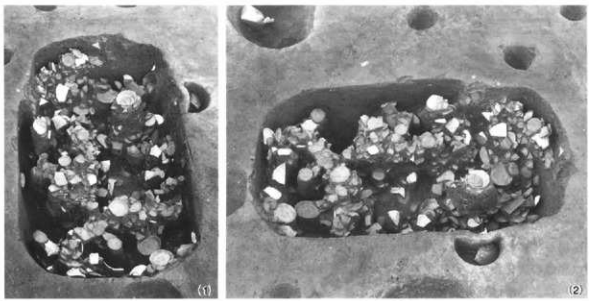


Fig.328　3656号遺構　（1）南西より、（2）南東より

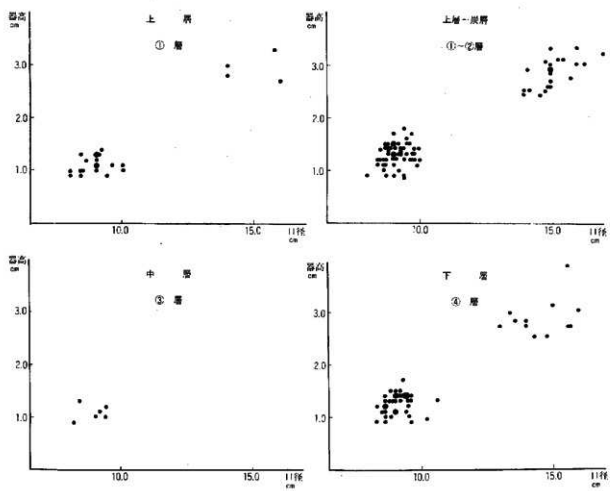
く内弯して口縁をつくるタイプである。32・33は，口縁に対して径の小さい底部から，一旦クッションをつけてから外反する薄い体部につづくもので，器高は比較的高い。10～31は，上記以外のものであるが，この中にも27・30の様に扁平な形状をとる一群があり，さらに分類することは可能である。上の分類ごとに法量分布の幅を記すと，口径ー底径ー器高の順に，1～3は8.6～9.4－7.0～8.2－0.9cm，4～9は，9.0～9.9－5.8～6.6－0.9～1.3cm，10～31は8.2～10.5－6.2～7.5－0.9～1.4cm，32・33は8.8～9.3－6.3～7.1－1.4～1.7cmとなる。

34～45は坏である。皿の様に顕著な形態的差はみられないが，前述した様に法量的なばらつきは大きい。法量の幅を示すと，口径13.4～17.0cm，底径8.8～11.2，器高2.5～3.6cmとなる。

46は，**内黒土器**（黒色土器A類）の椀である。畿内系黒色土器で，前代の遺物の混入であろう。

47～62は，**青磁**である。47～51は皿で，47・48は龍泉窯系，49～51は同安窯系である。49の外底部には，墨書が認められる。墨がかすれていて，はっきりとは見えないが，「僧」と判読できる。52～62は碗である。52～57が同安窯，58～62は龍泉窯系である。62の見込みには，4ケ所に，白色の石灰の様な目土が付着している。

63～69は，**青白磁**である。63は，三足の香炉である。釣手部分の上半を欠く。内面の中央に，三爪のハマの痕跡がみられる。焼成時に，何か別のものを乗せて焼いたものであろう。64は皿である。



グラフ13　3656号遺構出土土師器計測値

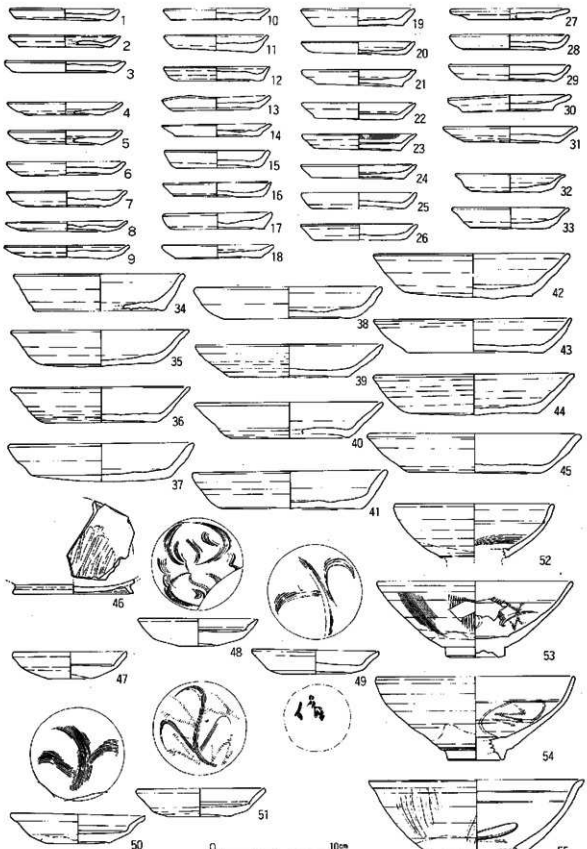


Fig.329 3656号遺構遺物実測図1（1／3）

65～69は，碗である。65は，口縁を幅広く口ハゲにする。体部外面には，精緻な沈線で蓮弁を刻む。66・68・69は，内面に櫛描文をあしらう。67は，幅の狭い片切彫りで花文を描く。66・67は，口縁部を何ケ所か（おそらく全国で6ケ所）浅く抉って，輪花に作る。69の高台内には墨書がみられるが，遺存部分のみでは判読できない。

70～73は，白磁の碗である。ゆるく内弯しつつ大きく開く体部から，一転外反して口縁にいたる。器壁こそやや厚いが，青白磁の碗67などに通じる形態で，精美なつくりである。70・73は，内面に片切り彫りの花文を，71・72は櫛描文をあしらう。71は，口縁に浅い抉りを入れ，輪花に作る。

74～79は，陶器である。74は，黄釉の鉢である。口縁部上面に，目痕が並ぶ。75は，緑釉の盤である。

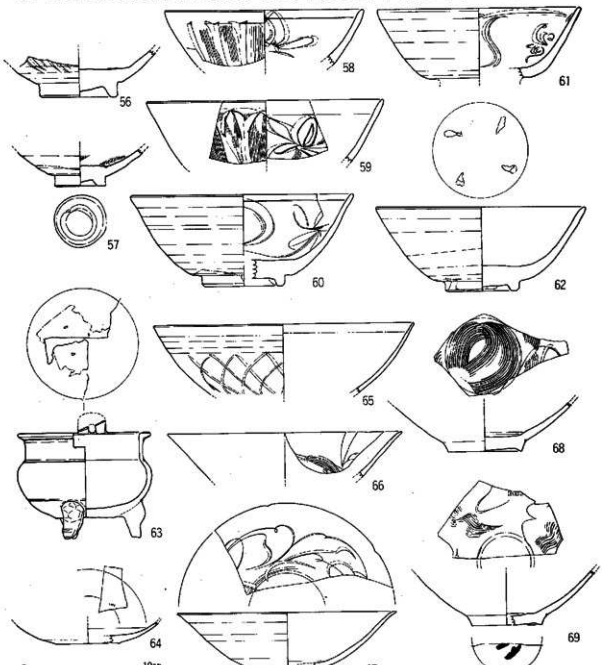


Fig.330　3656号遺構遺物実測図2（1／3）

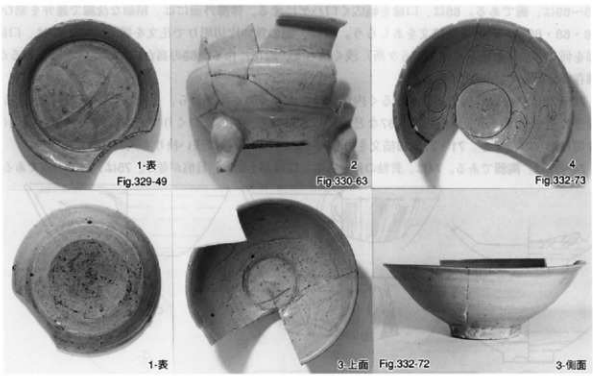


Fig.331　3656号遺構出土遺物Ⅰ

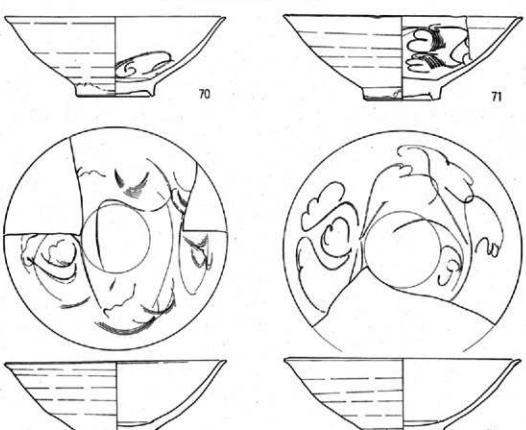


Fig.332　3656号遺構遺物実測図３（１／３）

小片のため，口径不明。76は，黄釉鉄絵の盤である。内底部に文様を描くが，遺存部位が小さいため，意匠はうかがえない。口縁部上面と体部下位に，目痕がみられる。77は，黄釉の鉢である。口縁部上面に，目痕が並ぶ。78は，褐釉の瓶である。全体に施釉する。体部は横ナデ調整されるが，外面の体部下位には，回転削り痕がみられる。外底には，目痕がべったりとつく。79は，褐釉の甕の底部である。胴部に縦耳がつく。体部下位には，小さな目痕が，狭い間隔で並んでいる。体部下位から外底部は，露胎とする。

80は，**瓦質土器**である，鉢であろう。口唇部と内面に，若干だがヘラ磨きがみとめられる。

81～84は，瓦である。81は丸瓦で，内面には布目，外面には粗い格子目叩き痕を持つ。肉厚で，重い。古代の瓦である。82～84は，平瓦である。下面はナデ調整によって叩き痕を消す。上面には，布目が残る。いずれも桶巻造りの瓦で，83には，桶の模骨を綴っていた縄の痕跡が，バルブ状に残っている。83は，図の左面・右面・下面とも面取りされており，幅の狭い瓦である。実際に，屋根に葺かれたものか疑問が残る。むしろ，桶巻き造りで切り離して行った結果，中途半端な余分が出たと言うことであろうか。とすれば，それも不慣れな話で，首肯しがたい。用途は不明だが，意図して作ったものと考えたい。

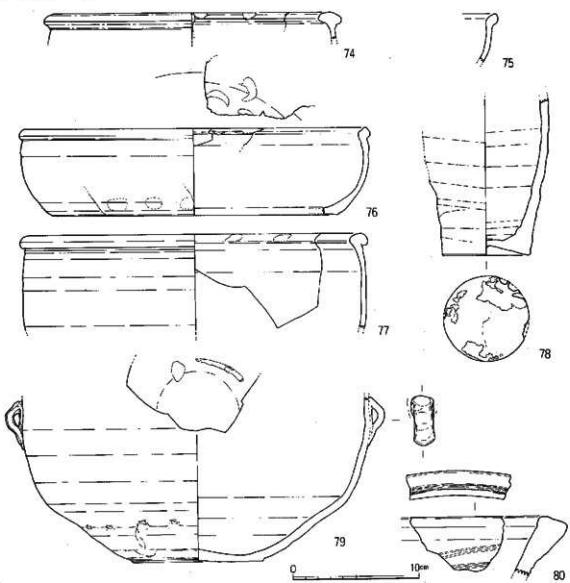


Fig.333　3656号遺構遺物実測図4（1／3）

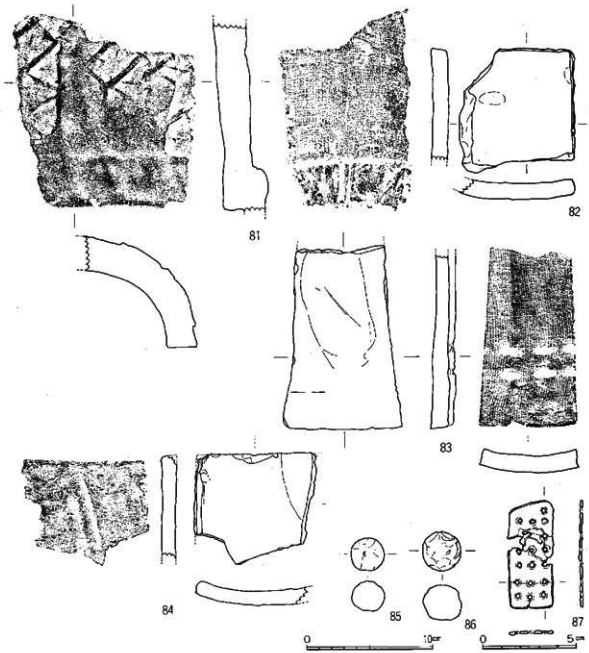


Fig.334　3656号遺構遺物実測図5（1／3，87-1／2）

85・86は**穂杖玉**である。砂岩製。全面を搖打して丸く仕上げる。

87は，**鎧の小札**である。鉄製の三ツ目札である。長さ5.65cm，幅2.4cm。鍛造品だが，厚味はなく薄手である。

以上の出土遺物から，3656号遺構の時期として，12世紀後半から13世紀初頭にかけての時期を，考えたい。

3677号遺構（Fig.335～349）

B区第２面，C－D－23－24グリッドで検出した土坑である。長辺2.4m，短辺2.0mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは68cmをはかる。

埋土中より大量の遺物が出土した。Fig.335の平面図には，検出面で出土した遺物のみ書き入れている。また，遺物は，A－Cの３層にわけて取り上げた。A層は検出面の層からB層の上まで，B層は炭化物・灰を含んだ黒色土層群，C層は土坑最下部に厚く堆積した暗褐色土層である。遺物は各層からまんべんなく出土した。またB層には，魚骨・獣骨など生活残滓が多くまじっていた。

A層～C層の時間的な比較をみるため，各層から出土した土師器の法量を，グラフ14に表した。その結果，各面を通じて，法量的な差異はほとんどないことが明らかになった。もちろんそれぞれの層の形成に関わった程度の時間の推移はあった筈だが，ほとんど同時と考えて大過ないと判断できる。

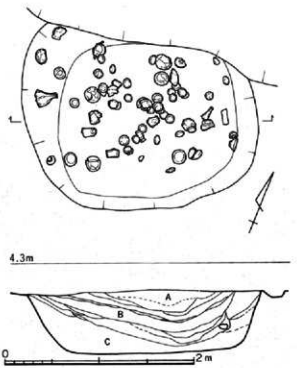


Fig.335　3677号遺構実測図（1／40）

したがって，3677号遺構も3656号遺構と同様に，短期間で営まれ埋められた土坑と判断できる。

Fig.336　3677号遺構土層断面

出土遺物を，Fig.338～349に示す。Fig.338－１～55は，土師器である。１～40は皿である。前項の3656号遺構にみられた様な，形態的なバリエーションは，みられない。外底部はすべて回転糸切り

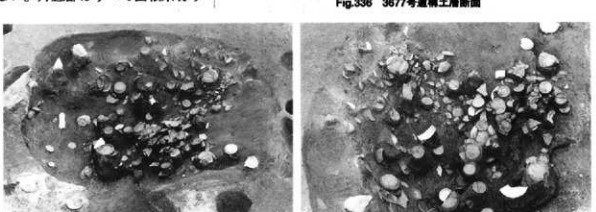


Fig.337　3677号遺構（１）北西より、（２）北東より

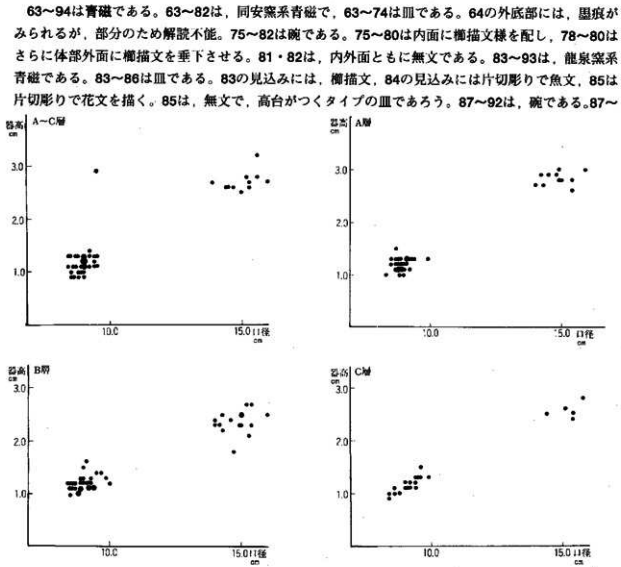
し，体部は横ナデ調整，さらに内底部に静止ナデ調整を加える。口径は，8.3～10.0cm，器高0.9～1.4cmをはかる。15の外底には墨書がみられるが，破片のため判読できず，意味不明。41～55は坏である。やはり形態的なバリエーションには欠ける。法量をとると，口径14.0～16.0，器高2.4～3.2cmをはかる。外底部は回転糸切りで，体部は横ナデ調整し，内底部には，静止ナデ調整を加える。41の口径から内面には，べったりと煤が付着しており，灯明皿として用いられていたことを示している。また，55の内面には，墨書がある。全体を知りえないが，「千」と読める。

56は，灰釉陶器の碗である。横ナデ調整する。釉はみとめられず，山茶碗とするべきか。

57は在地産の瓦器皿である。内面を平滑に均す。58～61は，楠葉型瓦器である。58～60は椀である。58は，体部外面のヘラ磨きがなされず，内面もまばらに暗文状のヘラ磨きを加える程度である。13世紀代の楠葉型瓦器とのことで（高槻市教育委員会，橋本久和氏御教示による），博多では13世紀に下る楠葉型瓦器椀の出土は，はじめてである。59・60は，内外面にヘラ磨きを施すものである。61は小壺である。体部に横方向のヘラ磨きを加える。

62は土鍋である。L字型に折り曲げた口縁の上面に，縄目をころがす。

63～94は青磁である。63～82は，同安窯系青磁で，63～74は皿である。64の外底部には，墨痕がみられるが，部分のため解読不能。75～82は碗である。75～80は内面に櫛描文様を配し，78～80はさらに体部外面に櫛描文を垂下させる。81・82は，内外面ともに無文である。83～93は，龍泉窯系青磁である。83～86は皿である。83の見込みには，櫛描文，84の見込みには片切彫りで魚文，85は片切彫りで花文を描く。85は，無文で，高台がつくタイプの皿であろう。87～92は，碗である。87～



グラフ14　3677号遺構出土土師器計測値

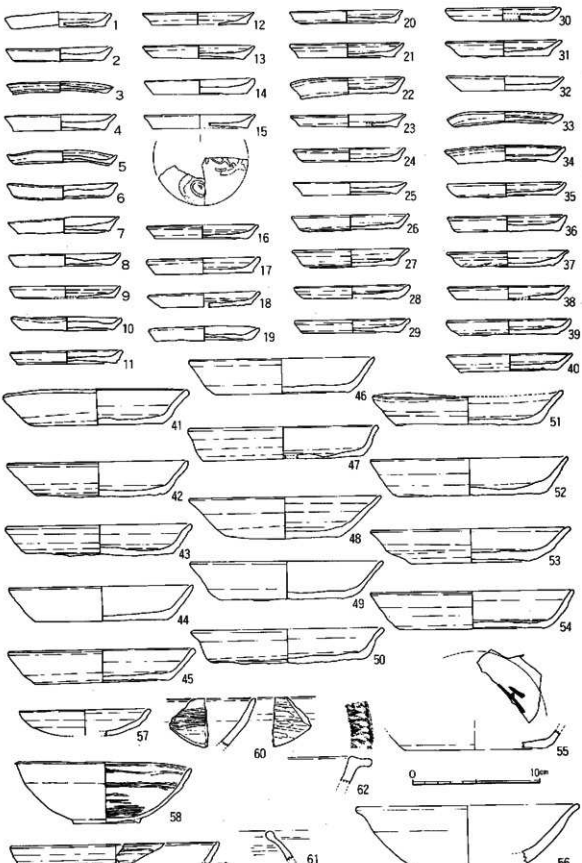


Fig.338 3677号遺構遺物実測図1（1／3）

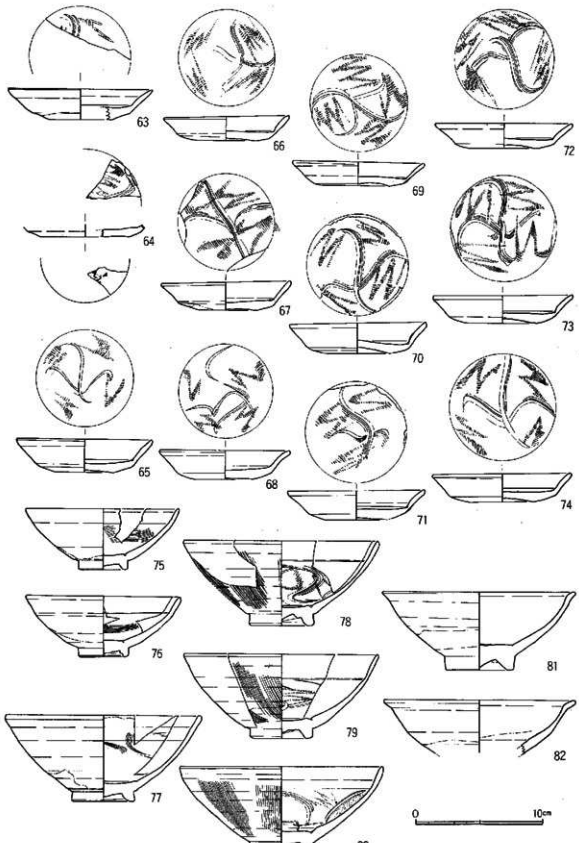


Fig.339　3677号遺構遺物実測図２（１／３）

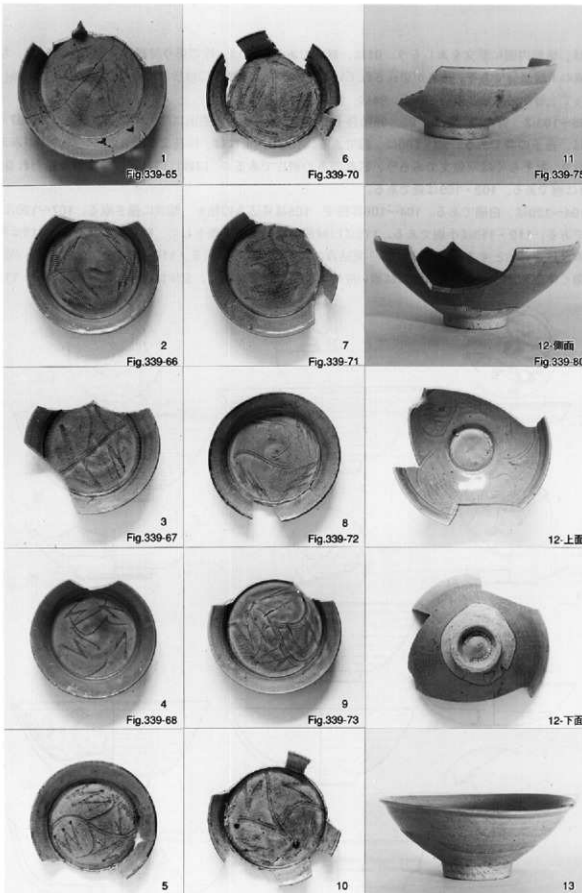


Fig.340　3677号遺構出土遺物 I

90は，体部内面に雲文をあしらう。91は，無文である。92は，片切彫りで劃花文を描く。93は，双層碗の下層部分である。中央が穿孔されている。体部の上端は擬口縁状となるが，本来はここで釉によって上層の皿部分と接合される。94は，盤口壺の口縁である。

95～103は，青白磁である。95・96は合子の蓋で，天井部分の表面には，印花文が施される。97・98は，合子の身である。99・100は，皿である。100の内面には，印花文が施される。魚の尾がみえており、おそらくは双魚文であろう。底部のみの破片であるが，口縁は口ハゲにつくると思われる。101は碗である。102・103は壺である。

104～120は，白磁である。104～106は皿で，105は見込みの釉を，輪状に掻き取る。107～120は，碗である。112・113は小碗である。112は口縁部から白堆線を垂下して，輪花状に見せる。113は見込み全体を露胎とする。114・115は，見込みの釉を輪状に掻き取る。116～120は，大きくラッパ状に開く体部を持つもので，内面には細い片切彫りで劃花文を描く。全体に作りは比較的薄いが，118

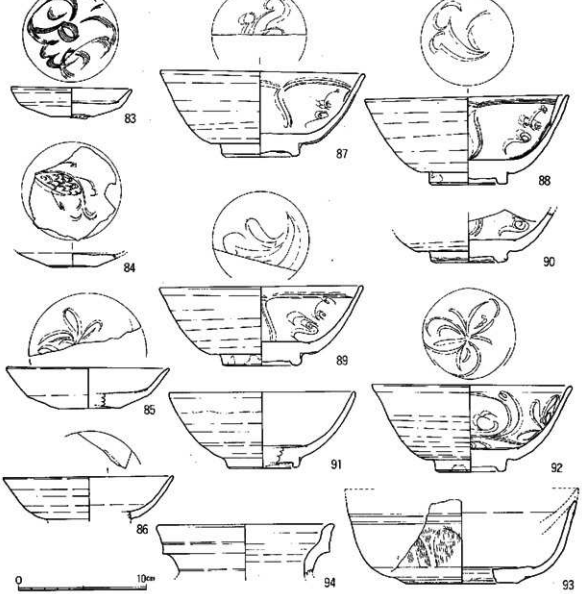


Fig.341　3677号遺構遺物実測図３（１／３）

は，肉厚になっている。

121・122は，天目茶碗である。黒釉に金彩を加える。

123～140は陶器である。123は黒褐釉の皿である。124は，褐釉の鉢である。片口につくる。125・126は褐釉の鉢である。126の体部下位には，目痕が並んでいる。127は黄釉の壺である。128～130は，褐釉の鉢である。125や126の底部にあたると思われる。131は，褐釉の壺の底部である。

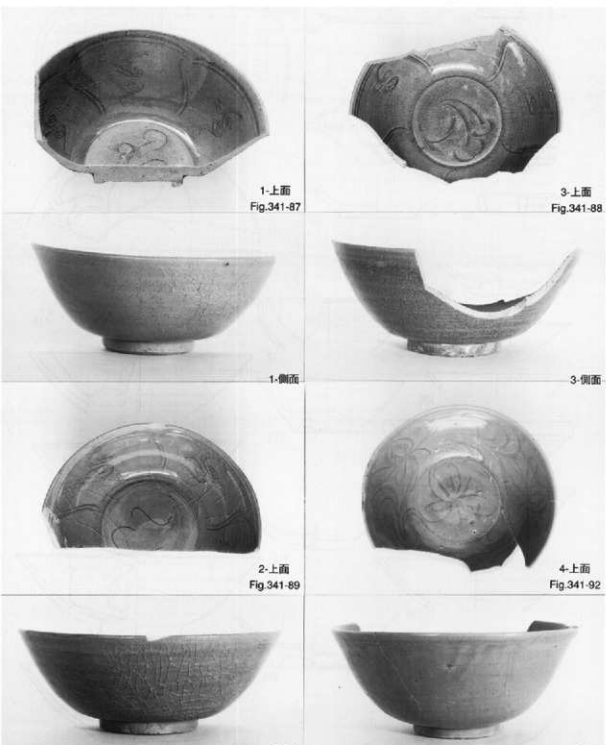


Fig.342　3677号遺構出土遺物 2

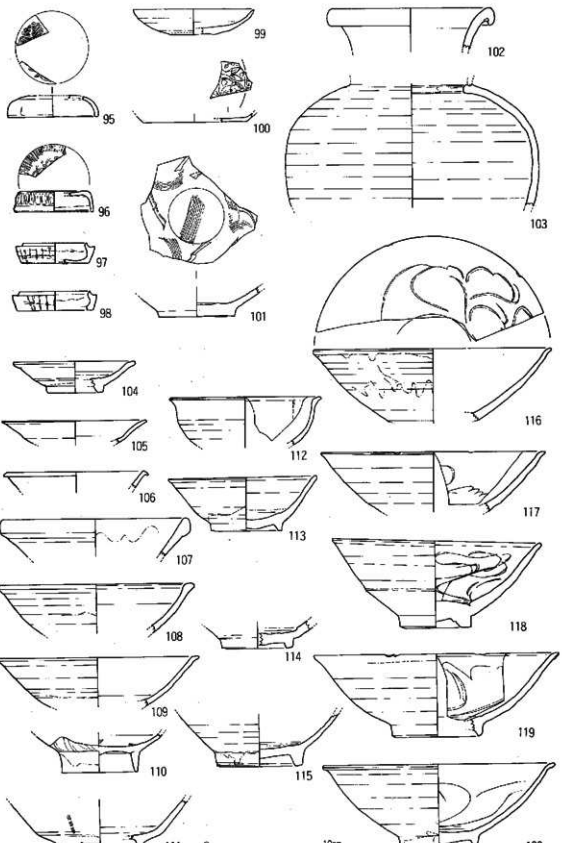


Fig.343 3677号遺構遺物実測図4（1／3）

外底部には，「大」字を墨書する。132は，黒褐釉の瓶である。133は，黄釉の盤である。口縁部上面には，目痕が並ぶ。134・135は，褐釉のすり鉢である。内面には，14本程度を単位としたすり目を入れる。136・137は，無釉のこね鉢である。堅く焼き締めている。体部内面の下位から内底にかけては，使用のため磨滅し，平滑となる。138は，茶褐釉をかけた壺である。頸部から肩にかけて，縦耳が4ケ所つく。139は，黄釉鉄絵の盤である。内底部分の一部しか遺存していないが，見込みには鉄絵で草花文を描いている。140は，大甕の口縁部である。

141～143は，石製品である。141はサイコロである。石材は，未だ鑑定を経ていないので，明言できない。1辺約1.2cmの立方体で，各面を円錐形に彫り込んで，サイの目を刻んでいる。拓本で示した様に，目の配列は現在と同じで，反対側の面の数字との和が，どの面をとっても7になる。142は，滑石製の合子もしくは蓋である。口径4.2cm・底径3.8cm，器高1.0～1.5cmをはかる。143は，石鍋の底

Fig.344　3667号遺構出土遺物3

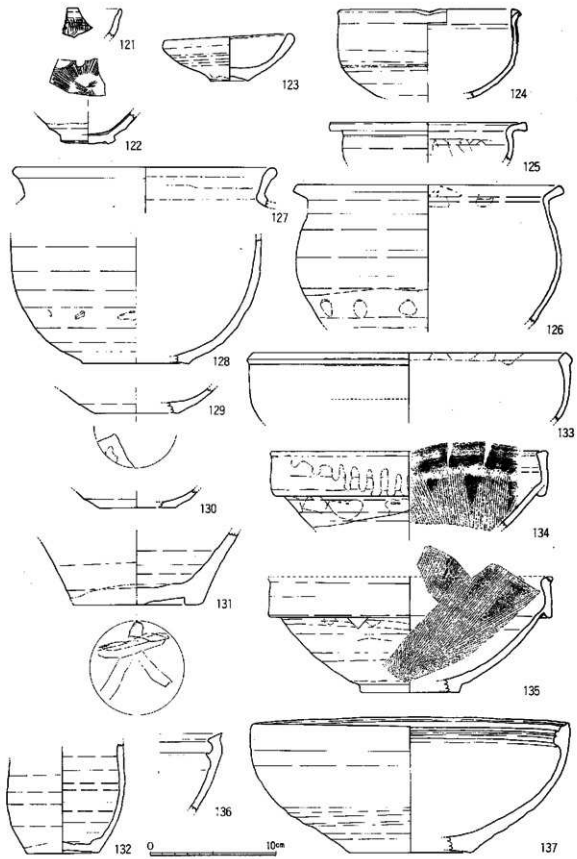


Fig.345　3677号遺構遺物実測図5（1／3）

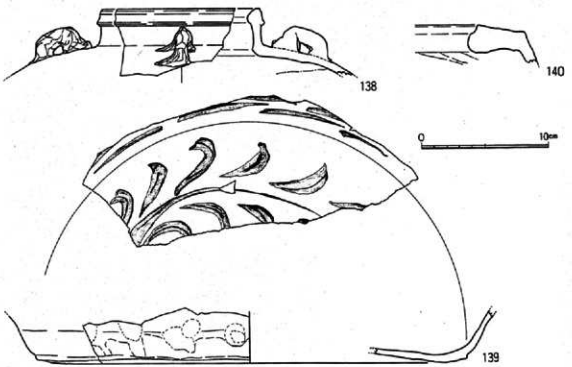


Fig.346　3677号遺構遺物実測図6（1／3）

部である。整形時の削り痕を，良好にとどめている。また，外面には煤が付着する。

144～147は，平瓦である。いずれも，須恵質がかった瓦質に焼成されている。桶巻作りによって作られており，瓦の上面には内型である桶にかぶせた布目が，下面には外側から瓦の粘土を叩き締めた叩き目が残るが，下面の叩き目はナデ消されている。144・146・147には，桶の模骨を綴じた縄の圧痕が，バルブ状につく。瓦の厚さはおおむね等しく，14～16mm程度をはかる。

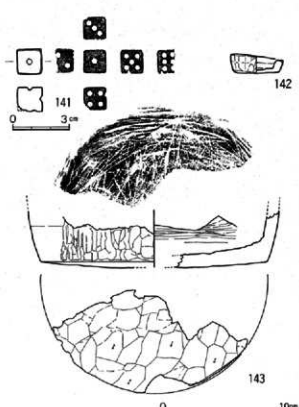


Fig.347　3677号遺構遺物実測図7（1／2・1／3）

Fig.348　3677号遺構出土サイコロ

また，最も遺存部位がそろう147から瓦の法量をはかると，長さ23.6cm，上の小口の幅17.2cm，下の小口の幅21.2cmとなる。

以上，出土遺物の一部を報告したが，これらの遺物から見て，3677号遺構の時期は，13世紀初め頃にあてるのが妥当であろうと考える。

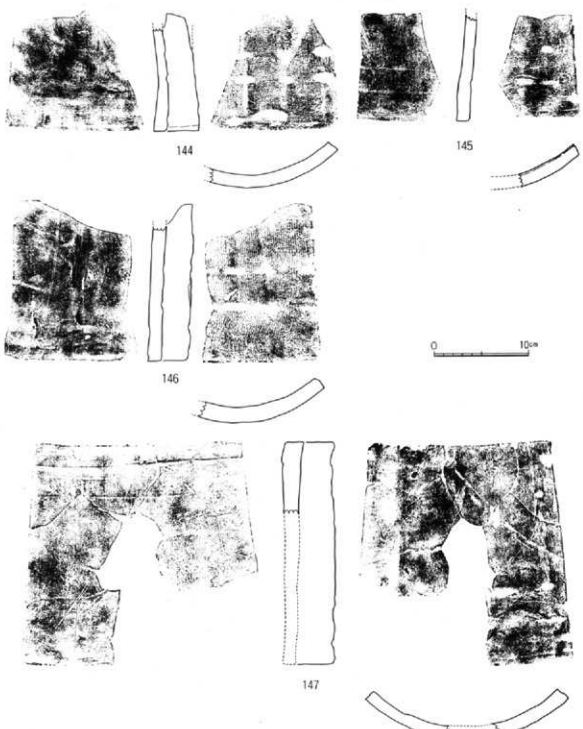


Fig.349　3677号遺構遺物実測図 8（1／4）

3678号遺構（Fig. 6・350・351）

B区第2面，B～D－23～24グリッドより検出した土坑である。前項の3677号遺構を切る。北側を3744号遺構，3824号遺構（共に井戸）で切られるため，全形を知りえない。遺存する部分からみて，長辺256cm以上，短辺176cmをはかる。検出面からの深さは45cmをはかる。

埋土中より多量の遺物が出土した。出土遺物の一部を，Fig.350・351に示す。1～26は，土師器である。すべて外底部は，回転糸切りされる。1～18は皿である。1～3は，口径に対して器高が低く浅い皿で，体部の立ち上りは小さい。口径8.5～8.95cm，底径6.8～7.8cm，器高0.9～1.3cmをはかる。4～18は，底部から細く伸びて立ち上る体部を持つもので，口径7.6～9.6cm，底径4.8～7.1cm，器高1.1～1.45cmをはかる。4・5・7で，内底部の静止ナデ調整を欠くが，それ以外は，ナデ調整を加える。19～26は坏である。口径13.3～14.9cm，底径8.1～10.1cm，器高2.6～3.0cmをはかる。25・26を除いて，内底部に静止ナデ調整を施す。27～29は，白磁である。27は皿，28・29は碗である。30は，青白磁

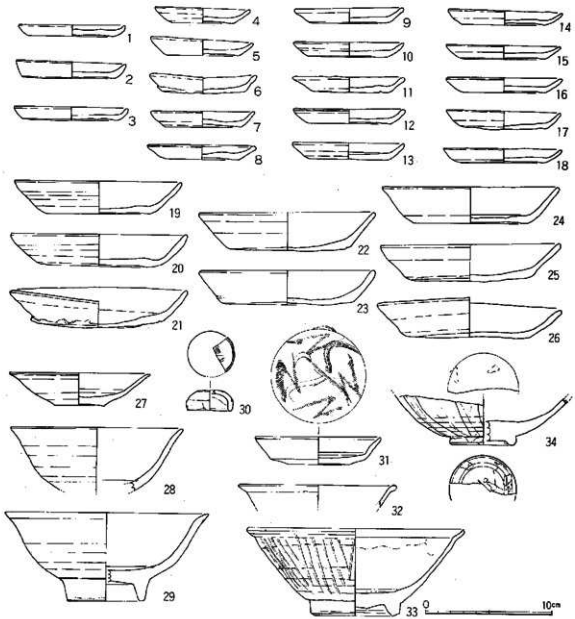


Fig.350　3678号遺構遺物実測図1（1／3）

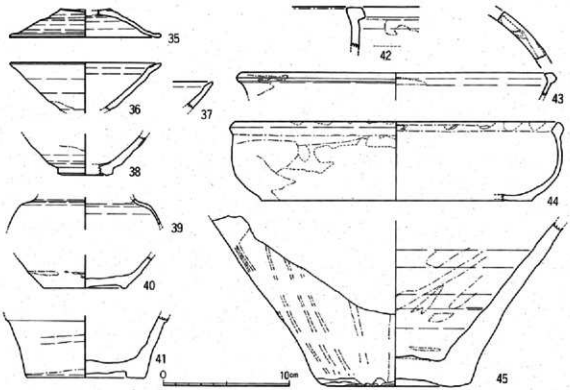


Fig.351　3678号遺構遺物実測図２（１／３）

の合子の蓋である。天井部分に，印花文を施す。31～34は，青磁である。31は，同安窯系の皿である。33は同安窯系の粗製の碗で，内面は無文，見込みの釉を輪状に掻き取って露胎とする。34は龍泉窯系の碗で，鏑蓮弁文を持つ。35～45は，陶器である。35は，無釉陶器の蓋である。灰白色のやや粗い胎だが，薄く作られている。36～37は天目茶碗である。39は，黒褐釉を施した茶入の破片である。茶色のきわめて精良な胎土で，薄く作られる。40・41は，褐釉の壺の底部である。42は黄釉の盤である。口縁部は，露胎となる。43は，褐釉の盤である。44は，黄釉の盤である。口縁直下から内面に施釉する。口縁上面には，目痕が並ぶ。45は，飴釉の甕の底部である。

この他，瓦器片，瓦片が出土している。

13世紀前半に比定される。

3749号遺構（Fig.352～357）

B区第２面，D－21～22グリッドより検出した土坑である。西側を，3744号遺構（井戸）に切られるが，おおよそを推定することはできる。推定長辺200cm，短辺104cmの隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは，30cm前後をはかる。

埋土中より，多量の遺物が出土した。前述した3656号遺構・3677号遺構・3678号遺構などと同様に，生活残滓の廃棄土坑であり，その中に土器・陶磁器類が一括して捨てられたものと推測される。

Fig.352　3749号遺構（北東より）

出土遺物を，Fig.354～357に示す。1～40は，土師器である。すべて，外底部を回転糸切りする。体部は横ナデ調整し，内底部には静止ナデ調整を加える。1～25は皿である。1～7は，口径に対して器高が低く，体部の立ち上りも小さいタイプで，口径8.4～9.5cm，器高0.7～1.0cmをはかる。8～23は，体部が明瞭に立ち上るもので，細かくみれば，直線的に立ち上るタイプ（1），内弯して立ち上るタイプ（13・22など），体部中程で屈曲を作って内弯するタイプ（9・17・19など）に分類することは可能だが，あえて分類する必要はないと考える。口径は8.4～9.8cm，器高0.9～1.4cmをはかる。24・25の内底部には，ほぼ全面に煤が付着しており，灯明皿として用いられたことを示している。26～40は，坏である。形態的には分類するまでもないが，器壁をみると，体部が薄くなだらかにのびるもの（30・32～36・38・40）と，厚味を持つものとがある。ただし，法量的に両者を区別することはできない。製作者レベルでの小異であろうか。また，法量のみ取れば，26は他と比べて明らかに小さく，口径11.6cm，底径8.2cm，器高2.4cmをはかる。他は，口径13.6～14.8cm，器高2.3～3.1cmの範囲内に集中している。

41・42は，土師質土器である。41は，羽釜である。42は，こね鉢で，内面は磨滅する。

43・46は，瓦質土器である。43はこね鉢で，内面は磨滅している。46は，鍋であろうか。内面に火を受けて，黒変している。

44・45は，朝鮮の須恵質陶器である。壺の破片である。44は頸部で，波状文が刻まれる。

47・48は，楠葉型瓦器の椀である。47は，内面にはあらく暗文状のヘラ磨きを巡らすが，外面にはヘラ磨きを施さない。48では，内外面とも密にヘラ磨きを行なっている。

49・50は須恵器である。いずれも壺の口縁である。

51～60は，青白磁である。51・52は合子の蓋，54は同じく身である。53は，小壺の蓋である。頂部のつまみは，円環となる。55・57～59は，皿である。57・58は口縁を口ハゲとし，体部内面と見込みに，印花文をあしらう。60は，鉢である。小さい高台を判り出している。

Fig.353　3749号遺構出土遺物

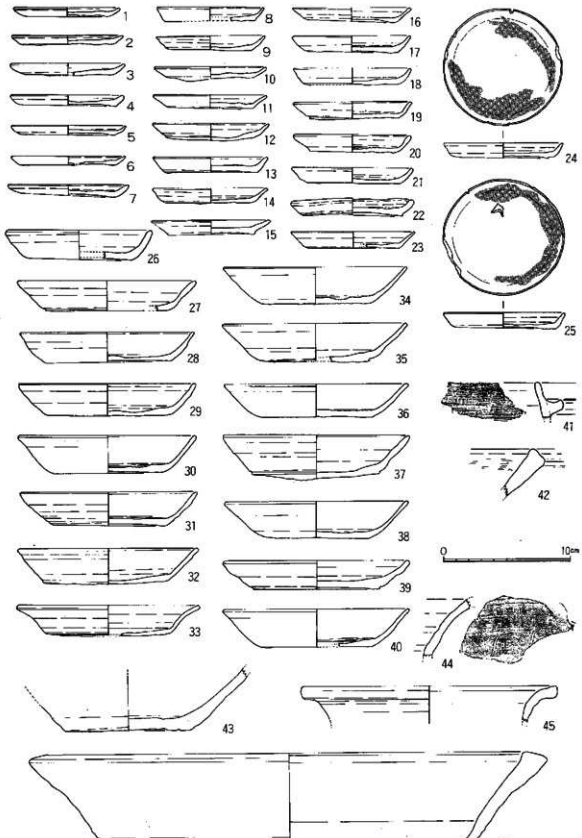


Fig.354　3749号遺構遺物実測図1（1／3）

61～72は，白磁である。61は，口ハゲで印花文を持つ。釉調から白磁としたが，むしろ青白磁に入れるべきか。62・63は高台付皿である。見込みの釉を，輪状に削り取って露胎とする。65は，口ハゲの皿の底部である。66～72は碗である。

73～87は，青磁である。73～75は同安窯系の皿，76～81は，同じく碗である。75は，内面は無文で，外底の露胎部に墨書がみられる。かすれており判読不能。78～81は，見込みの釉を輪状に掻き取る。82～87は，龍泉窯系の碗である。82・83は鎬蓮弁文，84・86・87は劃花文をあしらう。85は，双層碗である。上層の碗の部分の破片で，下層との接合部分が一部残っている。

88は天目茶碗である。

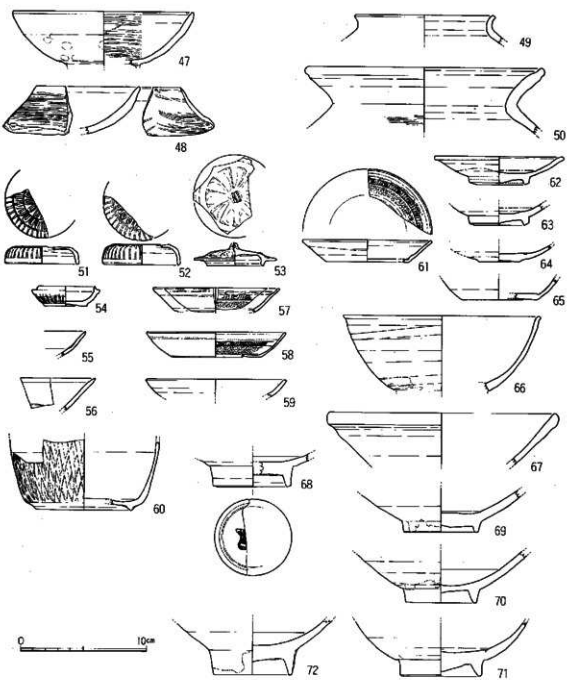


Fig.355　3749号遺構遺物実測図２（１／３）

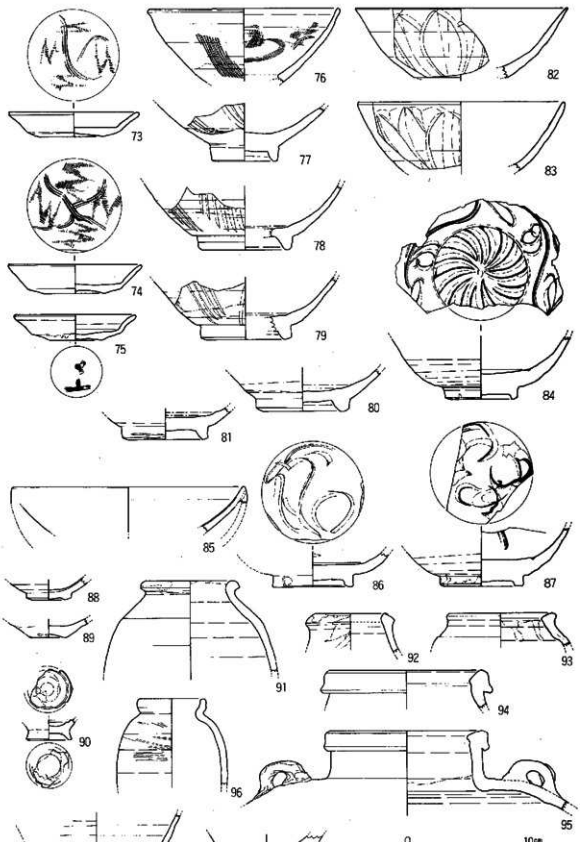


Fig.356　3749号遺構遺物実測図３（１／３）

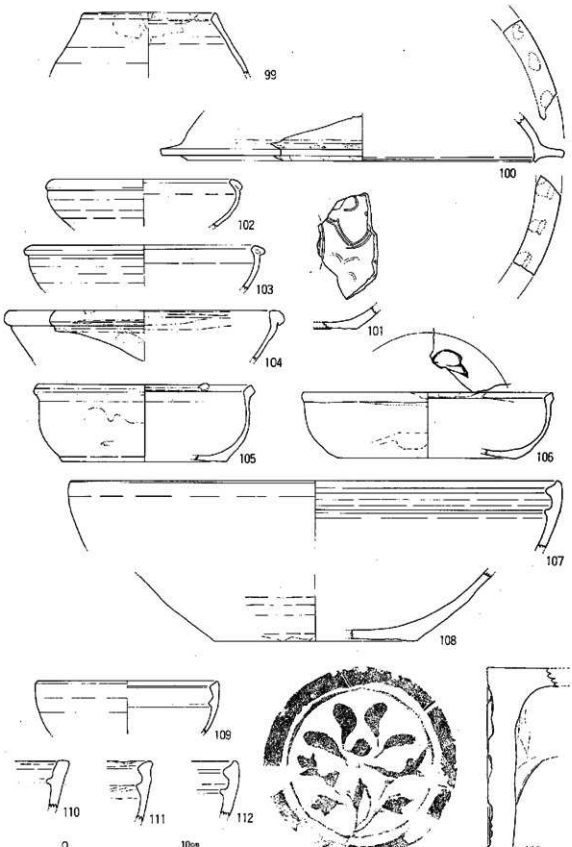


Fig.357　3749号遺構遺物実測図４（１／３）

89～112は，陶器である。89は褐釉のⅢである。90は，緑釉の底部で，小壺の高台部分であろうか。91～93・96は，褐釉の瓶である。94・95は，褐釉の四耳壺である。頸部から肩部にかけて，縦方向の耳がつく。97は，黄釉の鉢である。98は壺の底部である。99は褐釉の壺である。100は，黄釉の盞である。鍔状に張り出した口縁の上・下面には，目痕が並ぶ。101は，緑釉を施した盤である。釉下に沈線で花文を描く。102～104は，褐釉の鉢である。105は，黄釉鉄絵の鉢である。見込みに鉄絵がのぞくが，意匠不明。106は，黄釉鉄絵の盤である。見込みに，鉄絵で花文を描く。107～112は，無釉の焼き締め陶器のこね鉢である。内面は，使用のため平滑になる。大小あり107は復原口径39.2㎝，109は復原口径14.6㎝をはかる。

113は，軒丸瓦の瓦当である。圏線を一重にめぐらした中に，花文を配する。

これらの他に，高麗青磁片，土製竈片，ルツボ片，鉄滓・毬杖玉などが出土した。

遺物，切り合い関係からみて，13世紀前半代の土坑と考えられる。

3928号遺構（Fig.358～360）

C区第1面，R－21グリッドより検出した土坑である。長径67㎝，短径46㎝のひずんだ卵形を呈し，検出面からの深さは12㎝をはかる。

土坑の東半分から，こね鉢・土師器などの遺物が出土した。

Fig.358　3928号遺構（西より）

出土遺物をFig.363に示す。1～6は，土師器である。すべて外底部を回転糸切りし，内底部にはナデ調整を加える。1～3は皿，4～6は坏である。口径－底径－器高の順に，それぞれ7.4－5.6－1.4～1.5㎝，8.0－5.8－1.5～1.7㎝，8.1～8.3－5.4－1.5㎝，12.1～12.2－7.2－2.4㎝，12.6－13.2－8.2－2.5～2.6㎝，13.0～13.2－7.7－2.8～2.9㎝をはかる。7は，瓦質土器のこね鉢である。外底の器表は，うすく剥離している。内面は使用のため，磨耗する。

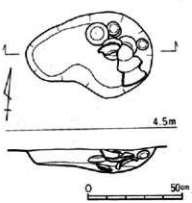


Fig.362　3928号遺構実測図（1／20）

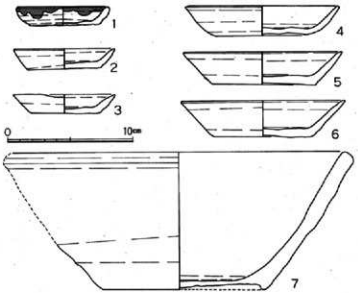


Fig.363　3928号遺構遺物実測図（1／3）

出土遺物から，15～16世紀に位置づけられよう。

3955号遺構（Fig.361～365）

C区第1面，U－21グリッドより検出した土坑である。南東側は調査区外に出るため，全形は知りえない。遺存した部分でみると，長辺81cm以上，短辺81cmの長方形を呈し，検出面からの深さは51cmをはかる。箱型の土坑の埋土上層（①層）は，焼土の堆積層で，ここからFig.365に図示した遺物などが出土した。

Fig.365－1～9は土師器である。底部はすべて回転糸切りする。10は青磁の碗で，見込みを丸く露胎にする。11は明代の染付の盃である。12は**白磁**の皿で，型造りである。13～15は**朝鮮王朝陶器**で15は粉粧沙器の碗である。16・17は**瓦質土器**のすり鉢である。18は**平瓦**で，コビキ痕が残る。19は**砥石**である。仕上砥と思われる。20はルツボである。

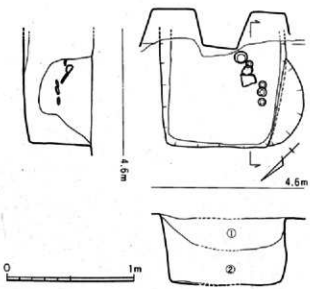


Fig.361　3955号遺構実測図（1／30）

Fig.362　3955号遺構検出状況（北西より）

Fig.363　3955号遺構断面（北西より）

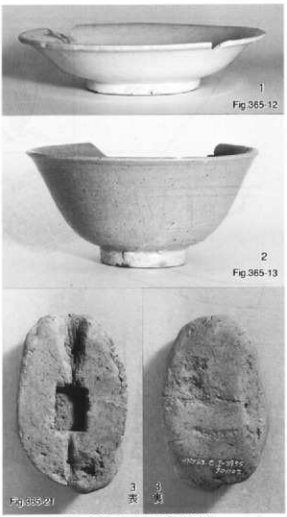


Fig.364　3955号遺構出土遺物

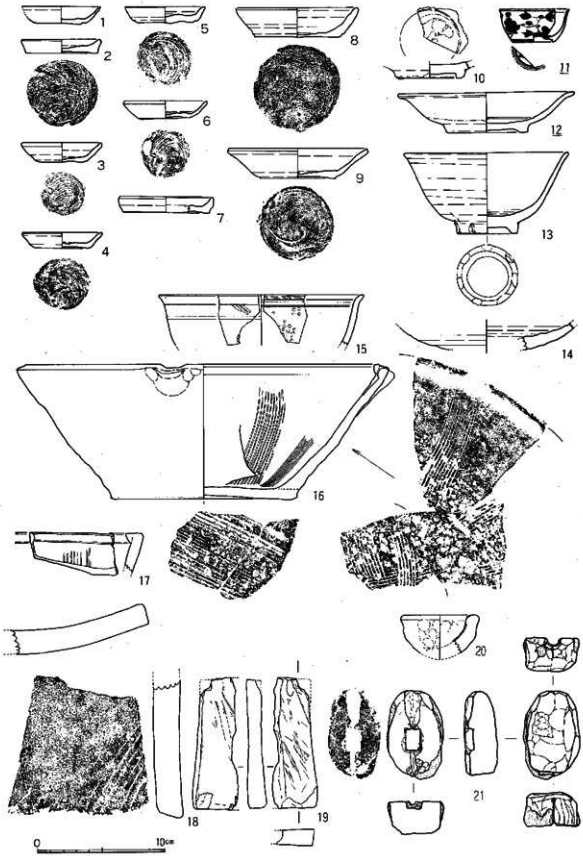


Fig.365 3955号遺構遺物実測図（1／3）

土師質だが，表面は焼き締り，溶けたガラス質がべったりと付着している。21は，鋳型である。土製で，平担面に鋳型と湯口，ガス抜き穴を彫り込む。合わせ型で，小口の側縁には合印が刻みつけられている。また，側面の平担面寄りには粘土の付着がみられ，合わせ型を接合したものと思われる。鋳型から製品を復原すると，1.5×1.2×0.6cm以上の直方体となる。あるいは，秤の錘りであろうか。

16世紀後半の遺構と考えられる。

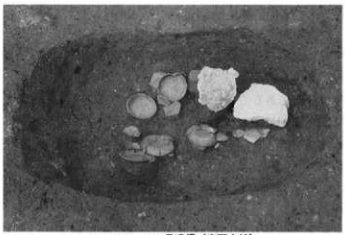


Fig.366　4221号遺構（南西より）

4221号遺構（Fig.366・367）

C区第2面，R～S－18グリッドより検出した土坑である。長径120cm，短径75cmの小判型を呈する。

出土遺物を，Fig.367に示す。1～8は，土師器である。1～3は皿である。外底部は回転糸切りする。2は，内底部にナデ調整を加える。4は小坏とでも呼ぶべきか。坏をそのまま小型にした様な形をとる。回転糸切り。内底にナデ調整を加える。口径8.9cm，器高2.05cm。口径の1ケ所を打ち欠き，ここに灯芯をおいて灯明皿としたのであろう。油煙が付着している。5～8は，坏である。回転糸切りする。7・8には，内底部のナデ調整がみられる。土師器については，グラフ15にその法量を示す。9は白磁の壺の口縁である。10は青白磁である。皿の底部片で，印花文がみられる。11は，**毬杖玉**である。砂岩を摘打し，丸く整える。

おおむね14世紀頃の遺構であろう。

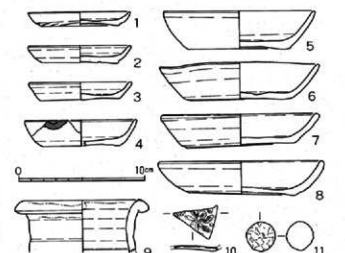
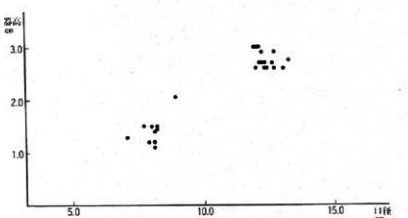


Fig.367　4221号遺構遺物実測図（1／3）



グラフ15　4221号遺構出土土師器計測値

4342号遺構（Fig.368～372）

C区第2面O－21グリッドより検出した土坑である。浅く掘り凹めて，陶器類の破片を一括廃棄し

ている。土坑の直径は1m内外をはかる。

出土遺物の一部を，Fig.371・372に示す。1～6は，青磁である。1は皿で，同安窯系である。見込みの櫛描文の一部が残っている。2～6は，碗である。2～5は龍泉窯系で，2・3には劃花文が描かれている。6は，同安窯系の碗の底部である。7～16は，白磁である。7は皿である。8～15は碗である。15を除いて，見込みの釉を輪状に掻き取って，露胎としている。15の内面には，劃花文を描く。16は，壺の胴部である。四耳壺であろう。17～20は，陶器である。17・18・20は，黄釉褐釉の盤である。17は内底から体部内面にかけて，大きく花文を描く。18は，内底に褐彩が一筆見えるが，意匠の全体はうかがえない。口縁直下から内面に施釉し，口縁上面から外面は，露胎となる。20は，内底から体部にかけて花文を描く。19は茶褐色釉の四耳壺である。体部内面には，叩きの当て具痕が丸く残る。

21～27は，湿美窯の陶器である。すべて甕の破片で，図示しなかった破片がもう数点あるが，口縁部からみて，少なくとも2個体にはわかれる様である。大アラコ窯期の製品である（愛知県陶磁資料館　柴垣勇夫氏御教示）。

この他，黄釉褐器の四耳壺，耳付長胴壺，Y字口縁甕など，多種多様な陶器が出土しているが，時間の制約から，すべてを実測することはできなかった。

第2面の年代観とは若干あわないが，12世紀後半代と位置付けざるをえない様相を示している。

Fig.368　4342号遺構（南東より）

Fig.369　4342号遺構陶器出土状況（南東より）

1
Fig.372-23

2
Fig.372-26

3
Fig.372-25

4
Fig.372-27

Fig.370　4342号遺構出土湿美窯陶器

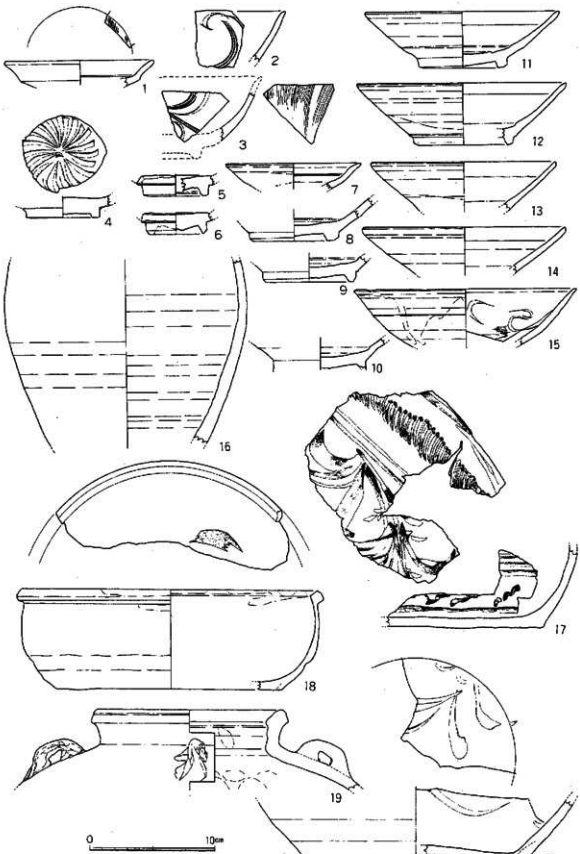


Fig.371　4342号遺構遺物実測図1（1／3）

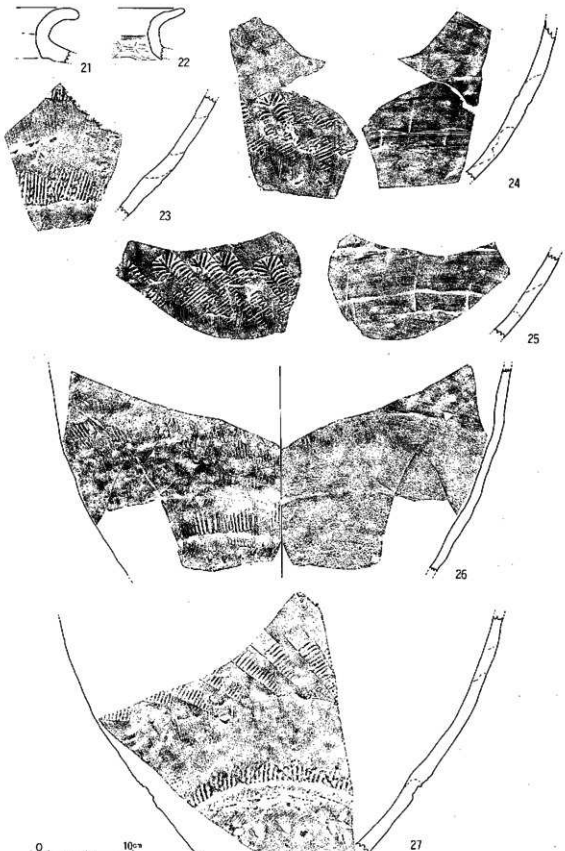


Fig.372　4342号遺構遺物実測図2（1／4）

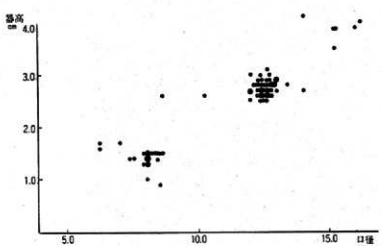
4506号遺構（Fig.376）

B区第2面，N～O－23～24グリッドから検出した土坑である。長径220cm，短径120cmの長楕円形を呈する。

土坑内に，ぎっしりと土師器の坏・Ⅲが廃棄されていた。完形品の坏・Ⅲにまじって，破片も大量にすてられており，多様な場で用いられた土師器が，一緒にすてられたものと考えられる。

Fig.373　4506号遺構（南東より）

時間の制約から，実測できなかったので，口径，器高の計測値を，**グラフ16**に示す。計測は，完形品もしくはそれに準じるものに限って，坏68点，Ⅲ32点の計100点について行なった。



グラフ16　4506号遺構出土土師器計測値

グラフ16から，一応の傾向についてふれておく。Ⅲについては，計測値のばらつきが結構大きいことを上げなくてはならない。大多数が集中する口径7.8～8.7cm，器高1.3～1.5cmを標準とすると，口径が小さい割に器高の高いタイプ，標準並の口径を持ちながらも，器高が極端に低いタイプとがある。前者は，口径6.2cmで器高は，1.6cmと1.7cmをはかる。後者は口径8.0cm，器高1.0cm，口径8.5cm，器高0.9cmをはかる。坏はⅢに比べればばらつきが少なく，大方が口径12.0～13.0，器高2.5～3.1cmに集中する。例外的に口径8.6cm、器高2.6cmのものや，口径10.2cm，器高2.6cmといったものもみられる。また，口径・器高ともに，坏の標準から隔絶して，口径・器高の大きいものがみられる。最大のもので口径16.2cm，器高4.0cmをはかる。グラフを見る限り，この大型のものは，ばらつきはあるものの明らかに一群をなしており，Ⅲや坏と並んで，器種分化していた可能性も考えなくてはならない。

以上の土師器のⅢ・坏は，すべて外底部を回転糸切りする。

13世紀代の遺構と考えられる。

4653号遺構（Fig.374～378）

B区第２面，D－28～29グリッドから検出した土坑である。長径186cm，短径135cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは57cmをはかる。

土坑中央付近に，大量の焼土が埋められていた。焼土中には，炉壁または竈壁と考えられる被熱して赤化したスサ入り粘土ブロックが多くまじっていた。この焼土層の下には，炭層がみられ，一枚の間層をはさんで，さらにもう一枚の炭層が検出された。下部の炭層は，そのまま土坑の最下層であり，土坑床面から側面立ち上り部分までのびている。両者の間層には，炉壁ブロックがはさまっていた（Fig.377－４）。このブロックは，火熱をうけた粘土のかたまりで，表面は溶けた灰のガラス質が覆っていた。

同様の炉壁塊は，焼土層中にもみられた（Fig.377－１・３）これは，半球状の塊で，底面は円形を呈し平らになる。半球部分の上面には，ガラス質におおわれて，重ね焼きされている皿が，そのまま溶着している。２枚の皿が，伏せて重ねられていたのだが，間には丸餅状のハマが置かれていた。下の皿は，炉壁塊の表面を覆ったガラス質のため，すっかりかくされており，ハマの脇からわずかにのぞいていた。（Fig.377－３）。炉壁塊の断面観察では，これは無高台の坏型の皿で，どうも完形品ではない様である。炉壁塊の断面を上から見ると，表面は上述した様に，溶けたガラス質でおおわれている。その下面は被熱のはげしい面で，表面からのガラス質の浸透もあり，灰色～灰白色を呈し，かたい。以下下面近くになり次第，熱が遠かった様で，赤色→赤褐色→茶褐色と変化していく。この被熱の状況

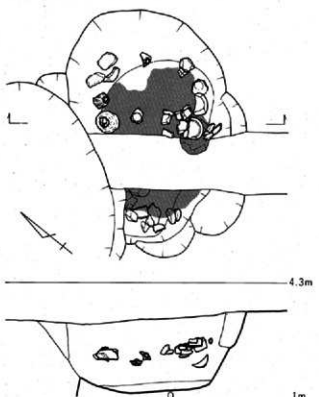


Fig.374　4653号遺構実測図（1／30）

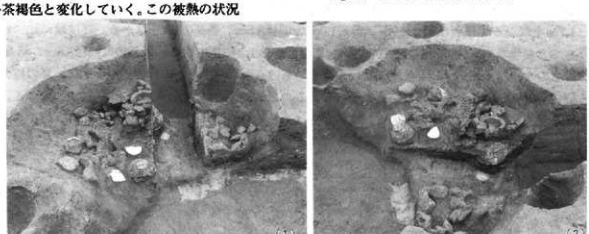


Fig.375　4653号遺構（１）北西より、（２）南西より

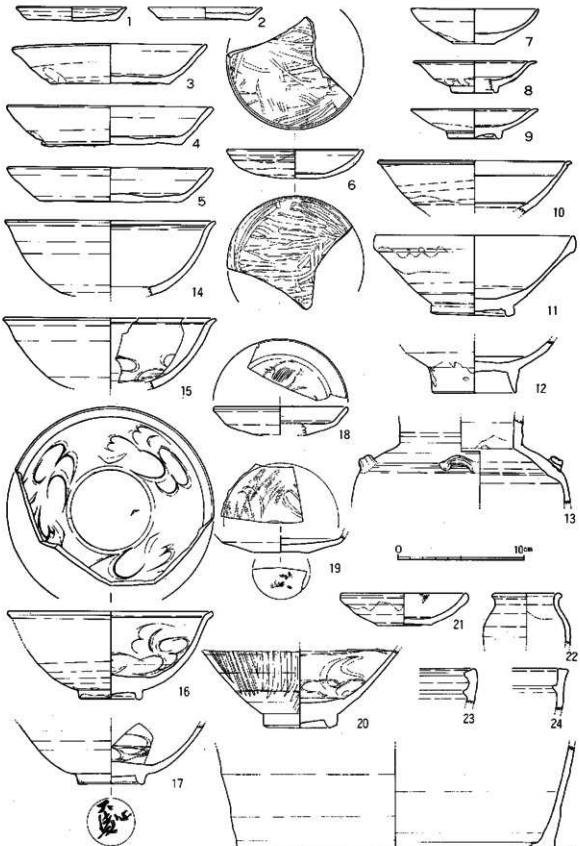


Fig.376　4653号遺構遺物実測図1（1／3）

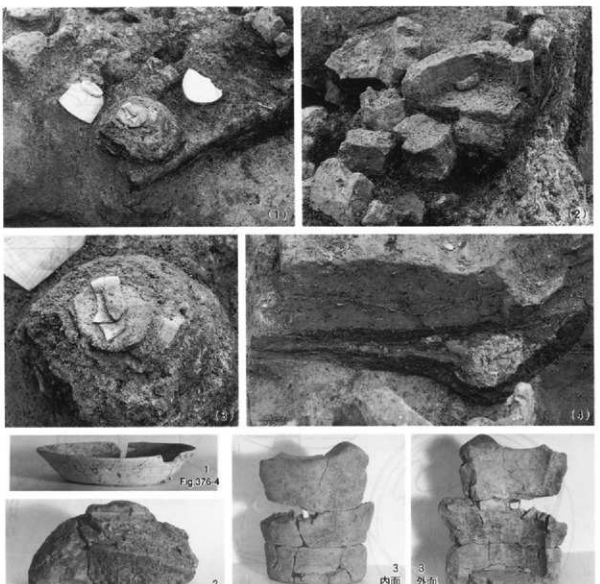


Fig.377　4653号遺構遺物出土状況および出土遺物

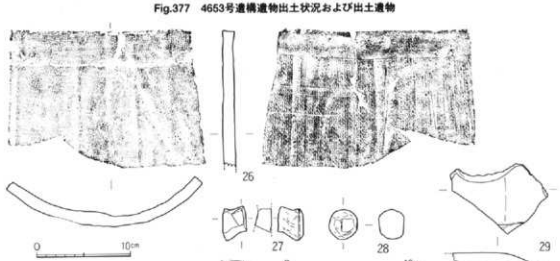


Fig.378　4653号遺構遺物実測図２（１／３・１／４）

は，下層の炭層中から出土した炉壁塊にもみられたことである。

焼土ブロック層からは，土製の筒形鉢がばらばらに崩れて出土した（Fig.377－2）。筒形鉢そのものは，若干被熱した痕跡はあるが，あまり高い熱はうけていない様である。しかし整形時の粘土の継ぎ目からばらばらに崩れてしまった原因が，被熱にあるだろうことは，想像にかたくない。また，同層中からは，青磁や白磁なども出土しているが（Fig.377－1），それらは，全く被熱してはいなかった。出土した焼土自体がブロック状であることを含めて，焼土，土器等は，本来この遺構に由来するものではなく，遺構を廃棄するにあたって埋め込まれたものと思われる。

本遺構の性格は不明である。しかし，最下部の炭層が，意図的に配されたことは疑いようもないから，いずれにしても火処に関わる遺構だと言うことは，間違いないであろう。

出土遺物を，Fig.376・377・378に示す。1～5は，土師器である。外底部は糸切りし，体部は横ナデ調整，さらに内底部に静止ナデ調整を加える。1・2は皿で，法量は口径－底径－器高の順にそれぞれ，8.6－8.8－6.8～1.1㎝，8.9－6.9－1.0㎝をはかる。3～5は坏である。法量は，同様に15.2－15.4－9.1～9.3－3.15㎝，15.8－16.2－10.5－11.0－3.2㎝，16.2－11.2－2.7㎝である。**6は，瓦器の皿**である。筑前型瓦器で，外底には回転糸切り痕がうかがわれる。内面は，コテを当てて平滑に整えた後，規則性のないヘラ磨きでうめる。外面にも密にヘラ磨きを施す。口径10.8㎝，器高23㎝をはかる。**7～13は，白磁**である。**7～9は皿**で，8・9は見込みの釉を輪状に掻き取って，露胎とする。**10～12は，碗**である。**13は，四耳壺**である。**14～20は，青磁**である。**14～18は，龍泉窯系青磁**で，**14～17は碗，18は皿**である。17の外底，高台内側には，墨書がみとめられる。「大」＋花押であろう。右側中央に，もう一文字分の墨痕があるが，判読できない。19・20は，同安窯系で，19は皿，20は碗である。ともに外底部に墨書を持つ。19の墨書はかすれてはいるが，おそらく花押であろう。20は墨痕のみで，全く読めない。**21～25は，陶器**である。21は褐釉の皿，22は同じく短頸の瓶である。23・24は無釉のこね鉢である。焼き締って，赤褐色を呈する。25は，黄釉の鉢である。内面に施釉されており，外面は露胎である。26は，平瓦である。桶巻造りで作られた1枚分の全幅が残っている。桶にあたる側は布目痕跡で，桶の模骨のわずかな凹凸をとどめている。外面は，縄目の叩き痕の上から，板状の工具であらくナデている。小口はヘラ削りで，長側は，外方から肉の厚みの半ば程度まで切れ込みを入れ，割り取っている。27・29は砥石片である。仕上砥であろう。28は瓦玉である。

Fig.377に，筒形鉢状をした土製品を示す。底は平らで，体部は直立しつつも，若干外反し，口縁は波状に突起を作る。突起はおそらく全周で4ケ所となる。黒く焦げており，被熱したことをうかがわせる。粘土の継ぎ目にそって割れており，ブロック状の粘土を重ねて作ったことがわかる。粘土の継ぎ目につけたフリル状のひねりも残っており，丁寧な整形がなされなかったことを示している。土師質であるが，焼成は悪く，軟質となる。一応平らな面を底面としたが，突起部分を支脚とみれば，上下逆のフード状の形態を考えることも可能である。

また，前述した炉壁状ブロックに封入されていた皿は，おそらく陶器であろうと思うが，思いあたる製品の例がない。形態的には平底の坏状で，土師器の坏か，口ハゲの白磁や青白磁の皿に似る。胎土は軟質だが，キメは細かく精良である。また，半球型の台の上で重ね焼きをしている点，その際丸鉢状のハマを用いている点などが，見て取れる。生産施設から運んできたものであることは間違いない訳で，その窯の場所，製品の質，形態などを含めて今後の課題としたい。

5653号遺構は，出土遺物からみて，12世紀後半代の遺構と考えられる。

4735号遺構（Fig.379～381）

B区第3面B－23グリッドより検出した土坑である。

土坑埋土中より，土器などの遺物とともに，獣骨が出土した。獣骨には，関節したままのものみられた。

出土遺物を，Fig.380に示す。1は土師器の皿である。外底部は回転糸切りで，内底部には静止ナデ調整を加える。口径8.7cm、底径6.2cm，器高1.6cmをはかる。2は，白磁の皿である。3・4は青磁である。3は小碗で，型押しする。見込みには，花文を描く。4は青磁の壺である。

これらの遺物からみて，12世紀後半に比定するのが，妥当であろう。

Fig.379　4735号遺構（北西より）

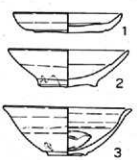


Fig.380-3

Fig.381　4735号遺構出土遺物

5103号遺構

（Fig.380～382）

B区第3面，M・N－30グリッドより検出した小土坑である。

Fig.380　4735号遺構遺物実測図（1／3）

床面に伏せた状態で，白磁碗が出土した。

Fig.384に出土遺物を示す。1は白磁の碗である。口縁を玉縁につくる。完形品である。2は高麗青磁の碗である。見込みには，細く輪状に耐火土が付着している。

この他，土師器（ヘラ切り），越州窯系青磁片が出土しており，11世紀後半の遺構と考えられる。

5648号遺構（Fig.385～388）

B区第4面P～Q－23グリッド付近で検出した。径100cm程の略円形を呈する土坑である。

埋土中位よりひとかたまりに捨てられた土師器等の出土をみた。

出土遺物を，Fig.391に示す。

1～9は，土師器である。1は皿で，外底部は回転ヘラ切りする。体部は横ナデ調整し，内底部には静止ナデ調整を加える。口径9.0cm，底部はやや下に下り気味

Fig.382　5103号遺構（南西より）

Fig.383　5103号遺構出土遺物

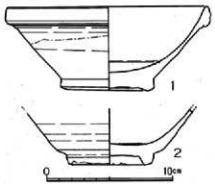


Fig.384　5103号遺構遺物実測図（1／3）

で，器高1.45cmをはかる。2～9は，坏である。外底を糸切りするものとヘラ切りするものとあるが，すべて底部を押し出して丸底にし，内面にはコテをあてて平滑に均す。体部の外面は，横ナデ調整である。2～4が底部ヘラ切り，5～9が糸切りする。法量的には，両者を区別することはできない。口径15.1～15.7cm，器高3.0～3.7cmをはかる。しいて比較すれば，ヘラ切り底のものの方が，糸切り底のものよりも器高が低めである。10～17は白磁の碗である。10は小碗である。12の外面には，沈線文が弧を描いて垂下する。13の内面には白土の堆線がみられる。14・15は，口縁端部を小さな玉縁状につくる。16・17は，玉縁口縁の碗である。完形品に近い17で法量を示すと，口径17.7cm，高台径7.6cm，器高7.2cmをはかる。18は，陶器である。把手付片口鍋で，褐釉を施す。

Fig.385　5648号遺構（北東より

Fig.386　5648号遺構出土遺物 1

Fig.387　5648号遺構出土遺物 2

土師器に糸切り底が含まれる点から見れば，11世紀代をあてることには無理があろう。糸切りとヘラ切りの混在期は，大体12世紀前半と考えられる。しかし一般的には，ヘラ切りの丸底と，糸切りの平底が混在するのであり，本遺構の場合糸切りのものも底部を押し出し，内面をコテあてしている。混在期としては，古相を示すものと言えよう。したがって，5648号遺構の時期として，12世紀前半の早い時期をあてたい。

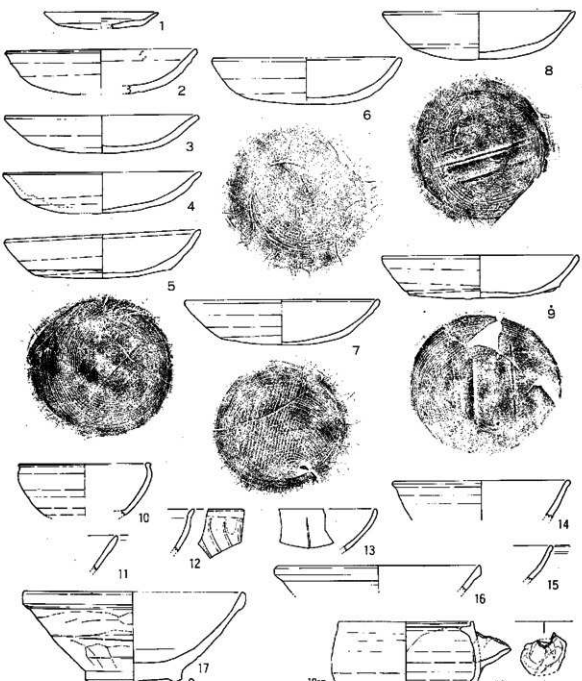


Fig.388　5648号遺構遺物実測図（1／3）

（7）埋葬・埋葬関連遺構

本調査では，土壙墓・木棺墓などの他埋葬遺構から遊離して人骨が検出されている。これらは埋葬とは呼べないので，埋葬関連遺構として，ここに報告する。

731号遺構（Fig.389～392）

A区第2面，B－5～6グリッドより検出した人骨である。墓壙自体は検出できなかったが，後述する副葬品を伴っているため，埋葬人骨と判断した。鉄釘の出土はなく，土壙墓であろう。

人骨の遺存状態は非常に悪く，頭蓋骨と上腕の一部，大腿と下肢の一部が遺存したにすぎない。これらの骨の配置からみて，仰臥伸展葬であると知れる。

右上腕骨にそって鉄製短刀が，左上腕骨にそって鉄製刺刀が出土した。遺体に副葬されたものであろう。

Fig.392－1は刺刀で，柄の木質が残っている。刃部は両刃である。2は短刀だが，錆がはげしい。

13世紀頃の埋葬であろう。

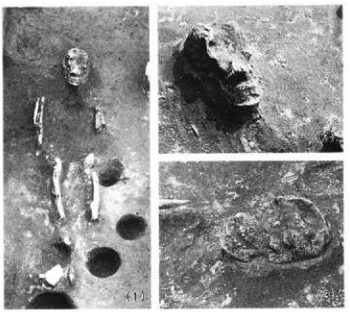


Fig.389　731号遺構（1）全体（南西より），（2）・（3）頭部

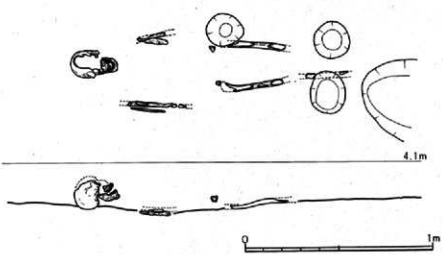


Fig.390　731号遺構実測図（1／20）

Fig.391　731号遺構出土遺物

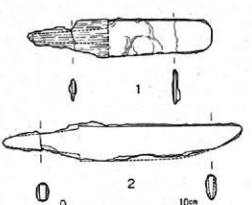


Fig.392　731号遺構遺物実測図（1／3）

1015号・1016号遺構（Fig.393－396）

A区3面，C－4～5グリッドより検出した木棺墓である。まず頭蓋骨と白磁碗が出土し，1015号遺構とした。その後，土壙掘りかたを検出，掘り下げて1体分の人骨が出土，1016号遺構とした。本書に頂載した中橋孝博氏の玉稿によれば，1015号と1016号遺構の頭蓋骨は，同一人骨との由である。後世に撹乱されたものであろうか。

Fig.395に，供献された白磁碗と，左上腕にそって副葬されていた鉄短刀を図示する。

おおむね，13世紀代の木棺墓であろう。

Fig.393　1015・1016号遺構（南西より）

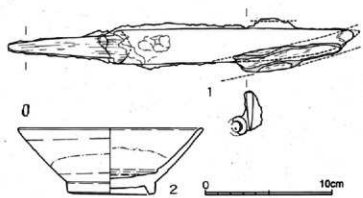


Fig.394　1015・1016号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.395　1016号遺構出土鉄刀

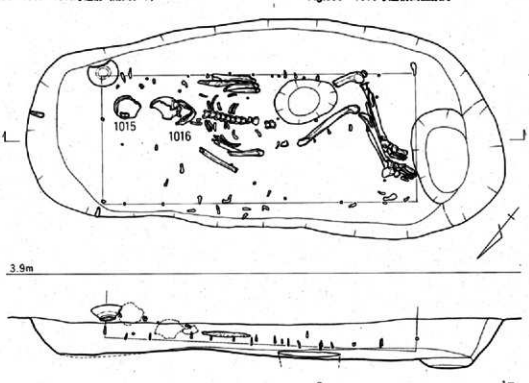


Fig.396　1015・1016号遺構実測図（1／20）

1576号遺構（Fig.397～399）

A区第3面，F－14～15グリッドで検出した，頭蓋骨集積遺構である。頭蓋骨ばかりが3個体，径30cm前後の範囲に重なっていた。頭骨のみの二次的な埋葬であろう。

年齢性別も無作為で（巻末，中橋孝博，表1によ

Fig.397　1576号遺構全面（北西より）

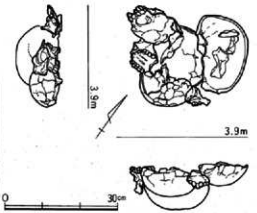
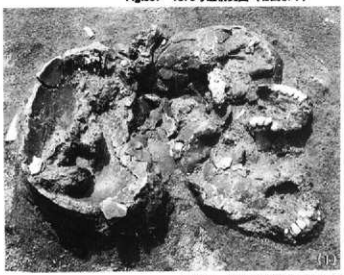


Fig.398　1571号遺構実測図（1／10）



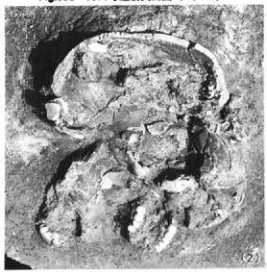


Fig.399　1576号遺構（1）北西より（2）南西より

る）何らかの原因（例えば井戸掘り作業など）で出土してしまった骨を，頭蓋骨のみ集めて土坑内に放り込んだ風景を思わせる。

時期を推定する根拠を欠き，おおむね13世紀代を考えている。

Fig.400　1716号遺構（南西より）

1716号遺構（Fig.400～403）

A区第4面，M－6～7グリッドより検出した木棺墓である。大腿骨から下を，他の遺構に切られ失なう。鉄釘の出土から木棺墓と推定できた。

人骨の遺存状態は，決して良好とは言えないまでも，よく旧状を保っていた。それによると，仰臥伸展葬もしくは屈肢葬である。

右肩部脇に，青磁皿を供献していた。

青磁皿（Fig.402）は，同安窯系の皿で，完形品

である。見込みには，片切彫りと，櫛描文による「之」字文を描く。

おそらく，12世紀後半代の埋葬であろう。

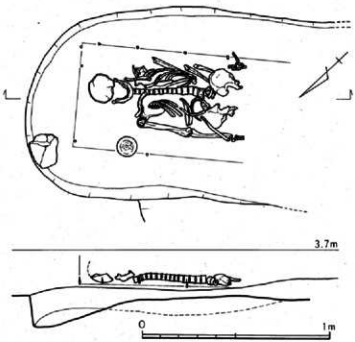


Fig.401　1716号遺構実測図（1／20）

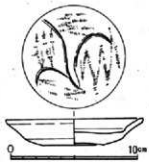


Fig.402　青磁皿実測図（1／3）

Fig.403　1716号遺構出土青磁皿

1912号遺構（Fig.404・405）

A区第4面，A－3グリッドより出土した頭蓋骨である。

頭蓋骨のみが，1853号遺構（溝）埋土中から出土した。

1853号遺構埋積の過程で，頭蓋骨のみを廃棄したものであろう。

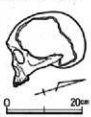


Fig.404　1912号遺構実測図（1／10）

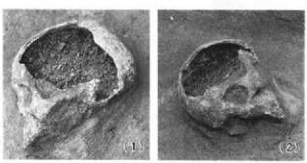


Fig.405　1912号遺構（1）南東より、（2）南西より

1913号遺構（Fig.406・407）

A区第4面，A－2グリッドの1902号遺構（溝）埋土中より出土した頭蓋骨である。1912号遺構の人骨と頭位をそろえる。

1902号遺構埋積の過程で，頭蓋骨を廃棄したものである。

Fig.406　1913号遺構実測図（1／10）

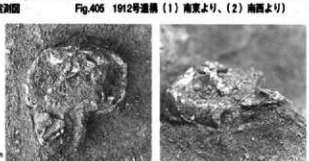


Fig.407　1913号遺構（1）南東より、（2）南西より

1914号遺構

1902号遺構（溝）埋土中より出土した，前頭部の骨である。1902号遺構埋積の過程で廃棄されたものであろう。

2204号遺構（Fig.408・409）

A区第4面，J−K−9グリッドから検出した土壙墓である。上半身を2757号遺構（井戸）や第1面003号遺構（井戸）に切られ，失なう。

土壙掘りかたを検出することはできなかったが，人骨の姿勢に乱れがない点から，放置人骨とは考えられず，埋葬人骨と判断した。さらに，鉄釘の出土がない点から，土壙墓とした。

人骨の姿勢からみて，仰臥伸展葬である。

11世紀後半の2675号遺構が完全に埋った上に営まれており，13世紀代の2757号遺構に切られる点から，12世紀代の埋葬と考えられる。

Fig.408　2204号遺構（南より）

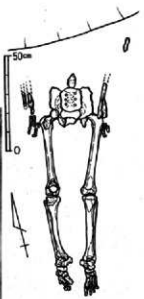


Fig.409　2204号遺構実測図（1／20）

5438号遺構（Fig.410〜412）

B区第4面，D−18〜19グリッドより検出した土壙墓である。南西側を，5437号遺構（井戸）に切られ，失なう。遺存している部分はわずかで，これから全体を推定することはできない。

幸いにして，頭蓋骨は遺存していた。遺存状態はきわめて悪いが，形状を失なう程ではない。

頭蓋骨は，顔面を北面に向けていたが，下顎は直上を向いていた。下顎が原位置をとどめるものとすれば，顔面は骨化したのち，西にくずれたことになる。もし土壙墓として，遺体の周囲を土砂でうめていたら，骨化した後の大きな骨の移動は考えがたい。鉄釘の出土を見ない点から土壙墓としたが，組み合せの，釘を用いない棺を用いた可能性は十分ある。

頭の東に接して，漆容器が置かれていた。曲物状の円形容器で遺存状態が悪く，取り上げられなかった。黒漆塗りである。**Fig.410−1〜4**は，頭の東側に供献されていた**土師器**の坏・皿である。すべてヘラ切りで，内底部をナデ調整する。**4**は，内面にコテをあてて平滑に仕上げる。

11世紀後半の埋葬である。

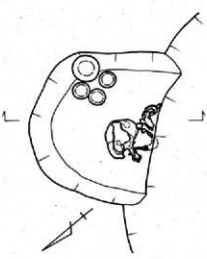


Fig.410　5438号遺構遺物実測図（1／3）

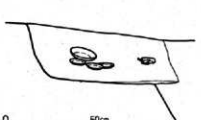


Fig.411　5438号遺構実測図（1／20）

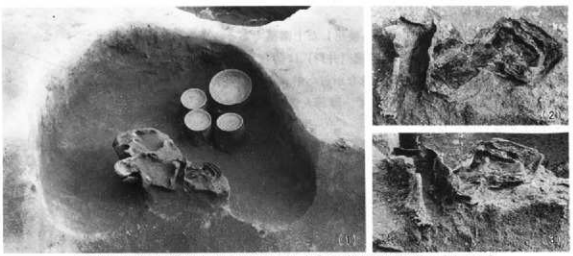


Fig.412　5438号遺構（1）全景（南西より）、（2）・（3）漆器出土状況（南西より）

5684号遺構（Fig.413～416）

B区第4面B－23グリッドより検出した土壙墓である。長辺130cm，短辺80cmの隅丸長方形で，深さ45cmの土壙内から，供献土器と，人骨の一部が出土した。

人骨の遺存状態はきわめて悪く，頭蓋骨の一部と歯の一部，上腕骨の一部，左右の大腿骨と脛骨と腓骨の一部が残っていたのみであった。

遺存した人骨の配置からみて，右側臥屈肢葬と思われる。腰から上をまっすぐにのばし，腰以下を大きく曲げた姿勢であろう。

頭の後ろに，白磁碗と土師器坏が供献されていた。

Fig.417は，供献遺物である。**1**は**土師器**の丸底坏である。底部は回転ヘラ切りで，内面にはコテをあてて平滑に仕上げる。**2**は，**白磁碗**である。玉縁口縁につくる。

11世紀後半の土壙墓と考えられる。

Fig.413　5684号遺構（北西より）

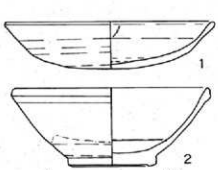


Fig.414　5684号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.415　5684号遺構出土遺物

（8）鋳造関連遺構

2203号遺構（Fig.417～421）

A区第4面，R－12グリッドより検出した銅の溶解炉である。

第4面における遺構検出時には，まず黄白色粘土の広がりとして確認された。粘土は，ずるずるで，水に溶けて流れる程であったが，慎重に被覆していた土をはがして行った所，粘土に見え隠れして，炉壁がのぞいていることが，明らかになった（Fig.417－(1)、418－上）。

炉壁の出土状況から，粘土は炉壁を覆っていたもので，崩壊した炉壁が散乱しているものと知れた。

散乱していた炉壁を除去した状況が，Fig.417－（2）・（3）である。この段階では，まだ，炉内に倒れ込んだり，傾いた炉壁が残っている。粘土は，炉壁にはりついて，その周囲を囲っている。上部に倒れ込んだ炉壁のすき間から，中が空洞

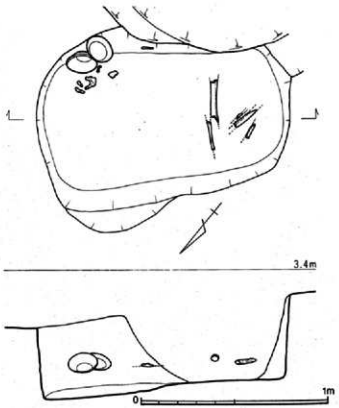


Fig.416　5684号遺構実測図（1／20）

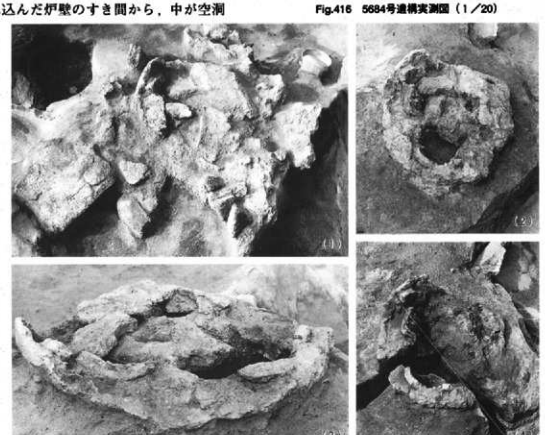


Fig.417　2203号遺構（1）検出状況，（2）・（3）散乱粘土・除去状況，（4）完掘状況，（1）・（2）・（4）南より，（3）西より

になっているのがみえる（Fig.417－(3)）。

さらに倒れ込んでいる炉壁を取り除くと，Fig.417（4），Fig.418－中，の様になる。これは，原位置をとどめている炉壁だけを残した状況で，炉壁が全周に回らない点に注意したい。

次に，炉壁の下部について述べる。炉壁を中心として，全体としては一辺180cmの方形土坑状を呈する。Fig.420にみる様に，地山砂層を一旦掘削し，暗褐色砂質土で埋めた上に炉を設けている。断面写真の右側に，暗褐色砂質土の中に，大型の炉壁が入り込んでいるのが見える。したがって，本遺構の炉が作られる前に，一度崩壊した炉があったことがわかる。

さて，以上の観察をもとに，炉の構造について考えなくてはならないのだが，報告者にその力量も，専門的知識もないため，勝手な解釈はさしひかえたい。報告者として，間違いのない様にくり返したいのは，炉とした遺構の最下部は炉壁が全周していない点，それにもかかわらず炉壁の周囲を補強した粘土は，これをほぼ取り囲んでいる点（全周の4分の1ほどで欠く），炉の最下部の粘土の炉壁は原位置を保っている点，炉の基部とあまりかわらないレベルで，遺構検出時の粘土・炉壁の散乱がみられたという点である。

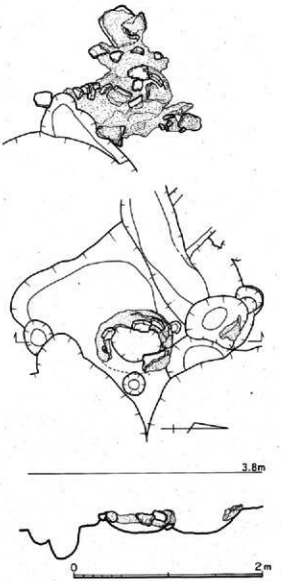


Fig.418　2203号遺構実測図（1／40）

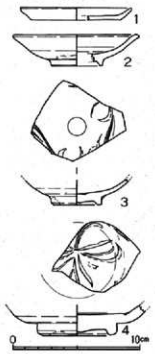


Fig.419　2203号遺構遺物実測図（1／3）

次に，炉壁についてふれておく。Fig.421に，散乱していた炉壁の接合状況を示した。全周完全に接合できる訳ではないが，おおむね径

Fig.420　2203号遺構土層断面（東より）

50cm，高さ42cmをはかる。炉壁の下部には，弧状の抉りがはいる（Fig.421－(3)・(4)）。抉りの巾は，10cm程である。ただし，この復原の天地は，これを判定する根拠がなく，むしろ抉りが入る方を上端として，写真とは天地逆にみるべきと思う。この弧状の抉りは，全周で4～5ケ所入る。炉壁の内面には，ベッタリと銅の付着がみられる。部分的には緑錆がふいている。壁の内面には，炉壁胎土の継ぎ目にそう様に，細長い刺突が並ぶ（Fig.421－(5)）。胎土の接合を良くするためであろう。また，炉壁の外面には，指頭で押して楕円形の凹みが並んでいる（Fig.421－(6)）。これは，炉壁の外側にまいてこれを補強する，粘土のかかりを良くするためであろう。こうして復原された壁体は，溶解炉の「上コシキ」にあたると思われる。（以上，炉壁に関する観察は，中山光夫氏の御教示・御指

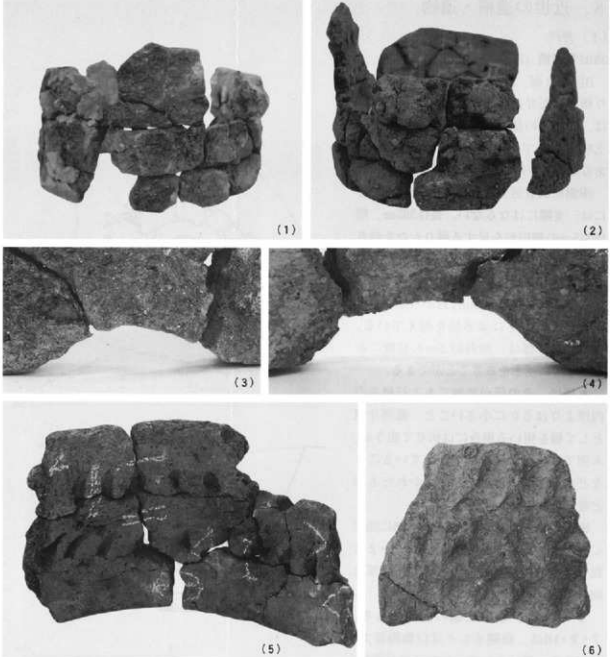


Fig.421　2203号遺構溶解炉炉壁（1）・（2）全体、（3）・（4）端部の抉り、（5）炉壁内面、（6）炉壁外面

摘に依拠している。しかし中山氏の御教示を著者が十分に理解したとは言えず，曲解している点があるかも知れない。その責は，著者にある)。

最後に，出土遺物をFig.419に示した。1は土師器の皿である。外底部は回転糸切りする。口径8.8㎝，底径7.0㎝，器高1.0㎝。2は白磁の皿である。見込みの釉を輪状に掻き取って，露胎とする。3・4は青磁である。龍泉窯系で，3は小碗，4は碗になる。3は，粘土内より出土，他は粘土周囲より出土した。

これらの遺物からみて，12世紀後半から13世紀初めにかけての時期が比定できよう。

8．近世の遺構・遺物

(1) 井戸

3502号遺構（Fig.422・426）

B区第2面，B～C－30～31グリッドより検出した井戸である。第2面調査時には，井戸との認識はなく，不整形の大型土坑と考えていたが，第4面調査時に，あらためて井戸の形状を確認した。

南側が調査区外に出るが，全形を知るには，支障にはならない。長径385㎝，短径345㎝の楕円形を呈する掘りかたを持ち(第4面上での計測値)，その中央からやや北寄りに，石積みの井側をつくる。

石積みは，標高1.32m付近から始まっており，それ以下には木桶を据えている。木桶の最下部は，標高82.5㎝の位置にあり，すでに湧水をみることができる。

木桶は，その径が井側である石積みの内径よりはるかに小さいこと，通例井側として桶を用いる場合には伏せて使うが，本例では，桶は正位置で据えていることなどからみて，水溜としておかれたものと考えられる。

出土遺物を，Fig.423・425・426に図示した。1～6は，土師器である。1・2は皿，3～6は坏である。すべて外底部は回転糸切りする。

7～10は，朝鮮王朝の陶器である。7・8・10は，白磁もしくは白釉陶器で，碗である。見込みに3ケ目の砂目が残る。9は壺であろう。緑褐色の釉を施す。内

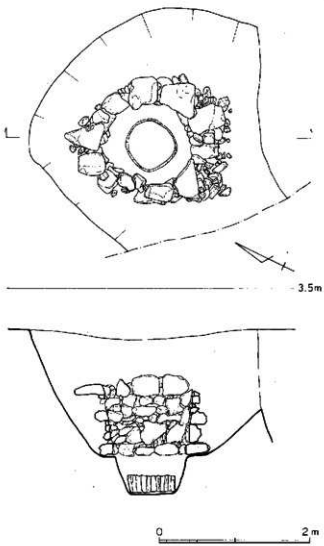


Fig.422　3502号遺構実測図（1／50）

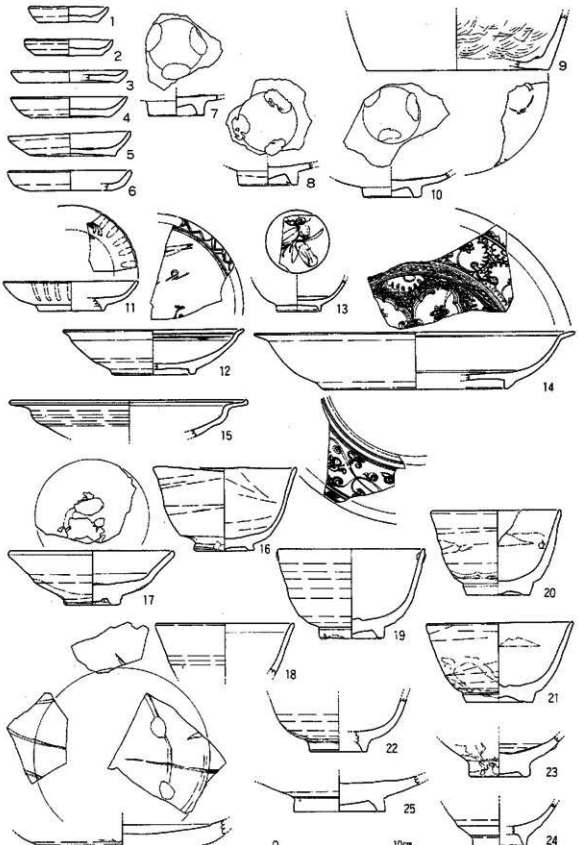


Fig.423　3502号遺構遺物実測図1（1／3）

面には，青海波状の叩き目がつく。外底部には，貝目が残る。11～14は，伊万里の染付である。11は，見込みの釉を輪状に掻き取る。12・14は，いわゆる「つば皿」である。15～26は，唐津焼である。15は皿で，口縁を折り曲げる。16・18～24は碗である。17は皿で，見込み中央付近に，砂目がつく。26は，皿である。見込みには，胎土目がつく。

27～33は，備前焼である。27～30は，すり鉢，31は大甕の口縁である。すり鉢内面のすり目は，使用のため磨滅している。

32・33は，瓦質土器の火鉢である。

34～38は，瓦である。34・35は軒丸瓦で，34は左三ツ巴，35は右三ツ巴である。珠文の大きさ・数も異なる。36は，軒平瓦である。37は丸瓦，38は平瓦である。38には釘穴が穿たれる。39・40は，石塔の破片である。39は五輪塔の地輪もしくは多宝塔の軸部であろう。四面に梵字を刻む。拓本の左から2番目はキリーク（＝阿弥陀如来），3

Fig.424　3502号遺構（北より）

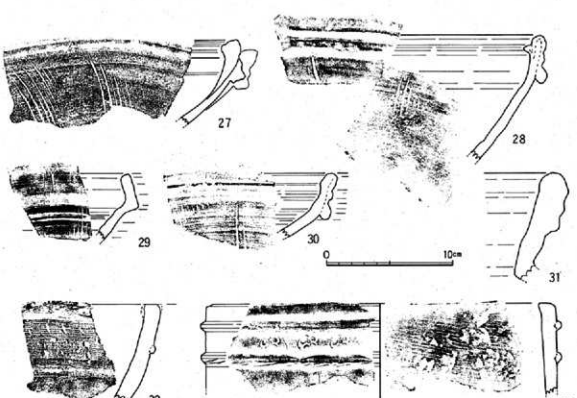


Fig.425　3502号遺構遺物実測図2（1／3）

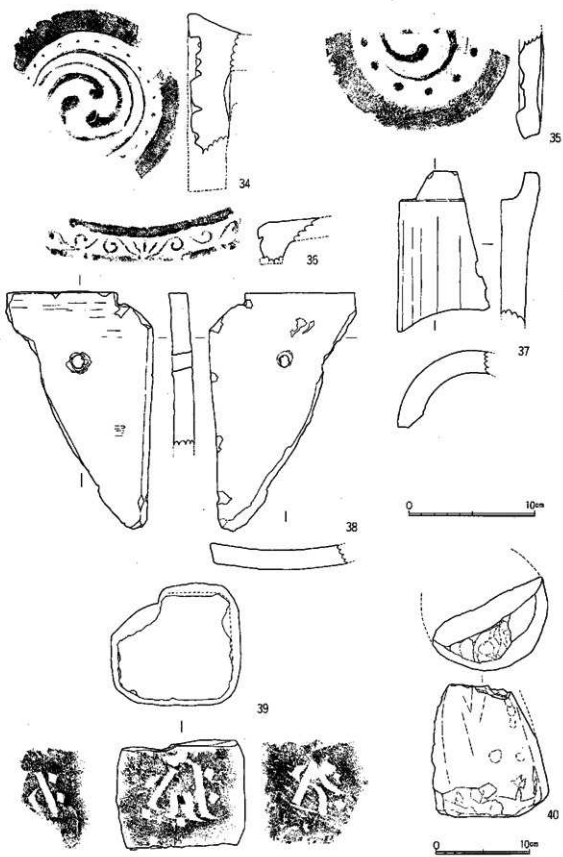


Fig.426　3502号遺構遺物実測図3（1／3・1／4）

番目はタラーク（＝虚空蔵菩薩）である。一番左の梵字は一部しか残らないのではっきりとは言えないが，サク（＝勢至菩薩）ではなかろうか。40も石塔の一部であろう。39・40ともに，砂岩製である。

これらの遺物からみて，3502号遺構の時期は，17世紀前半を考えたい。

（2）土坑

2876号遺構（Fig.427）

B区第1面，E−29グリッド検出の小土坑である。柱穴状のピットであるが，比較的多くのまとまった遺物を出したので，報告する。

出土遺物をFig.427に示す。1〜6は，土師器である。1〜3は皿，4・5は坏である。外底部は回転糸切り，内底の静止ナデ調整はみられず，横ナデ調整のみ施される。法量は，口径ー底径ー器高の順で，それぞれ6.9−4.7−1.25cm，7.1−3.9−1.7cm，7.3−7.6−5.1〜5.6−1.5cm，9.5−6.2−1.85cm，10.4−6.1−2.2cmをはかる。6は，小鉢である。口径7.7cm，底径5.4cm，器高3.6cmをはかる。7〜10は，唐津焼である。7は小碗，8は碗，9・10は皿で，見込みには砂目が残る。11は備前焼きのすり鉢である。8本単位のすり目が刻まれている。12は，伊万里の染付である。蛇ノ目凹形高台につくる。13は瓦の転用品である。左三ツ巴の軒丸瓦の破片の周囲を削って丸味を持たせ，扁桃形につくる。裏面には，刀子の先の様なもので絵を刻む。立木を描いた様にも見えるが，意匠不明と言わざるをえない。

さて，年代観であるが，12の伊万里にみられる蛇ノ目凹形高台は，18世紀前半にならないと出現しない。したがって，これにあわせれば，18世紀の遺構ということになるが，唐津焼や備前焼から見れば，17世紀前半におさまるだろう。一応，大方の遺物の示す年代にしたがって，17世紀前半代の遺構と考えたい。

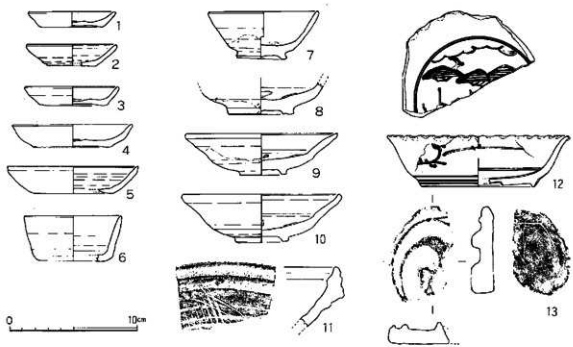


Fig.427　2876号遺構遺物実測図（1／3）

9．その他の出土遺構

ここまでは，遺構中心に説明を加えてきたが，扱いきれなかった遺構や，包含層出土遺物の中にも看過できないものは多くある。その中から若干ではあるが，以下簡単に紹介する。

（1）古墳時代以前の土器（Fig.428）

1は，縄文時代晩期，黒川式土器の浅鉢である。口縁はゆるく波打つ。内外面とも，研磨される。

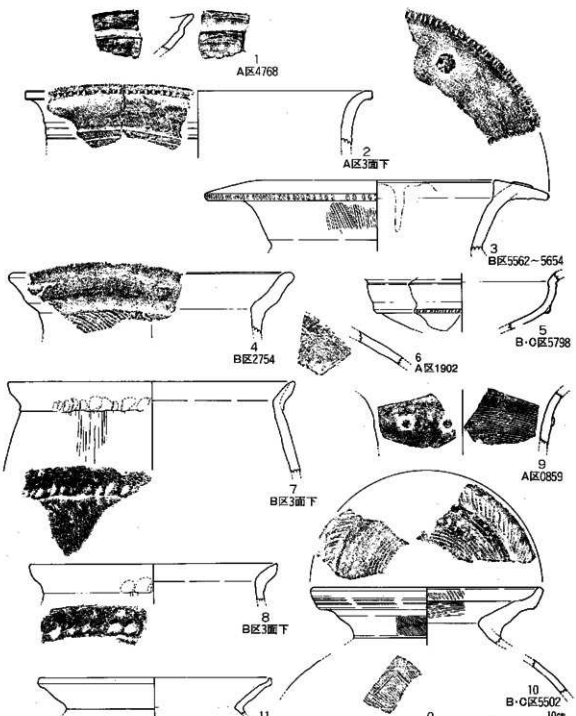


Fig.428　古墳時代以前の土器実測図（1／3）

2～6・9・10は，弥生式土器である。2は前期の甕で，口縁下端に刻みを入れる。3はひさご形土器であろうか。類部に刷毛目がのこるものの他は刷毛目をナデ消し，丁寧に作る。赤色顔料を塗付する。4は壺であろう。胎土・調整とも粗い。5は，鉢または高坏であろう。内外面とも研磨される。6は壺の肩部の破片である。櫛描波状文が並ぶ。畿内系の土器であろう。9は，壺であろう。灰色の精良な胎土で，内面は刷毛目，外面は密にヘラ磨きされる。円形付文がつく。畿内系か。7・8は，朝鮮系無文土器である。これについては，福岡市教育委員会後藤直氏より報告文をいただいているので，「第三章　まとめ」に掲載する。10は，東海系土器で，いわゆるパレススタイルの壺である。肩部には，沈線で連続山形文を描く。11は，庄内式の甕である。体部内面はケズリである。

Fig.429～431には，律令時代の遺物を並べた。Fig.429－1は，石製巡方である。黒色の石を用いている。長辺3.75cm，短辺3.5cm，厚さ0.7cmをはかる。裏面の四隅に潜り穴を設け，銅線で帯にとめる。2は，銅製丸牌である。小型品で，長さ2.25cm，幅1.5cm厚さ0.2cm程で，扁平な板状を呈する。裏面の３ケ所に爪痕がある。3は滑石製の丸牌鋳型である。扁平な滑石の板の片面を彫り込んで鋳型をつくる。甕の表面には，白色の付着物があるが，奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏によると，土で，離型済として用いたものだろうとの由であった。4～11は，墨書須恵器である。7は「佐」と書く。9は，二文字あるが，墨痕がうすく，はっきりしない。一字目は「神」又は「伸」，二文字目は「主」または「王」とみえる。10も文字と思われるが，墨痕がうすく判読できない。12は，土師器の墨書である。高台付坏の密にヘラ磨きされた内底に墨書される。「□ₐ河」と読める。13は，須恵器の転用硯である。高台付坏の内面が磨耗し，墨がしみついている。14は，鴻臚館式軒丸瓦の瓦当である。15～25は，緑釉陶器である。15は，香炉の蓋である。花文を陰刻する。暗灰色の須恵質の胎に緑色釉を施す。猿投の黒笹90号窯式にあたる。16～18は，碗の口縁である。19～25は，碗・皿の底部である。密にヘラミガキする。19の見込みには，重ね焼きの目痕がつく。23は，削り出し高台で，見込みに，輪状に長く目痕（重ねあと？）がつく。24の内面にも，小さい円形の目痕がみられる。26～31は灰釉陶器である。26・28・29は皿，27・30・31は碗である。30・31には，見込みに，輪状の重ね焼き痕跡がみとめられる。32～41は，焼塩壺である。いずれも内面には布目，外面は指押えする。42は，玄界灘式製塩土器である。外面には縦縄文の叩き，内面には横位の平行叩きがつく。

Fig.432は，土師器・瓦器である。1は，畿内系の坏である。口径部は大きく弯曲し，内方に折れる。内面は，密に横方向のヘラ磨きを施す。赤茶色を呈する。2は，畿内系の白色土器の坏である。手捏ねで整形されており，体部下半は指押え，上半は手持ちで横ナデする。胎土は良好で，器壁は薄い。3は，山口県山口市の大内氏関係の遺跡（大内氏館跡，瑠璃光寺跡）で出土するタイプの坏である。回転糸切りした底部から，体部は大きく開いて直線的に立ち上る。胎土はキメ細かく精良で，器壁は薄い。4～7・11は，在地産の土師器椀である。4・5は横ナデ調整のみで，ヘラ磨きを行わない。6・7は，内外面に密なヘラ磨きを施す。7は底部押し出しによる椀である。8～10は，早島式土器（＝古備系土師質土器）の椀である。8には高台はつかない。9の高台は非常に雑で，途中断続的につづく。12～14は，内黒土器（＝黒色土器A類）である。12・13は椀である。丸味の強い深椀タイプである。14は，甕である。外面は横ナデ調整，内面は密に横方向のヘラ磨きを施す。15～17・19は，楠葉型瓦器である。15は皿である。16・17は坏である。体部外面をヘラ状工具で縦におさえてくぼませ，輪花につくる。16の見込みには，ヘラ磨きで，草花文の暗文を施す。19は皿で，内底はジグザグ状に暗文をつける。20は和泉型瓦器である。内面は乱雑な多方向からのヘラ磨きだが，磨きの痕跡は不明瞭である。21は，筑前型瓦器の椀である。18・22は，在地産かとも思うが，あまり類例を見ない瓦器である。18は皿で，体部外面は横ナデ調整，内面はヘラ磨きする。22は，椀であ

る。粗い作りで，ひずみもみられる。低平な，申し訳程度の高台を貼り付けている。外面は横ナデ，内面は，平滑にナデる。コテを使ってナデたものか。23は，瓦器の壺である。頸部から口縁部は横ナデ調整，体部は指押えで，肩部に連結輪状文を暗文で描く。24は，脚部である。本来の器形は不明で

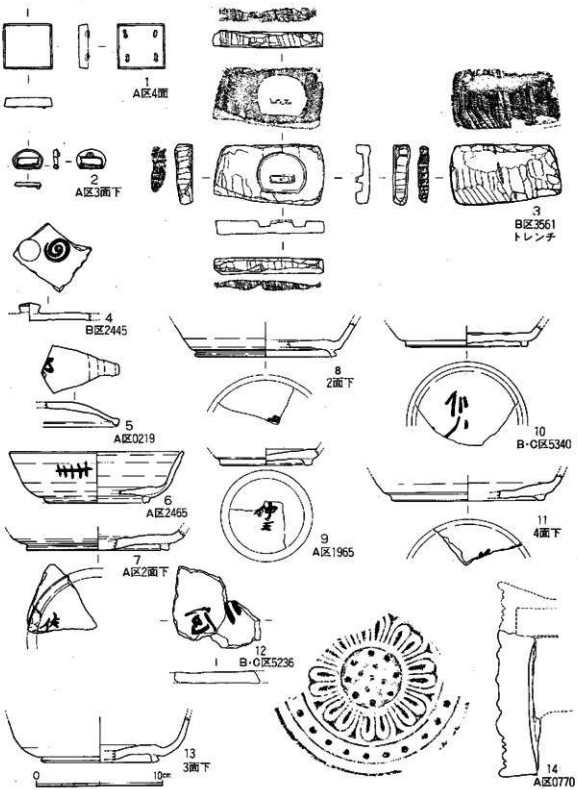


Fig.429　律令時代の遺物実測図1（1／3）

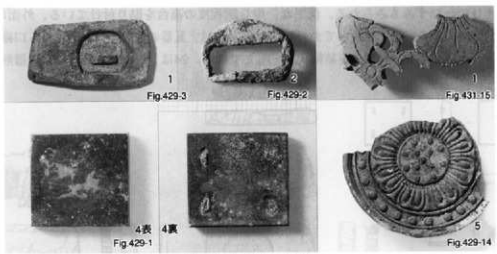


Fig.430 律令時代の遺物

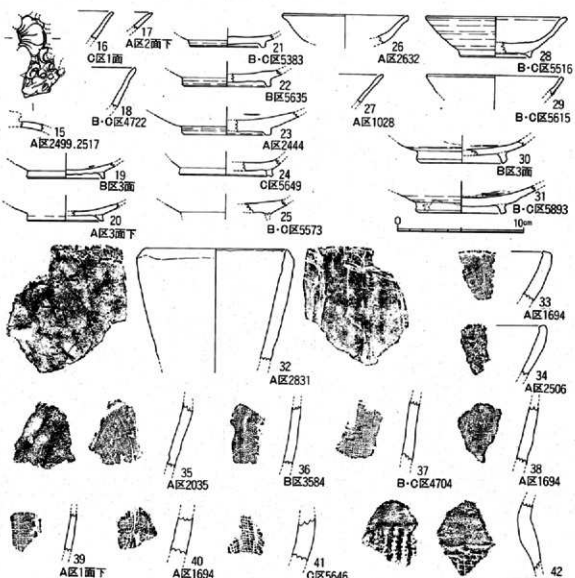


Fig.431 律令時代の遺物実測図 2 (1／3)

ある。ちょうど脚の継ぎ目部分である。25〜27は，楕葉型瓦器のミニチュアの脚付釜である。25はその脚である。全面縦方向のナデ調整される。26・27は，いずれも脚を欠く。27の外底部には煤が付着しており，ミニチュアであるにもかかわらず，実際に火にかけられたことを示している。

Fig.433は，瓦である。1・2は，押圧文系の軒平瓦である。瓦当の下端を，布をあてた指でおさえて，フリル状にする。平行する二重の突線の間は，ヘラ先でこねて，ねじって連続したS字状文をつくり出す。3も軒平瓦である。これは大型で厚く，瓦当面も大きい。瓦当の唐草（？）文様の彫りは浅い。4・5は，軒平瓦である。6・7は，鬼瓦の角であろう。焼成不良の瓦質で，灰褐色を呈する。断面が略円形の，キャップ形を呈する。ヘラ先状工具で，乱雑に縦方向の沈線を刻みつける。折損のため，本来の長さは不明である。

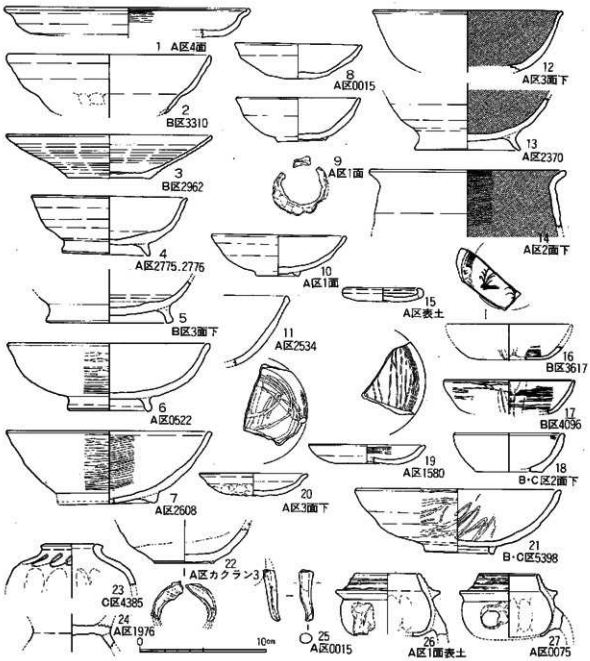


Fig.432 土師器・瓦器実測図（1／3）

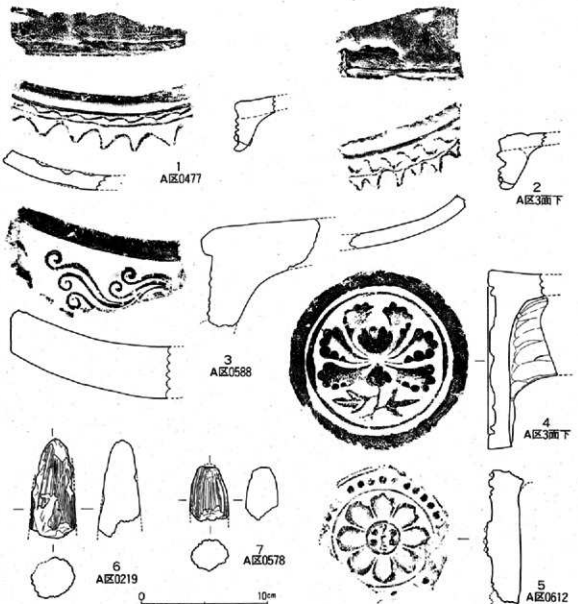


Fig.433　瓦実測図（1／3）

Fig.434　瓦

Fig.435～439は，墨書資料である。Fig.435－1は，土師器の坏である。内底に僧形の人物を墨書する。外底にも墨痕があるが，内容不明。絵か。2は土師器の皿である。外底に仮名文字を書く。文字の配置からみて，和歌を詠んだものか。3は，内黒土器である。墨書は体部外面に書かれる。文字と思うが，内容不明。4～7は，花押墨書の例である。花押の形からみて，邦人の花押と思われる。4は土師器の坏で，花押2個が並ぶ。5・6は青磁である。6の見込みは円形に釉を掻き取る。7は，瀬戸窯のおろし皿である。Fig.436の2は，絵であろうか。3～5には，仮名文字を集めた。4は「ふき」5は「くろ」と読める。6～9は，数字である。10は，中央に巾着状の絵を描き，その右に文字（3文字）左に「十」と書く。11～16は，綱首銘の墨書である。それぞれ「王綱」「大林綱」「六綱」「綱」，15は二行書きで，右は不明，左は「□綱」，16は「関綱」と読める。17・18は用途に関する墨書で，17は「僧供」18は「拝堂」である。19～25は，文字及び人名で，順に「因ゟ正」，「西囲ゟ」，「得仁」，「明道」「六郎」，「□九□」，右行に「五十」左行に「二得」，26～28は，「大」に関わ

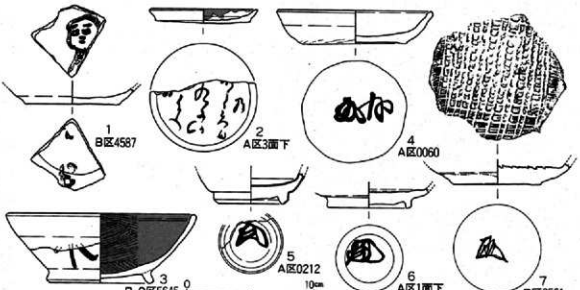


Fig.435　墨書土器・陶磁器実測図（1／3）

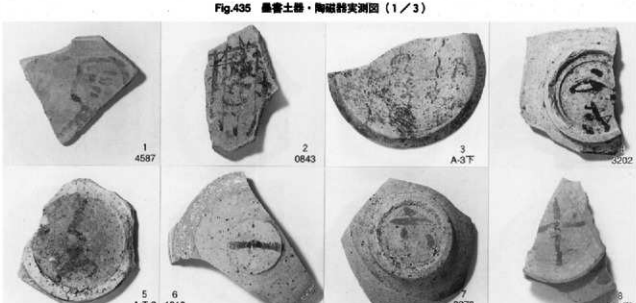


Fig.436　墨書土器・陶磁器1

Fig.437　墨書土器・陶磁器 2

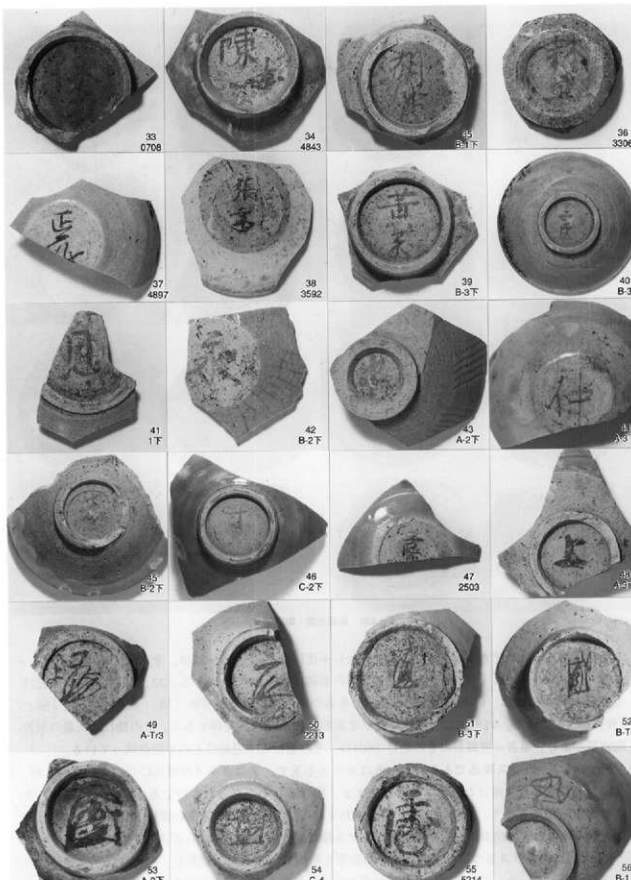


Fig.438 墨書土器・陶磁器 3

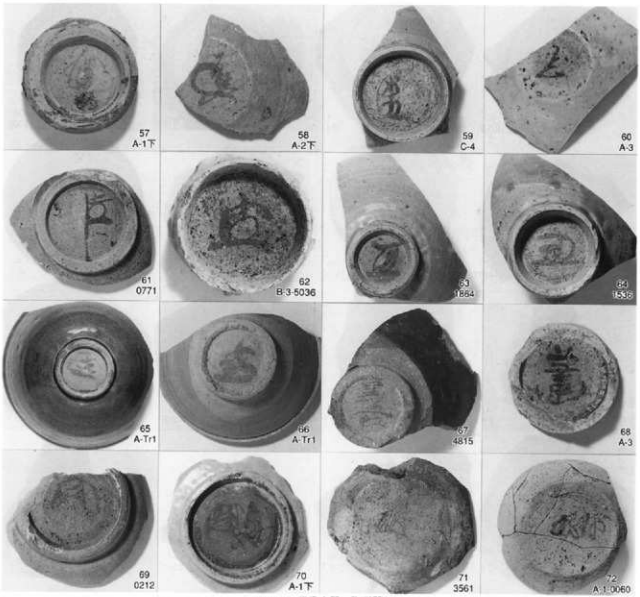


Fig.439　墨書土器・陶磁器 4

る墨書である。それぞれ，「大山」，「大」，「大」＋花押である。29～32は，李に関する墨書である。29は「李」，30～32は「李」＋花押である。李の筆跡は29と30で共通する。33・34は，「陳」＋花押である。35～40には，姓＋花押の組み合わせをあつめた。姓はそれぞれ「胡」，「林」，「正」，「張」，「黄」，「二」である。41～48は，漢字一文字である。49～72は，花押である。この他にも大量の墨書陶磁器があり，筆者が登録したものだけで504点，その他にも未登録のものが数点残っている。

Fig.440は，ガラス製品である。1～8はガラス小玉で，7はガラスが環状についていないもの，8は，芯のまわりに溶けたガラスを巻いたまま，切り離しそこなったものである。10・11は，ガラス容器の一部であろう。11には文様が鋳出されている。12は，ガラス像の破片と思われる。たとえば人物の座像の膝に出来た衣のひだを想像させる様な破片である。13は，ガラス小壺である。

Fig.441は，ガラスるつぼである。中国の陶器を転用したもので，被熱し，内面にはベッタリとガラスが付着している。これについては，付篇に山崎一雄氏らの分析の原稿をいただいている。そちらを参照いただきたい。19・20は，銅の取瓶である。溶けた銅がへばりつく。

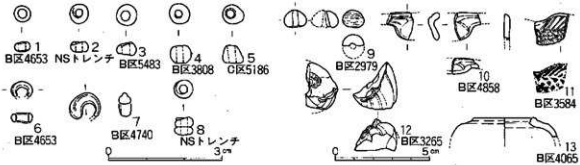


Fig.440　ガラス製品実測図（1／1・1／2）

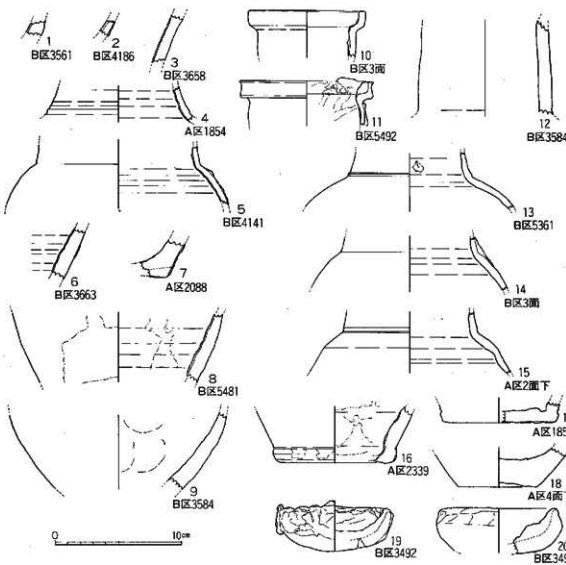


Fig.441　ガラスるつぼ・銅取鍋実測図（1／3）

Fig.442に示したのは，土製品である。1は，円盤状土製品である。一面に細い沈線で文様を描く。2は，管状土錘である。3は棒状を呈する。人形の一部分か。4は，土鈴である。5～10は，人形である。上師質，素焼の人形だが，ところどころに彩色した痕跡がみとめられる。5は，両脚の間に火鉢を抱く。8は，左脇に毬を抱えている。9は，両脚の間に太鼓を置き，右手にバチを持って叩いて

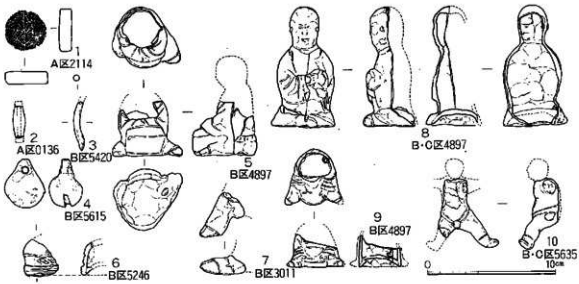


Fig.442 土製品実測図（1／3）

いる。10は，5～9までと違い，半裸である。褌をしめ，足にはブーツを穿いている。背中に何かつけている様だが，何かわからない。両手両足を広げている様は，力士を思わせる。太宰府市教育委員会の山村信栄氏によれば，これら土師質の人形は，中国製と考えられるとのことである。出土した遺構の年代観からみて，13世紀から14世紀前半の幅の中にすべておさまる。

Fig.443は，石器である。1・2は，黒曜石の剥片である。3は，剣型石製模造品である。滑石製。先端から2分の1程を折損する。4は碧玉製管玉である。5・6は，石庖丁の未製品である。粗割りのままの状態で，放棄されている。

Fig.444は，**石製品**である。1・2は滑石製のミニチュア硯であるが，2には墨痕がしみており，実際に使用されていたことを示している。3・4は，赤間石の硯である。規格品の様で，長さこそ違うが，幅・高さは，ぴったりと一致する。5は，凝灰岩製の硯である。額は二段に削りこむ。6は，赤間石の硯である。7は，いわゆる赤間石の塊であるが，硯の未製品である。粗割りされた石材の面を全周に残し，その一面に硯面のあたりを毛書きし，鑿を入れかけている。硯面のあたりは，粗割りした原材の形をそのまま取り入れている。原材を博多に持ちこんで，製作するという事も行われてい

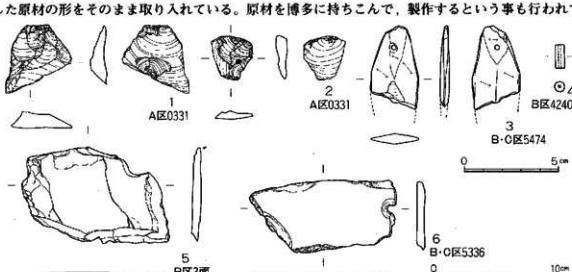


Fig.443 石器実測図（1／2・1／3）

たのであろう。8は滑石製の鋳型である。被熱して，表面が白変する。9は，石鍋の転用品である。仏の座像を陽刻する。摺り絵の版にしたものであろうか。10は，滑石製の錦金具の鋳型である。表裏とも型が彫られているが意匠は異なる。11は，スタンプと思われる。石鍋のつまみの部分を生かしたもので，版面には，粗雑だが，花が描かれている。

Fig.445・446は金属製品である。1は銅鏃である。うすく鍋が立つ。断面は，肉の厚い菱形を呈する。全長3.6cm，刃部長1.8cmをはかる。2は，銅製の釣手金具である。用途不明であったが，博多遺

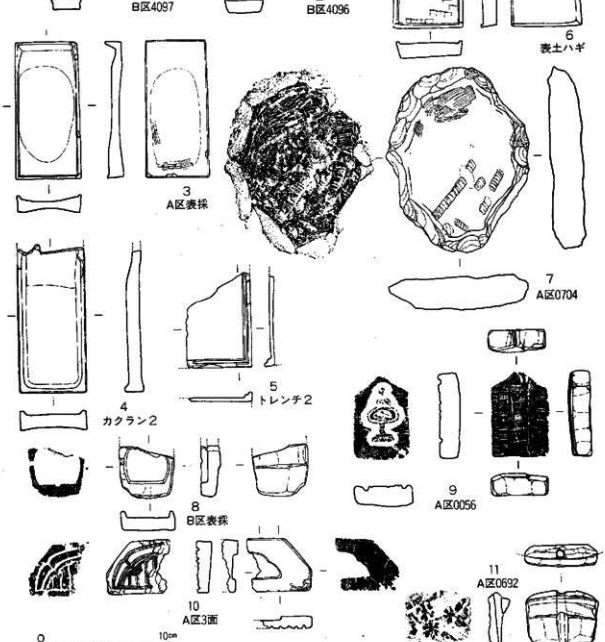


Fig.444　石製品実測図（1／3）

構群第84次調査から銅製の片口鍋が出土し，疑問は氷解した。84次調査出土の鍋を，参考のため Fig.446に示す。釣手金具は，鍋の片口の部分に鋲留めされて，釣手を通す。3は銅製権であろう。頂部の孔に銅の環が通されている。4は，銅製覆金具である。6は，銅鏡である。網文様が鋳出されている。6も銅鏡である。若干ひずんでいる。7は鉄製小柄である。柄の木質が残る。8は，鉄製刀子である。9は鎧の小札である。鉄製の三ツ目札であるが，通例よりも横1列分多い。Fig.446－1は，鉄製短刀である。柄は，鞘にまかれてはいるがほぼ完存する。山形の呑口となる。3は，握り鉄みである。4は雁股の鏃である。5も鉄の鏃である。鏃身は錆がひどく旧状を知りがたい。

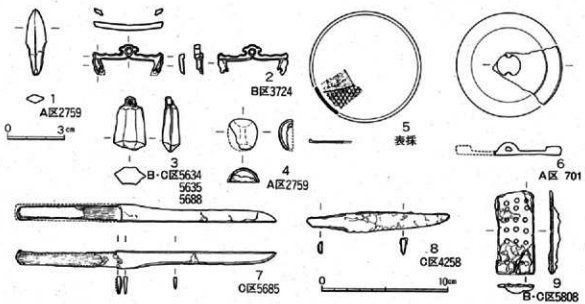


Fig.445 金属製品実測図（1／3）

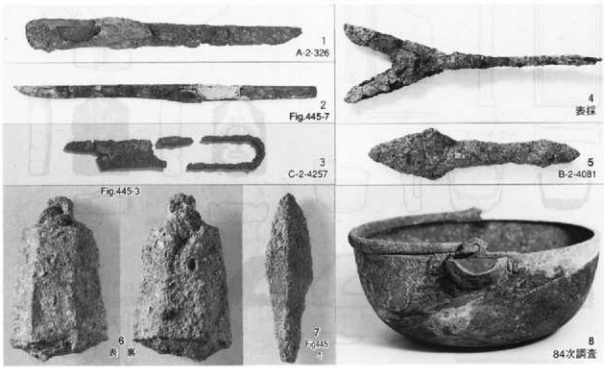


Fig.446 金属製品

10. 銅銭

本調査では，銭銘の解読できたもの423枚，解読不能なもの971枚以上（複数枚の銭が錆びついてはずれないものがあるため），合計1394枚以上の銅銭が出土した。銭銘が明らかなものでは，北宋銭が344枚と80%を占めている。

出土銭で注目されるものとしては，パスパ文字の「大元通寶」が第1に上げられる。博多遺跡群第35次調査で出土したが，国内ではそれ以外に出土例がないものである。新安沈船からは出土しており，新安沈船が博多を目指していたことを考えると，博多の元とのつながりがうかがえ，興味深い一枚である。その他，博多遺跡群では初めて「貨泉」が出土したが，これも中世，他の宋銭などに混って将来されたものであろう。

Tab 1　出土銅銭一覧表　　合計1394枚以上

銭貨名	初鋳年	時代	枚数	銭貨名	初鋳年	時代	枚数	銭貨名	初鋳年	時代	枚数	銭貨名	初鋳年	時代	枚数
貨　泉	14	新	1	天聖元寶	1023	宋	15	元祐通寶	1086	宋	34	開禧通寶	1205	南宋	2
五　銖	118	漢	1	明道元寶	1032	宋	1	紹聖元寶	1094	宋	13	嘉定通寶	1208	南宋	1
開元通寶	621	唐	34	景祐元寶	1034	宋	1	元符通寶	1098	宋	9	紹定通寶	1228	南宋	2
乾元重寶	758	唐	1	皇宋通寶	1037	宋	35	聖宋元寶	1101	宋	19	至大通寶	1310	元	1
乾徳元寶	919	前蜀	1	至和元寶	1054	宋	6	崇寧通寶	1102	宋	4	大元通寶	1310	元	1
唐国通寶	959	南唐	1	至和通寶	1054	宋	2	崇寧重寶	1104	宋	7	洪武通寶	1368	明	5
太平通寶	976	宋	11	嘉祐元寶	1056	宋	6	大観通寶	1107	宋	8	永楽通寶	1408	明	1
淳化元寶	990	宋	2	嘉祐通寶	1056	宋	4	政和通寶	1111	宋	14	朝鮮通寶	1423	朝鮮	1
至道元寶	995	宋	6	治平元寶	1064	宋	5	宣和通寶	1119	宋	3	寛永通寶	1636	日本	24
咸平元寶	998	宋	3	治平通寶	1064	宋	1	淳熙元寶	1174	南宋	1	康熙通寶	1662	清	1
景徳元寶	1004	宋	8	熙寧元寶	1068	宋	41	紹熙元寶	1190	南宋	1	半　銭	明治8年	日本	1
祥符元寶	1008	宋	11	熙寧重寶	1068	宋	1	慶元通寶	1195	南宋	1	一　銭	大正10年	日本	1
祥符通寶	1008	宋	7	元豊通寶	1078	宋	52	嘉泰通寶	1201	南宋	1	解読不能			971以上
天禧通寶	1017	宋	10												

Tab 2　遺構別銅銭一覧表

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考	面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考	面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
1面	0004	聖宋元寶	1		1面		皇宋通寶	2		1面		元豊通寶	1	
		解読不能	1				大観通寶	2				解読不能	15	
	0007	解読不能	1				元祐通寶	3			0054	紹定通寶	1	
	0011	乾徳元寶	1				解読不能	3				嘉泰通寶	1	
		元祐通寶	1			0016	解読不能	1				天聖元寶	1	
		治平元寶	1			0027	開元通寶	1				元豊通寶	1	
		皇宋通寶	1				明道元寶	1				熙寧元寶	1	
		元符通寶	1				天聖元寶	1				宣和通寶	1	
		政和通寶	1				熙寧元寶	1				元祐通寶	4	
		至道元寶	1				解読不能	3				解読不能	33	
		解読不能	19			0028	元豊通寶	1				至道元寶	1	振り下げ
	0012	熙寧元寶	1			0030	解読不能	1				祥符通寶	1	〃
		解読不能	1			0053	熙寧元寶	1				政和通寶	1	〃
	0015	政和通寶	1				大観通寶	1				解読不能	3	〃
		至和元寶	1				紹聖元寶	1				寛永通寶	1	周辺
		熙寧元寶	2				皇宋通寶	1				開元通寶	1	〃

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
1面	0054	皇宋通寶	1	周辺
		祥符元寶	1	〃
		解読不能	8	〃
	0055	解読不能	2	
	0056	解読不能	1	
	0057	解読不能	2	
	0058	解読不能	3	
	0063	元豊通寶	1	
		解読不能	2	
	0070	解読不能	8	
	0074	解読不能	25	
	0075	元豊通寶	1	
		解読不能	24	
	0076	祥符通寶	1	
	0077	至和元寶	1	
		太平通寶	1	
	0086	解読不能	1	
	0094	解読不能	1	
	0095	解読不能	1	
	0104	解読不能	1	
	0106	解読不能	1	
	0118	景祐元寶	1	
		祥符元寶	1	
		天聖元寶	1	
		天禧通寶	1	
		乾元重寶	1	
	0124	聖宋元寶	1	
	0129	解読不能	1	
	0130	解読不能	1	
	0132	開元通寶	1	
		解読不能	3	
	0136	解読不能	2	
	0137	解読不能	1	
	0139	解読不能	2	
	0140	元豊通寶	2	
		開元通寶	1	
		天聖元寶	1	
		崇寧重寶	1	
		解読不能	3	
	0147	開元通寶	1	
	0164	解読不能	1	
	0169	大観通寶	1	
	0182	解読不能	2	
	0184	祥符元寶	1	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
1面		政和通寶	1	
		紹聖元寶	1	
		皇宋通寶	1	
		解読不能	7	
	0190	熙寧元寶	1	
		解読不能	1	
	0219	解読不能	1	
	0222	解読不能	2	
	0240	天聖元寶	1	
	0246	解読不能	1	
	0263	元豊通寶	1	
	0295	天聖元寶	1	
		元祐通寶	1	
	0305	解読不能	1	
	0319	解読不能	1	
	0320	解読不能	1	
	2863	熙寧元寶	1	
		開元通寶	1	
		元豊通寶	1	
		解読不能	1	
	2877	解読不能	1	
	2889	皇宋通寶	1	
	2911	解読不能	1	
	2949	元祐通寶	1	井側
	2952	解読不能	2	
	2954	元祐通寶	1	
	2969	解読不能	1	
	2978	元祐通寶	1	井側
	2987	解読不能	3	
	3046	至道元寶	1	
	3054	元豊通寶	1	
	3066	解読不能	1	
	3129	太平通寶	1	
	3141	寛永通寶	1	井側
		崇寧通寶	1	掘り方
	3150	聖宋元寶	1	
		解読不能	1	
	3167	解読不能	1	
	3177	解読不能	1	
	3203	解読不能	1	
	3243	皇宋通寶	1	
	3248	解読不能	1	
	3294	解読不能	1	
	3306	元符通寶	1	掘り方

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
1面		熙寧元寶	1	
	3311	熙寧元寶	1	
	3313	解読不能	1	
	3319	熙寧元寶	1	
	3346	皇宋通寶	1	
	3356	元豊通寶	1	
	3410	解読不能	1	
	3413	解読不能	1	
	3426	解読不能	1	
	3460	解読不能	2	
	3469	皇宋通寶	1	
	3845	熙寧元寶	1	
		解読不能	2	
	3863	熙寧元寶	1	
	3896	景徳元寶	1	
	3950	一　銭	1	大正10年
	3955	天聖元寶	1	
	3962	解読不能	2	
	3968	大観通寶	1	
	3969	聖宋元寶	1	
		天禧通寶	1	
		紹聖元寶	1	
		至和通寶	1	
		解読不能	5	
	4002	開元通寶	1	
	4003	元祐通寶	2	
		解読不能	1	
	4005	元祐通寶	1	
	4013	皇宋通寶	1	
	4015	元祐通寶	1	
		解読不能	1	
	4030	嘉祐通寶	1	
	4039	解読不能	1	
	4139	元豊通寶	1	
2面	0326	皇宋通寶	1	
		解読不能	4	
	0327	解読不能	1	
	0328	解読不能	2	
	0331	解読不能	1	
	0344	解読不能	1	
	0369	解読不能	1	
	0375	解読不能	1	
	0381	解読不能	1	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備考
2面	0382	聖末元寶	1	
		解読不能	13	
	0383	解読不能	1	
	0384	黒率元寶	1	
		慶元通寶	1	
		解読不能	18	
	0385	黒率重寶	1	
		解読不能	1	
	0386	解読不能	1	
	0387	解読不能	1	
	0388	解読不能	1	
	0399	解読不能	1	
	0412	解読不能	1	
	0413	解読不能	1	
	0419	嘉定通寶	1	ｳﾗ「日」に
		祥符元寶	1	
		解読不能	14	
	0420	解読不能	2	
	0421	開元通寶	1	「ウラ(ー)」
		黒率元寶	1	
		解読不能	12	
	0433	解読不能	1	
	0446	元符通寶	1	
		解読不能	4	
	0470	解読不能	2	
	0545	解読不能	1	
	0551	解読不能	1	
	0552	解読不能	2	
	0553	解読不能	2	
	0558	政和通寶	1	
		解読不能	2	
	0561	元豊通寶	1	
		皇宋通寶	1	
		解読不能	7	
	0573	解読不能	1	
	0579	解読不能	2	
	0586	天禧通寶	1	
		解読不能	1	
	0600	治平元寶	1	
		黒率元寶	1	
		解読不能	4枚以上	
	0613	解読不能	1	
	0616	解読不能	3	
	0617	解読不能	7	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備考
2面		元豊通寶	1	
	0638	解読不能	1	
	0660	解読不能	1	
	0662	解読不能	1	
	0666	解読不能	1	
	0671	政和通寶	1	
	0674	元豊通寶	1	
		解読不能	1	
	0683	太平通寶	1	
	0701	天禧通寶	2	
		祥符通寶	1	
		大元通寶	1	パスパ文字
		解読不能	1	
	0702	解読不能	2	
	0703	元祐通寶	3	内、36枚は縁
		政和通寶	2	
		元豊通寶	2	
		祥符元寶	1	
		聖宋元寶	1	
		解読不能	35	
	0704	太平通寶	1	
		解読不能	3	
	0706	解読不能	1	
	0707	景徳元寶	1	
		元豊通寶	1	
		太平通寶	1	
		解読不能	2	
	0708	解読不能	1	
	0710	解読不能	1	
	0717	紹聖元寶	1	
	0719	解読不能	1	
	0720	解読不能	3	
	0721	崇寧重寶	1	
		黒率元寶	1	
	0722	治平元寶	1	
		元豊通寶	1	
		大観通寶	1	
		解読不能	3	
	0724	解読不能	1	
	0727	解読不能	3	
	0748	解読不能	1	
	0840	解読不能	1	
	3522	解読不能	1	
	3584	元符通寶	1	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備考
2面		開元通寶	1	
		嘉祐元寶	1	
		黒率元寶	1	
		崇寧重寶	1	
		祥符通寶	1	
		政和通寶	1	
		解読不能	7	
	3677	元豊通寶	1	B層
	3806	開元通寶	1	
		解読不能	1	
	3810	元豊通寶	1	井側
		元祐通寶	1	
	4054	元豊通寶	1	
	4097	元祐通寶	1	
	4213	解読不能	1	
	4214	解読不能	1	
	4215	解読不能	2	
	4216	淳熙元寶	1	No.01～No.06は連
		政和通寶	1	
		元豊通寶	1	
		開元通寶	1	
		解読不能	6	
	4217	太平通寶	1	
		解読不能	1	
	4235	解読不能	1	
	4239	大観通寶	1	
		解読不能	1	
	4240	元豊通寶	1	
		嘉祐元寶	1	
		開元通寶	1	
	4424	解読不能	1	
	4246	解読不能	2	
	4255	解読不能	1	
	4257	元豊通寶	1	3枚は縁
		皇宋通寶	1	
		解読不能	4	
	4261	解読不能	1	
	4262	解読不能	3	
	4275	聖宋元寶	1	
		解読不能	1	
	4312	解読不能	1	
	4343	解読不能	1	
	4348	解読不能	1	
	4352	皇宋通寶	1	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
2面	4409	天福通寶	1	
	4425	解読不能	1	
	4426	解読不能	1	
	4450	解読不能	1	
	4465	元豊通寶	1	
	4506	淳化元寶	1	
		解読不能	1	
	4518	開元通寶	1	
	4553	開元通寶	1	
	4654	皇宋通寶	2	
		元豊通寶	2	
		開元通寶	2	
		天聖元寶	2	
		熙寧元寶	2	
		至道元寶	1	
		元祐通寶	1	
		治平元寶	1	
		嘉祐通寶	1	
		至和元寶	1	
		政和元寶	1	
		解読不能	1	
	4768	洪武通寶	1	
3面	0748	開元通寶	1	
		聖宋元寶	1	
		元豊通寶	1	
		解読不能	3	
	0764	解読不能	1	
	0770	皇宋通寶	1	(銭ズレ)
		解読不能	2	
	0795	解読不能	1	
	0829	解読不能	1	
	0831	咸平元寶	1	
	0832	元祐通寶	1	
		解読不能	3	
	0833	天聖通寶	1	
	0834	解読不能	3	
	0835	解読不能	1	
	0836	開元通寶	1	
		解読不能	9枚以上	
	0838	解読不能	1	
	0839	嘉祐通寶	1	
	0840	解読不能	10	
	0843	開元通寶	1	
	0846	解読不能	1	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
3面	0847 0848	解読不能	2	
	0849	太平通寶	1	
		解読不能	10	
	0859	開元通寶	1	
		聖宋元寶	1	
		天聖元寶	1	
		解読不能	5	
	0862	景徳元寶	1	
		嘉祐元寶	1	
		解読不能	2	
	0949	解読不能	2	
	0960	解読不能	1	
	0961	解読不能	1	
	1014	解読不能	1	
	1016	天聖元寶	1	3分人分 銅り方
	1123	解読不能	1	
	1170	解読不能	6	
	1174	解読不能	1	
		元豊通寶	1	井側
		咸平元寶	1	〃
		解読不能	3	〃
	1187	解読不能	1	
	1268	解読不能	1	
	1284	解読不能	1	
	1345	解読不能	1	
	1348	解読不能	1	
	1357	解読不能	1	
	1406	解読不能	1	
	1437	解読不能	1	
	1456	解読不能	1	
	1538	解読不能	1	
	1685	解読不能	1	
	1686	解読不能	1	井側
	1712	解読不能	1	
	1716	解読不能	1	掘り方
	3584	祥符元寶	1	
	3592	大観通寶	1	
	3808	元祐通寶	1	
	4713	元祐通寶	1	井側
	4803	解読不能	1	
	5208	元豊通寶	1	
	5064	治平元寶	1	
		解読不能	1	
	5115	解読不能	1	

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
3面	5117	解読不能	1	
	5146	解読不能	2	
	5153	聖宋元寶	1	
	5160	解読不能	1	
	5179	太平通寶	1	
		解読不能	1	
	5199	元豊通寶	1	井側
		解読不能	1	
	5236	解読不能	2	
4面	1743	解読不能	1	
	1774	解読不能	1	
	1902	解読不能	1	
		解読不能	4	奥
	1923	解読不能	1	
	1976	解読不能	2	
	1990	熙寧元寶	1	
		解読不能	1	
	1993	解読不能	1	
	2335	解読不能	1	
	2721	至道元寶	1	
	2771	解読不能	1	
	5399	解読不能	1	
	5493	洪武通寶	1	井側
	5515	皇宋通寶	1	掘り方
	5542	洪武通寶	1	井側上部 右部部分
	5543	崇寧通寶	1	掘り方
	5615	寛永通寶	11	井側
	5634	熙寧元寶	1	掘り方
		元符通寶	1	掘り方
		景徳元寶	1	
	5645	元符通寶	1	井側
	5653	聖宋元寶	1	井側
		五銖銭	1	
		解読不能	1	
	5680	熙寧元寶	1	井側
	5701	皇宋通寶	1	井側
	5734	解読不能	1	
	5773	解読不能	1	
	5808	咸平元寶	1	井側

C-4-5653(并傳)
貨　泉

A-1-118
乾元重寶

C-2
唐国通寶

A-1 0027
熙寧元寶

B-2-3584
崇寧重寶

A-2
慶元通寶

同左　裏

A-1
紹定通寶

同左　裏

表　採
康熙通寶

Fig.447　出土銅銭写真

A-2-701
大元通寶

A-表土はぎ
崇寧重寶

B-2-4054
元豊通寶

A-2
元豊通寶

Fig.448　出土銅銭拓本1（1／1）

C-4-5653-并側
貨　泉

A-1-0118
乾重元寶

C-2
唐国通寶

B-C-3
太平通寶

B-1-3046
至道元寶

C-1
祥符元寶

A-2-0701
天補通寶

A-1-0295
天聖元寶

C-1-3955
天聖元寶

B-2下-4654
至和元寶

Fig.449　出土銅銭拓本2（1／1）

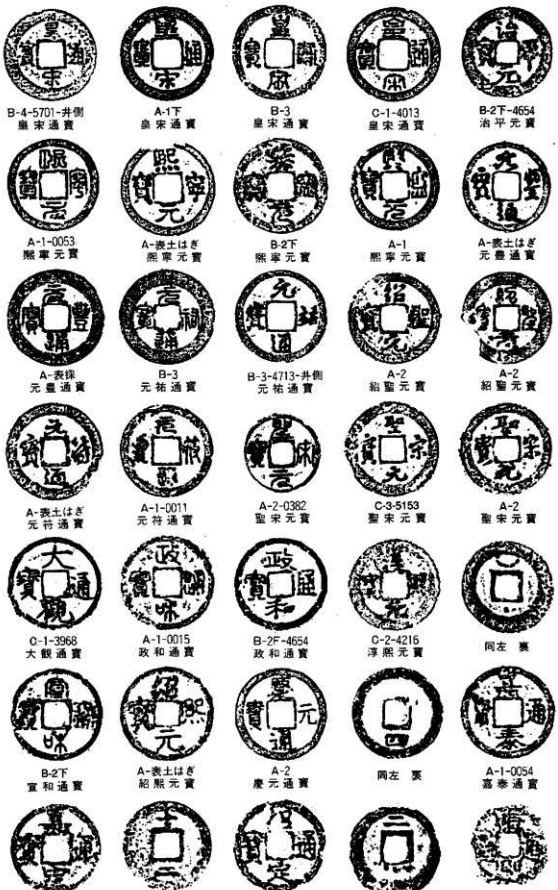


Fig.450 出土銅銭拓本 3 (1／1)

第三章　まとめ

(1) 調査成果の総括

まず、博多遺跡群第62次調査の成果を、時代を追って整理してみたい。

本調査地点に遺構が出現するのは、弥生時代中期後葉である。これは、祭祀土坑や竪穴住居跡状の不明瞭な落ち込みなどである。また、石包丁の原材を粗割した遺構も検出された（2677号遺構）。集落の中心となる竪穴住居跡を確認した訳ではないが、集落の一角を占めていたとして間違いはないだろう。

古墳時代初頭になると、方形周溝墓が築造された。博多遺跡群においては最大の規模を持つこの方形周溝墓は、本調査区のほぼ中央を東から西へ横断する旧河道のくぼみを利用して溝を設けたもので、この浅い谷地形をはさんだ南側からみれば、実際以上に大きく見えるという視覚的効果を狙っている。もちろん、盛り土もあったであろう。周溝から出土した、方形周溝墓の祭祀に用いられたと思われる土器はすべて畿内系であった。また、方形周溝墓の東側から、これとほぼ同時期の甕棺が検出されており、方形周溝墓に関連した埋葬であろう（2741号遺構・5630号遺構）。

この後しばらく遺構が確認できない時期が続き、次に明らかな遺構がみられるのは、奈良時代後半である。8世紀後半から9世紀初めにかけて、竪穴住居跡、井戸などが営まれていた。

平安時代中ごろの遺構も明瞭ではない。しかし、9世紀後半の井戸（5869号遺構）や9世紀末の木棺墓（5508号遺構）、10世紀後半の土壙墓など埋葬遺構（5475号遺構）は営まれており、このほかにも遺構があったであろうことを予測させる。

11世紀後半代から、遺構は一気に増加する。この時代は、いわゆる「博多綱首」の時代である。12世紀後半には、調査区の北東辺付近で溝が掘られている（1854号遺構）。第35次調査でみられた中世のメインストリートの真下に当たり、メインストリートに先行した区画に伴う可能性を考えなくてはならない。

13世紀中ごろには、調査区を北東から南西に横断する道路が通されたものと思われる。本調査では、14世紀前半までの遺構検出面しか調査していないが、この道路は、おそらく戦国時代まで続いたものと思われる。今回の調査では、道路に沿って建物跡を検出することができた。とても道路沿いの土地利用の仕方を論じられる段ではないが、今後の検討の基礎資料を提示できたものと考える。

以上、遺構を中心にまとめてみたが、次に注目すべき遺物についてふれておきたい。

まず、縄文時代晩期黒川式土器の浅鉢が出土した点が注目される（P.215,Fig.428-1）。博多遺跡群出土遺物のうちでは、最古のものとなる。と同時に、まったく磨滅していないことから、遠くから移動してきた土器とは考えがたく、近くに縄文時代晩期の遺構が存在することを予想させるものである。

本調査においても、東海系の弥生時代後期の土器が出土した。博多遺跡群ではこれまでもS字状口縁の甕、高杯など東海系土器が出土してきたが、今回はパレススタイルの壺が出土した（P.215,Fig.428-10）。

朝鮮系無文土器も出土した（P.215,Fig.428-1）。これについては、福岡市教育委員会の後藤直氏から報告文をいただいたので、後述する。

律令時代の遺物では、石製巡方、銅製丸鞆の出土に並んで、滑石製の丸鞆鋳型が出土した点に注目される（P.217,Fig.429-3）。滑石の石板の一面に丸鞆の方を彫り込んだもので、いささか不格好な丸鞆ができあがる。奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏によると鋳型表面には被熱した土が付着しており、

離型剤と考えられるとの由で、実際にこの鋳型で丸鞆がつくられたことは疑いがない。本来官製品でなくてはならないはずの帯金具を、私製していたことになり、興味深い資料である。

墨書須恵器も多数出土しているが、「佐」の墨書に注目したい（P.217,Fig.429-7）。博多遺跡群では、築港線関係第2次調査で「長官」と墨書した須恵器が出土していた。今回の「佐」の出土で、長官と次官が揃った形となる。

中世の土器では、14世紀に下る楠葉型瓦器が出土した点に着目したい（P.219,Fig.431-15～17・25～27）。これまでは、楠葉型瓦器は1期または2期（＝11世紀後半から12世紀）にほとんど限られていた。今後も、出土が期待される遺物である。

ガラス坩堝に関しては、山崎一雄氏から玉稿を賜った。付篇としたので、ご参照いただきたい。

銅銭では、パスパ文字で書かれた「大元通寶」が出土した。第35次調査以来2枚目の出土だが、わが国においては博多遺跡群以外からの出土は報告されていない。韓国の新安沈船からの出土例がある。新安沈船は、博多をめざして航海途中だった船で、パスパ文字の「大元通寶」が新安沈船と博多でしか出土していない点は、大陸への門戸としての博多の性格を考える上で、示唆的である。このことは、国内ではほとんど流通しなかった大型銭（崇寧重寶・熙寧重寶など）が、博多遺跡群ではしばしば出土することと関連して、検討する必要があろう。

さて、散漫なまとめの列挙はこれぐらいにして、若干の課題についてふれてみたい。

（2）朝鮮系無文土器とみられる土器片について

同一個体とみられる甕の口縁部破片が2片ある。胎土には直径1㎜ほどから3～5㎜の白色石粒が多量に混入され、また黒色の微石粒とごく少量の金雲母微粒子も混じっている。色はやや橙味を帯びた淡い黄褐色で、大きい方の破片の内面はやや灰色味を帯び、口縁部内外面の一部が橙色である。小さい方の破片の口縁部内面は橙色である。

外反する口縁部に薄い粘土帯を貼り、粘土帯下部を時計方向に指で連続的に押えつけて胴部に密着させる。指で押えた部分はくぼみ、粘土帯と胴部との間には小さな段ができる。胴上部は下方に開き、胴最大径は口縁部径より大きくなる。器面が荒れているが、指で押えた凹みには横なでの跡が残り、口縁部内外面は横なで調整したことがわかる。粘土帯を貼付ける前に胴部は粗いハケ目調整する。

このような土器は韓国無文土器時代後期後半の断面三角形粘土帯甕に近いが、類例は少ない。申敬澈氏（慶星大学校）・安在晧氏（東国大学校）の教示によれば、粘土帯の幅が長く、厚さが薄い点、粘土帯下部を連続的に押える点で、韓国南海岸地域後期終末の無文土器にもっとも似ているという。

この種の土器がまとまって出土したのは、韓国南西端の全羅南道海南郡松旨面郡谷里貝塚の第Ⅱ期層、第Ⅲ期層である〔崔盛洛1987〕。これらは半底長胴の甕で、高さ25～30数cm、口径10～20cm未満、底径7cm前後の大きさで、外反する口縁部に粘土帯を貼り、指で連続的にあるいは少しの間隔を置いて押えつける。器面調整はハケ目やなで。伴出土器には鉢（連続する指押えする粘土帯のあるものと粘土帯のないもの）、短頸長胴の壺、椀、棒状把手付き鉢などがある。報告者は、その年代をB.C.1世紀～A.D.1世紀後半としている。また類似土器は南海岸の慶尚南道三千浦市勒島遺跡1号住居址（本遺跡で比較的遅れる時期）などでも出ている〔釜山大学校博物館1989〕。

これらの土器は層位的，型式的に後期無文土器の中でも遅れるもので，申敬澈氏はかつてB.C.1世紀～A.D.1世紀前半としていたが〔申敬澈1985〕，後に終末期無文土器として鉄器の年代問題とからめ，B.C.2世紀中葉～紀元前後と改めている〔鄭澄元・申敬澈1987〕。年代については確定的でないが，弥生中期後葉～後期前葉前後に並行するとみられる。（後藤直）

崔盛洛　(1987)　海南郡谷里貝塚，木浦大学博物館学術叢書Ⅲ第八冊
申敬澈　(1985)　慶尚三千浦市勒島遺跡，第９回韓国考古学大会発表要旨
郭鍾元・申敬澈　(1987)　鉄末期無文土器に関する研究－南部地方を中心とする下限の考察－，韓国考古学報20
釜山大学校博物館（1986）勒島住居址，釜山大学校博物館遺蹟調査報告第13輯

（３）713号遺構出土青磁碗の墨書について

A区第2面713号遺構から3口の青磁碗が重なって出土した。すでに述べたように伏せて重ねられていたこれらの碗の内側には、墨書が書かれていた。釉の上からの墨書であったために、墨が胎にしみておらず、水洗いすら困難な状況にあった。また、土中での汚染により、器内面には、汚れが付着し、さらに洗浄・判読を困難なものにしている。わずかに文字が判読できたのは、１点だけでそれも部分的な解読に留まった。ここでは、その紀年の解釈を中心に述べることにする。

紀年部分は、次の通りである。

「文□乙丑二月六日丙午」

まず、「文□」が年号であることは疑いないところであろう。そこで、一文字目に「文」がつく年号を探すことにする。前提として、この青磁碗が龍泉窯系の青磁で、体部外面に鎬蓮弁文を配している点があげられる。亀井明徳氏のご教示によれば、鎬蓮弁文の青磁碗は、13世紀にならないと生産されないという。したがって、1200年以前の年号は除外できる。さらに、第2面検出の遺構であるから、第1面よりも年代的に下ることは有り得ない。第1面は、14世紀前半頃におかれるから、少し多めにみても、1350年までの幅で当たれば良いことになる。

こうしてえられた年号は、文永（1264～1274）、文保（1317）だけである。一応、前後に幅を持たせて文治（1185～1189）、文和（1352～1355）、文中(1372～1374）までを見てみよう。これらの中で、乙丑の年があるのは、文永二年（1265）のみである。さらに、文永二年の二月六日は、たしかに丙午にあたる。したがって、墨書の紀年は文永二年＝1265と断定して良いようである。

（４）道路遺構について

第62次調査では、２筋の道路を検出した。１筋は、博多遺跡群第35次調査地点で検出されたいわゆる博多のメインストリートの続きである。ただし、これはその側溝を検出したのみで、路面を確認した訳ではない。もう１筋は、調査区を北東から南西に横断するもので、今回の調査区外で、メインストリートと交差する位置関係にある。ここでは仮にこれを、支線道路、メインストリートを基幹道路と呼ぶことにする。

まず、支線道路の時期について考えよう。これについては、上で検討した713号遺構の年代が参考になる。713号遺構は、第２面調査時に支線道路のすぐ脇から検出した遺構である。厳密にいえば、第２面のやや下位のレベルから掘り込まれており、第3面道路よりは新しい。いいかえれば、第３面の支線道路は713号遺構よりも古く、第２面の支線道路は新しいということになる。

また、第4面では支線道路は見つからず支線道路が想定される場所には、13世紀前半までの遺構が検出されている。したがって、支線道路が13世紀前半まで遡ることはないということになる。

この２点から、支線道路の開通時期は、13世紀中ごろの1265年以前ということになる。

支線道路の廃絶時期については、第１面がすでに14世紀前半の遺構検出面であったことから、それ以降については直接的に知ることはできない。そこで、第１面の支線道路上に残された、以後の遺構について検討すると、中世の井戸や大型の掘り込みがまったく見られないことに気づく。その一方で、

江戸時代の井戸は道路の中央に切り込んでいる。このことは、この道路部分が第1面以後も家地の空間に組み込まれなかったことを示すのではないか。すなわち、間接的な証明ではあるが、支線道路が中世末まで継続していたものと考えられる。

次に、博多遺跡群でこれまでに検出された道路遺構との関わりを考えてみよう。博多遺跡群の中世の道路・街区については、すでに論じたことがある（大庭1993）。本調査の支線道路は、これら博多の街区を形作る街路の一つと言える。これらの道路は、おおむね13世紀末から14世紀初めにかけて通され、中世末まで何回かの作り替えを伴いつつも継続し、天正15年（1587）の太閤町割りによって廃絶したものである。さらに、これらの街路整備の契機としては、鎮西探題の設置が想定される（大庭1993）。

これら、これまでに検出された道路と、本調査の支線道路との大きな違いは、本調査の支線道路の開通時期が、50年近くも遡る点である。これは、本支線道路が鎮西探題の手にならないことを示している。それでは、何を契機に、または、何を対象として道路がつくられたのであろうか。

現代の地図に、中世の道路を落として、どれだけの信頼性があるのか、まことに頼りないことではあるが、とりあえず検討してみよう（P.3,Fig.3）。まず、支線道路を東に延長すると聖福寺の総門あたりに行き当たることに注意したい。本調査地点の東には、基幹道路が通っている。中世の聖福寺は、この基幹道路に面していたものと考えられる。ところで、この基幹道路も博多第35次調査の成果によれば、13世紀末につくられたものという。しかし、その同じ位置のその下層から、12世紀後半の溝が検出されており、それは本調査でも検出されている。すなわち、13世紀末以前にも基幹道路の位置に何らかの区画が存在したことを意味している。聖福寺の創建は、諸史料によって一定しないようだが、12世紀末から13世紀初め頃におかれる。したがって、基幹道路開設以前には、聖福寺はこの区画溝に面していたと見て、大過なかろう。すなわち、本支線道路は、聖福寺の正面からまっすぐ西に延びた道路としてつくられたと見ることができるのではないか。

それでは、聖福寺から西に進むとどこに行き着くのであろうか。現代の地図の上では、櫛田神社の北側の鳥居付近に行き当たる。櫛田神社は、肥前の国神崎庄から勧請された神社だが、その時期は明らかではない。ただし、弘安四年（1281）円爾の高弟鉄牛円心が編んだ「東福開山聖一国師年譜」によれば、有智山寺（＝大山寺）僧義学に命を狙われた円爾は、博多綱首謝国明の櫛田の私宅に守られたと言う（川添1987）。櫛田が櫛田神社に由来する地名であることは明らかで、1230年頃には櫛田神社は勧請されていたことになる（大庭1994）。したがって、本支線道路は、少なくとも聖福寺と櫛田神社とを直線で結んだ道路という一面を持っていたと言える。

聖福寺の開創には、張国安ら博多綱首が関わっていた。神崎庄にも、建保六年から承久元年（1218～1219）にかけて張光安・秀安ら博多綱首との関わりがしられている。本支線道路が通された、ちょうどその時点での両寺社と宋人との交わりが知られないので断じがたいが、支線道路開通の背景として、博多綱首らの存在を考えたい。仁治二年（1242）には櫛田に私宅を持つ謝国明によって聖福寺の南に承天寺が建てられており、時期的にみて、無関係ではないのかも知れない。

以上、不十分ながらまとめと若干の検討を試みたつもりである。もとより、これで第62次調査の成果について語り尽くせたものではないし、何よりも報告できなかった資料が大量に残ってしまった。別考する機会を期したいと思う次第である。

大庭康時　1993「聖福寺前一丁目2番地　－中世都市博多における街区の研究（1）－」『法哈逆』第2号　博多研究会

1994「博多綱首殺人事件　－中世前期博多をめぐる雑感－」『法哈逆』第3号　博多研究会

川添昭二　1987「鎌倉中期の対外関係と博多－承天寺の開創と博多綱首謝国明－」『九州史学』八七・八八・八九合併号　九州史学会

博多遺跡群第62次調査で出土した無釉壺破片に付着した緑色ガラスの化学分析値と鉛同位体比

名古屋大学名誉教授　山崎一雄
奈良国立文化財研究所　肥塚隆保
室蘭工業大学　白幡浩志

1．はじめに

博多遺跡群第59次調査のピット0018出土の無釉壺内に付着していた緑色ガラスの化学成分については福岡市埋蔵文化財調査報告第328集に報告した（注1）。その後これと類似した無釉壺破片およびそれらに付着している緑色ガラスが博多遺跡群第62次調査でも発見されたので，ここにその化学分析結果と前回のガラスと比較した考察とを報告する。

2．破片の形状

分析のための無釉壺の破片は7片（No.1－No.7）で，その形状などは表1の通りでありこの番号はFig.441の番号と一致する。これらの遺物の年代は12－13世紀と推定されるとのことである（本報告所載の大庭康時の調査報告参照）。

3．分析法

壺破片についてはX線回折法により含有されている鉱物を，また付着しているガラスについては蛍光X線分析法とX線回折法により，それぞれ化学成分と鉱物成分とを分析した。またガラスを酸により分解して化学成分の一部を誘導プラズマ発光分析法（ICP法）と炎光分析法（アルカリ元素）により定量した。さらにガラス中の鉛の同位体比を質量分析計により測定した。

注1．山崎一雄，肥塚隆保：福岡市埋蔵文化財調査報告，第328集，p. 87（1993）.

表1　壺破片の形状

破片	1	2	3	4	5	6	7
遺構番号	B2	B2	B2	A4	B2	B2	A4
	3561	4186	3658	1854	3663	4141	2088
胎土	灰黒	赤褐	褐	灰黒	灰黒	灰黒	灰黒
ガラス	緑色	緑色	黄褐	黄色	黄緑	淡緑	緑色
		(一部褐)	(変質)	(変質)	(一部黄に変質)	(変質)	(一部赤に変質)
	厚さ1㎜	厚さ2㎜	薄い	薄い	薄い	薄い	薄い
壺の部分	胴	胴	胴	頸部	肩－頸部	胴	底

4．分析結果

4．1　壺の胎土の鉱物成分

胎土の鉱物成分および含有されている白色粒子のX線回折の結果を表2に示した。

表2　壺胎土および含まれる白色粒子のX線回折の結果

試料		石英	長石	ムライト	クリストバライト	推定焼成温度
No.1	胎土	++	+	+	++	約1200℃
	白色粒子	++	+	−	−	−
No.2	胎土	++	−	+	+	約1200℃
No.3	胎土	++	+	−	−	約1000℃
	白色粒子	+	+	−	−	−
No.4	胎土	++	−	+	+	約1200℃
No.5	胎土	++	−	++	++	約1200℃
No.6	胎土	++	−	++	+	約1200℃
No.7	胎土	++	+	+	−	約1000℃
	白色粒子	++	+	−	−	−

表2においてNo.1の胎土に長石とクリストバライトとが共存することはやや特別な状況である。多くの場合長石は胎土の加熱の途中でガラス化して残存しないが，加熱の時間が短かい場合には長石が分解し終わらないうちに，土器胎土中に含まれていた粘土鉱物が分解してムライトとクリストバライトが生成し始め，長石と共存することがある。No.1の場合はそれに当たるのであろう。従ってNo.1はクリストバライトが生成する約1200度の高温度に保たれていた時間が短いと思われる。

4．2　ガラスの化学成分

壺に付着しているガラスの蛍光X線分析法による結果を表3に示した。原子番号が小さいナトリウムと含有量が低いマグネシウム，アルミニウムの分析値は誤差が大きい。

表3から明らかなように本来緑色のガラスが変質して淡褐色になったもの，即ち，No.2B，No.3，No.4などは多量のリン（P）を含んでいる。これはガラスのX線回折によっても明らかで，No.2Bの淡褐色部分からは鉛のリン化合物が検出された。リンが存在することは前回の第59次調査のピット0018出土の壺付着のガラスの場合と同様である。これはガラスが地中で動物，人間の遺体，排泄物などと接触していたために生じた変化である。今回検出された主な化合物はリン酸鉛（$Pb_3(PO_4)_2$）である。これは前回のピット0018のガラスの変質物$Pb_5Cl(PO_4)_3$とは異なる別の化合物である（注1）。

次にガラスNo.2の表面を僅かずつ削り，表面から内部までの各層について蛍光X線分析を行ったところ，表4のように表面のガラスはリンを含み，鉛とカリウムの含有量が低いなど，かなり変質していることが判明した。このことは出土したガラスの蛍光X線分析をする時充分注意すべきことで，従来見逃されていた点である。変質した表面層を必ず除いて分析をする必要がある。前回のピット0018のガラスの場合には，ガラス層が厚いため，少量の分析試料（0.5g）を採取し，湿式の化学分析を行

表3　ガラスの蛍光X線分析結果

破片	1緑	2緑	2B淡褐	3淡褐	4黄緑	5緑	6緑	7緑	7赤
SiO_2	47.6	45.6	33.3	40.1	25.0	66.7	66.9	47.4	47.1 %
Al_2O_3	0.4	0.15	0.3	0.2	0.1	0.5	0.4	0.1	0.2
Fe_2O_3	0.25	0.38	2.8	0.55	0.84	2.5	0.65	0.3	0.67
CaO	0.3	2.82	4.5	3.6	5.3	0.2	0.2	tr	1.6
MgO	1.4	0.7	1.3	tr	1.0	2.1	1.7	tr	0.8
Na_2O	1.2	0.3	0.6	0.4	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3
K_2O	1.6	1.8	2.9	1.4	1.1	1.5	1.4	2.6	7.9
CuO	0.54	0.33	0.04	0.05	0.44	0.62	0.2	0.74	0.66
PbO	46.8	42.6	31.8	37.2	51.2	25.6	28.3	48.4	40.7
P_2O_5	—	5.1	22.5	16.3	14.7	—	—	—	—

注）7赤は7緑が変質し，着色剤の銅が還元されて生じたものである。—は検出されない。

った。今回のガラスNo.2は最も変質が少ないので，これを主に研究したが付着していたガラス層が薄いため充分な試料が得られず，全成分の分析を行うことが出来なかった。微量の試料についての誘導結合プラズマ発光分析法（ICP法）による結果を表5に示し，前回の結果と比較する。

表4　緑色ガラスNo.2の表面と内部の組成の変化（蛍光X線分析）

化学成分	表面そのまま	0.2㎜研削後	0.5㎜研削後	1㎜研削後
SiO_2	45.6	45.5	35.5	36.5 %
Fe_2O_3	0.38	0.14	0.10	0.12
CaO	2.82	0.01	0.02	0.02
Na_2O	0.30	0.28	0.27	0.26
K_2O	1.8	4.07	11.4	12.4
PbO	42.6	49.2	51.9	49.9
CuO	0.33	0.24	0.23	0.23
P_2O_5	5.1	—	—	—

—は検出されない。

表5の分析値はガラスNo.2の表面から内部までの組成の平均を表現しているとみられる。実際表4の平均値を求めれば表5の右端のようになり，鉛とカリウムなどの値は全体の分析値に近い。これによれば今回のガラスの組成は二酸化珪素41%，一酸化鉛49%，酸化カリウム7.4%（その他を加えて10%）より成るカリウム鉛系（$K_2O-PbO-SiO_2$）のガラスである。前回のガラスも同じ系統に属する。

4．3　ガラスの鉛同位体比

鉛には4種の安定同位体（質量数204，206，207，208）があり，それらの存在比は鉛鉱石が生成し

表5　ガラスの化学分析値（成分の一部）

化学成分	第59次調査ガラス（湿式化学分析）	第62次調査ガラス No.2（ICP法）	表4のNo.2の平均値（蛍光X線分析）
二酸化珪素SiO_2	30.5	—	40.8%
一酸化鉛PbO	59.9	46.5	48.4
一酸化銅CuO	0.38	0.23	0.26
酸化ナトリウムNa_2O	0.14	0.31	0.28
酸化カリウムK_2O	8.37	7.49	7.40

た時の地質年代などにより僅かながら変動する。この存在比を質量分析計により精密に分析すれば，鉛鉱石を区別し，またそれらを使ってつくられた鉛を含んだ遺物を区別することが出来る。さらに産地既知の鉛鉱石と比較して遺物の産地を推定することも可能になる。今回は宰蘭工業大学のFinnigan-Mat262質量分析計を測定に使用したが，試料から鉛を抽出し，測定する操作の詳細はここでは省略する。試料No.2の鉛同位体比の測定値は表6の通りである。他の破片のガラスについては測定しなかった。前回のピット0018のガラス鉛同位体比については未測定であったから今回測定したが，両者の値は近く，同一の鉛鉱石を用いたものと考えられる。これらの値を$^{208}Pb/^{206}Pb$と$^{207}Pb/^{206}Pb$を両軸とする図上にとれば（図1参照），両者は日本産の鉛鉱石が示す範囲の中に入り，長崎県対馬の対州鉱山産の鉛鉱石が示す同位体比と一致する（注2）。即ち両者は共に対州鉱山産の鉱石を用いた鉛ガラスと見られる。

注2．馬淵久夫，半尾良光，考古学雑誌，73巻（1988）199；75巻（1990）385．

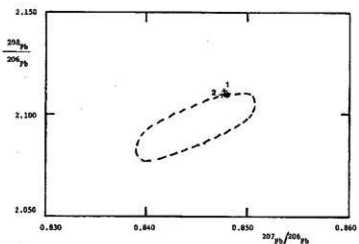


図1　第59次，第62次調査のガラスの鉛同位体比
図中の点線は日本産方鉛鉱の同位体比の概略の範囲，1.218それぞれ第59，第62次調査のガラス，●は対州鉱山の鉛の同位体比を示す（表6参照）

5．考　察

5．1　ガラスの組成

既に説明したように前回と今回のガラスは共にカリウム鉛系に属し，その組成は

	第59次調査（前回）	第62次調査（今回）
SiO_2	30%	41%
PbO	60	49
K_2Oなど	10	10

表6　ガラスの鉛同位体比

試料	206Pb／204Pb	208Pb／206Pb	207Pb／206Pb
第59次調査ガラス	18.473	2.1118	0.8479
第62次調査ガラスNo.2	18.455	2.1099	0.8475
対州鉱山の鉛（注2）	18.476	2.1099	0.8479

鉛同位体比の標準偏差2σは206Pb／204Pb，208Pb／206Pb，207Pb／206Pbについてそれぞれ＜±0.02%＜±0.01%＜±0.01%である。

で表わすことが出来る。カリウムなどの成分をカリウムで代表させて，$K_2O-PbO-SiO_2$三成分系の融解点を示す状態図（注3）に記入すれば，前回と今回のガラスの融解点はそれぞれ約710度，約720度と推定される。前回の報告（注1）でガラスの組成を$PbO-SiO_2$二成分系と見なしたのは不適切で，三成分系と見るべきであった。なおこれらのガラスは組成から見て約450度から軟化し始めるものと推定される。

以上の結果から見てこれらのガラスはこの無釉の壺の中で原料を調合して融解されたものではなく，別に製造されたものをこの壺の中で再度融解して，鋳型などに注入し，製品を造ったものではなかろうか。その理由はこれらの壺の胎土は，その中でガラスの原料を調合し，融解するほど緻密でなく，また耐火度が不充分と見られるからである。また表2の長石とクリストバライトが共存することも壺の加熱時間が短く，充分焼成されていなかったことを示しており，この壺がガラスそのものの製造に使われたのではないことを間接に物語るものである。

5．2　ガラスの産地

図1と表6の鉛同位体比の一致からこれらのガラスの鉛は日本産で，長崎県対馬の対州鉱山産の鉛鉱石を用いて造られたものと推定される。馬淵らによれば対州鉱山産の鉛を用いたものには，太宰府市の冥地塚，福岡市海の中道遺跡出土の鉛錘などがある（注2）。

このように遺物と鉱石の鉛同位体比の一致から原料の鉛鉱石の産地を判定できた例は比較的少ない。

カリウム鉛系ガラスについてはBrill（注4）はこれが中国に限られると述べているが，肥塚の調査によれば12－13世紀の兵庫県上脇遺跡，宮崎県東霧島遺跡，福岡県太宰府市条坊81次調査出土のガラス玉などにはカリウム鉛系（PbO　40－50%，K_2O　5－10%）のものがある（未発表）。また山崎の分析結果によっても京都市嵯峨清涼寺釈迦如来像体内の青色ガラス瓶（宋965年製），長崎市魚の町拿鉢（19世紀前半）のガラスなどはカリウム鉛系である（注5）。ただし清涼寺のものは中国製であるが，長崎のガラスは日本産の鉛が使われている。

以上の事実は中国系の技術によって造られたカリ鉛系のガラスが日本にあったこと，また博多の遺跡群で出土したガラスがそれらに属し；しかも対馬の鉱山の鉛鉱石が用いられたことを示している。これらのガラスが何の目的で製造加工されたかは判らないが，今後この種のガラスで造られた玉，容器などがさらに発見されるならば，さらに多くの情報が得られるであろう。また過去にこの種のガラスが付着した壺などが出土したが，詳細は未調査のものがあり（注6），今後の報告例の増加が期待される。

注3．R.F.Geller, E.N.Bunting : J.Research National Bureau of Standards, 17（1936）283

謝辞一　ガラスの化学分析を援助された名古屋工業大学内田哲男博士，対州鉱山の鉛について教示された馬淵久夫博士ならびに博多における無釉壺の出土状況について種々教示を与えられた大庭康時氏と森本朝子氏に厚く感謝する。費用の一部は山崎に与えられた日本学士院の学術研究奨励金によるもので，ここに謝意を表する。

注4．R.H.Brill:古代アジアガラスの科学的研究．ユネスコ　シルクロード海洋ルート調査。奈良国際シンポジウム'91報告書（1993）72.

注5．山崎一雄。古文化財の科学，思文閣出版（1987）295.

注6．森本朝子によれば博多区冷泉7番地，同155番地でガラスが付着した陶器が出土したことがあるが，詳細は不明とのことである。福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集図版編（1982），同第126集付編（1986）参照.

博多遺跡群第62次調査出土の古代・中世人骨

中橋孝博
九州大学比較社会文化研究科

はじめに

博多は古くは弥生時代から現代に至るまで，国の内外をつなぐ港町としての長い歴史をもっている。そうした街の盛衰と共に，そこに生活した人々がどの様な変化を遂げてきたかを明らかにすることは，人類学的にも興味ある課題となろう。

博多からは既にこれまで相当数の人骨資料が出土しているが，近世期をのぞけばその特徴の窺えるような資料はまだまだ少なく，時代変化や地域性など，不明な点が多く残されている。

1989年冬から博多区御供所町で始められた第62次調査において，新たに古代から中世にかけての人骨が出土した。残念ながら骨の保存状態が悪く，その特徴を明らかにできたのは一部に留まったが，時代的にはこれまで最も不足していた時期の貴重な資料であり，以下に得られた結果を報告する。

遺跡・資料・方法

遺跡は福岡市博多区御供所町の，旧博多市街域に見いだされ，博多遺跡群第62次調査として福岡市教育委員会により，1989年12月から1991年２月にかけて発掘調査が実施された。当遺跡では弥生時代終末期から近世に到るまでの様々な遺構，遺物が検出され，甕棺や古墳時代初頭の方形周溝墓の存在なども明らかにされている。

人骨はその古代から中世にかけての層位中から幾つか副葬品をともなって出土した。出土人骨は計17体を数えるが，今回は特に人骨の保存状態が悪く，四肢の一部などで計測値が得られたに留まった。博多でも粘土中などから出土した人骨はきわめて保存良好な場合があるが，今度の埋土は，有機成分の染み込みによって黒ずんだ，酸性度の強い砂であったため，人骨が強く腐食されたものと考えられる。

時代は上述のように，10−13世紀ころに所属するもので，鉄刀，陶磁器，漆製品などの副葬品を伴出した。

計測は殆ど不可能だったが，四肢骨の一部については，Martin-Saller（1957）に従って実施した。性判定には筆者らの保存不良骨に対する方法（中橋，1988）を援用した。

結果

人骨の性，年齢についての判定結果を表１に一覧する。

以下，各々の人骨について，観察所見を概括しておく。

731号（男性，成年）＝1号人骨

頭蓋と四肢骨が，ほぼ北東に体軸を向けた仰臥伸展位で出土した。体側の左右に鉄製短刀が副葬されていた。

外後頭隆起部の発達度から男性である可能性が高く，縫合が開離していて咬耗が比較的軽度なことから，成年期の人骨と見なされる。

1016号（男性，熟年）＝3号人骨

ほぼ全身骨が体軸を北東に向け，仰臥屈肢の姿勢で木棺に埋葬されていた。この3号人骨のすぐ上層に位置して2号人骨として取り上げられた頭蓋片（右側頭骨）は，3号人骨の欠落部に一致する。おそらく後世の攪乱によって，3号人骨の一部が乱されたものであろう。

身長は不明だが，表2に見るように，かなり頑強な傾向が認められ，粗線の発達も良好である。

1576号（成年男性，熟年女性，小児）

3個体（成人男女と10－11歳の小児）の頭蓋だけが，小穴中に積み重なった状態で検出された。下顎や下顎歯は含まれないので，いずれか他所で骨化した状態の頭蓋骨のみここに再葬したものと推察される。

1716号（女性，成年）

頭蓋から骨盤までの上半身のみ出土。下半身は井戸の掘りかたで切られている。従って下肢の状態は不明だが，上半身の姿勢から考えて，木棺中に仰臥位で埋葬されていたものと考えられる。右肩近くに，中国系の青磁皿を伴っていた。

主に骨盤形状から見て女性であり，歯の咬耗から成年期の遺骨とみなされる。

唯一計測値の得られた右上腕骨の計測結果は以下のようで，同じ博多の天福寺江戸時代人（中橋，1987）などに較べると，女性としてはかなり頑丈な特徴の持ち主のようである。

上腕骨中央最大径　24㎜，最小径　19㎜，中央周　67㎜，最小周　63㎜

表1．博多遺跡群第62次調査出土人骨　保存状態　○＝良好，△＝不良，×＝一部のみ

No	性	年齢	時代	保存状態	埋葬姿勢	埋葬施設	推定身長	副葬品	備考
731	男性	成年	13c後半	△	北東頭,仰臥伸展	土坑	—	鉄短刀2	
1016	男性	熟年	13c？	△	北東頭,仰臥屈肢	木棺	—	白磁碗	
1576-1	男性	成年	13c？	×	不明	土坑(再葬)	—	なし	10－11才
-2	女性	熟年		×	〃		—	〃	
-3	不明	小児		×	〃		—	〃	
1716	女性	成年	12c後半	△	仰臥	木棺	—	青磁皿1	
1912	男性	(熟年)	12c後半～13前	△	不明	流れ込み	—	なし	
1913	男性	熟年	〃	△	〃	〃	—	〃	
1914	男性	成人	不明	×	〃	〃	—	〃	
2204	男性	成人	12c後半	△	北頭,仰臥伸展	土坑	165.7cm	〃	
5438	不明	成年	12c前半	×	不明	土坑？	—	土師器1,坏1,皿3,漆器	
5475	女性	成年	11c前半	△	北頭,仰臥伸展	土坑	—	黒色土器碗1	
5476	不明	成年	10－11c	×	北東頭,仰臥伸展？	土坑	—	なし	
5508	不明	(若年)	10c(後半？)	×	北西頭,仰臥伸展？	木棺	—	内黒土器碗2,土師皿2,青磁水注1	
5684	女性	熟年	11c後半	×	北東頭,右側臥屈肢	土坑	—	土師坏1，白磁碗1	
6000	不明	成年	4c？	×	不明	方形周溝墓	—	なし	

1912号（男性，熟年）

頭蓋のみ出土。下顎はなく，他所で白骨化してからこの場に廃棄したものと推察される。

眉間部，外後頭隆起の発達度から男性，縫合の癒着度から熟年期のものと見なされる。かなり頑強な傾向が認められ，やや歯槽性突顎が見られる。

1913号（男性，熟年）

1912号の近くから類似した状況で見いだされた。やはり頭蓋のみで下顎は無い。

1914号（男性，成人）

前頭骨のみ出土。埋葬遺構，時代その他は不明。

眉間部の発達度より成人男性と見なされるが，詳しい年齢は不明。

2204号（男性，成人）

下半身のみ出土。上半身は後世の井戸の掘りかたで切られている。左右下肢がほぼ平行に並んでおり，体軸を北に向けて仰臥伸展位で埋葬されていたものと考えられる。

大腿骨などの長大さから見て，男性と判定される。年齢はそれ程高齢ではなさそうだが，詳しくは不明。

表2　四肢骨計測値（男性）

		博多62次 (中世)		唐田青木[1] (近世)		天福寺[2] (近世)		桑島[3] (近世)		古毘[4] (中世)		材木座[5] (中世)		九州[6] (現代)	
		1016	2204	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
尺骨															
11	矢状径	20	–	30	13.6	24	13.1	–	–	19	12.8	–	–	63	12.8
12	横径	15	–	30	17.6	24	17.0	–	–	19	12.8	–	–	64	16.5
11/12	骨体断面示数	75.0	–	30	77.7	23	77.9	–	–	19	73.7	–	–	63	74.9
大腿骨															
1	最大長	–	448	31	419.6	20	415.2	11	419.8	18	419.1	11	419.9	59	406.5
2	自然位長	–	–	13	418.0	18	410.0	11	416.7	15	418.1	10	408.8	59	403.2
6	中央矢状径	30	28	40	28.1	17	27.7	16	27.1	19	28.1	69	27.2	59	26.5
7	中央横径	28	32	40	29.0	17	26.9	16	25.2	19	27.7	69	26.8	59	25.6
8	中央周	91	95	39	89.4	17	85.4	14	84.0	19	87.8	69	85.9	59	82.4
9	骨体上横径	–	36	38	33.8	14	30.4	14	30.2	19	32.1	90	31.6	59	29.4
10	骨体上矢状径	–	25	38	25.7	14	26.3	14	23.3	19	24.1	90	23.9	59	24.3
8/2	長厚示数	–	–	12	21.5	13	20.5	11	20.3	14	21.2	9	20.8	59	20.4
6/7	中央断面示数	107.1	87.5	40	97.0	17	104.1	16	107.9	19	101.3	69	102.5	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	–	69.4	38	76.2	14	86.7	14	77.3	19	76.1	90	75.7	58	82.8
脛骨															
8a	栄養孔位最大径	34	–	34	34.4	15	33.7	–	–	20	33.8	–	–	60	30.6
9a	栄養孔位横径	23	–	34	24.9	15	24.1	–	–	20	24.0	–	–	61	23.7
10a	栄養孔位周	93	–	32	93.0	15	91.3	17	89.7	20	90.8	–	–	61	88.9
10b	最小周	68	–	29	76.0	15	73.7	17	73.3	20	74.5	–	–	60	71.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	67.6	–	34	72.3	15	71.9	–	–	20	71.0	–	–	60	77.5

1）中鉢（1993），2）中橋（1987），3）立志（1970），4）中橋・永井（1985），5）鈴木（1956）
6）濱口（1957），阿部（1955），鍾鍋（1955）

計測結果と推定身長の比較結果をそれぞれ表２，３に示した。

骨体はかなり太く頑丈だが，断面に柱状性は見られない。ただし，骨体上部に扁平傾向が認められる。

大腿骨最大長（右450，左448㎜：出土時に計測）より，ピアソンの式で求めた推定身長は，165.7㎝と，この時代のものとしてはきわめて高身長である。

5438号（性不明，成年）

頭蓋骨片のみ出土。首から下の部分は後世に削り取られているため，埋葬姿勢は不明。性別も不明だが，僅かに遺存している歯の咬耗状況から，比較的若い成年期のものと考えられる。顎関節が外れ，顔面は右横を向いているのに対して，下顎は正面向きに水平に置かれた状態にあることから，腐敗後両者の位置関係が変化したものと考えられ，従って土壙ではなく木棺の中に埋葬されていた可能性のあることが指摘されている。

5475号（女性，成年）

頭蓋と下肢骨片のみ出土。その位置関係からみて，体軸をほぼ北に向けた仰臥伸展位で土壙中に埋葬されていたと考えられる。

大腿骨の細さ（骨体横径22，前後径24，周径77㎜），歯のサイズから女性の可能性が高く（中橋，1988），また咬耗状態から成年期の人骨と見なされる。

5476号（性不明，成年）

腹部をコンクリート柱で離断されたかたちで，頭と下肢骨片のみ出土した。顔面は右方向を向いているが，下肢骨がほぼ平行に並んでいることから，仰臥伸展位であった可能性が高い。

破片のみなので性は確定し難いが，歯の咬耗状態から，成年期のものと見なされる。

5508号（性不明，若年）

頭蓋片と下肢骨片のみ。頭蓋と大腿骨の位置関係から判断して，恐らく仰臥伸展位で埋葬されていたものと考えられる。

第２大臼歯までしか萌出しておらず，その咬耗も軽微で，大腿骨の細さなども考慮すると，若年期の遺体と考えられる。

表３　推定身長の比較　（cm）

	男性		女性	
	N	M	N	M
博多62　（中）	1	165.7	—	—
吉母浜　（中）	18	159.7	22	146.5
材木座　（中）	10	159.7	3	146.9
原田青木（近）	30	160.3	15	148.6
上月原　（近）[1]	8	158.9	1	137
天福寺　（近）	24	159.4	20	146.5
桑　島　（近）	10	158.8	5	150.4
粒　江　（近）[2]	—	158.4	—	—
江　戸　（近）[3]	95	159.1	45	146.4
金　隈　（弥）[4]	17	162.7	17	151.3
西南日本（現）	37	157.7	10	146.3

1）中橋（1991）　2）渡辺（1982）　3）遠藤，他（1967）　4）中橋，他（1985）

5684号（女性，熟年）

頭蓋片のほか，四肢骨片が少量出土。ほぼ体軸を北東に向け，上，下肢骨片の位置関係から判断して，右側臥屈肢で埋葬されていたものと考えられる。

大腿骨が細く，粗線の発達も軽度であることから，女性の可能性が高い。

6000号人骨（不明，成年）

方形周溝墓から出土したもので，頭蓋片と歯のみである。咬耗状態から比較的若い成年期のものと見なされるが，性別は不明。

総括・考察

1989年－91年度に旧博多市街区で実施された，博多遺跡群第62次調査によって15体の10－13世紀所属の人骨と，1体の方形周溝墓人骨が出土した。確認された限りでは，いずれも北かそれに近い方向に頭を向け，多くは仰臥伸展位か屈肢で，1体は右側臥屈肢で埋葬されていた。

これまで博多から出土している古代－中世人骨の埋葬状態には，方向，姿勢ともに種々のものが確認されているが，この時代より後世のものには側臥位のものが多いように思われ，今回，仰臥伸展位が多数を占めたことは，あるいは埋葬位の時代性の表れとも推測される。この古い街における，葬送儀礼の時代変化の一端を窺わせるものとして，今後とも注目して行きたい。

人骨はいずれも保存が悪く，その特徴は殆ど掴めなかったが，一部に歯槽性突顎が認められた他，この時代のものとしては極めて高身長の男性や，頑強な四肢骨の存在も確認された。ただ，資料数がまだ少なすぎるので，今回の結果がこの街の住人の時代性をどの程度あらわしているのか，判断し難い。いずれにしろ，博多のような古い歴史とそれを証する各時代の遺構，遺物を持った街は全国でも少なく，今後ともその住人に関する諸資料の充実には期待すべきものがあると考える。

謝辞

当人骨を研究するにあたり，いろいろと御教示賜った福岡市教育委員会の諸先生，諸氏に深謝致します。

文　　献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」，人類学研究２。

遠藤萬里，北条輝幸，木村賛（1967）：「四肢骨」　増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体（鈴木，他，編），東京大学出版界。

原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」，人類学研究１。

鋳鍋命達（1955）：「九州人下腿骨の研究」，人類学研究２。

Martin-Saller（1975）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

溝口静男（1957）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」　人類学研究４。

中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」，人類学雑誌95。

中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」，日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集），

六興出版。
中橋孝博（1991）：「福岡市上月隈遺跡出土人骨（近世・弥生）」，福岡市埋蔵文化財調査報告書257。
中橋孝博（1993）：「福岡市席田青木遺跡出土の弥生，近世人骨」，福岡市埋蔵文化財調査報告書356。
中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」，吉母浜遺跡，下関市教育委員会。
中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」史跡金隈遺跡，福岡市埋蔵文化財調査報告書123。
立志悟郎（1970）：「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人，上肢骨の人類学的研究，下肢骨の人類学的研究」，熊本医学会雑誌40。
鈴木尚（1956）：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」，岩波書店，東京。
渡辺聡子・和田洋・欠田早苗（1982）：「倉敷市粒江遺跡出土の江戸時代人頭蓋の研究」，人類学雑誌90。

福　岡　市

博多48

福岡市埋蔵文化財報告書397集

1995年３月31日発行

発 行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印 刷　大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂３丁目６－62